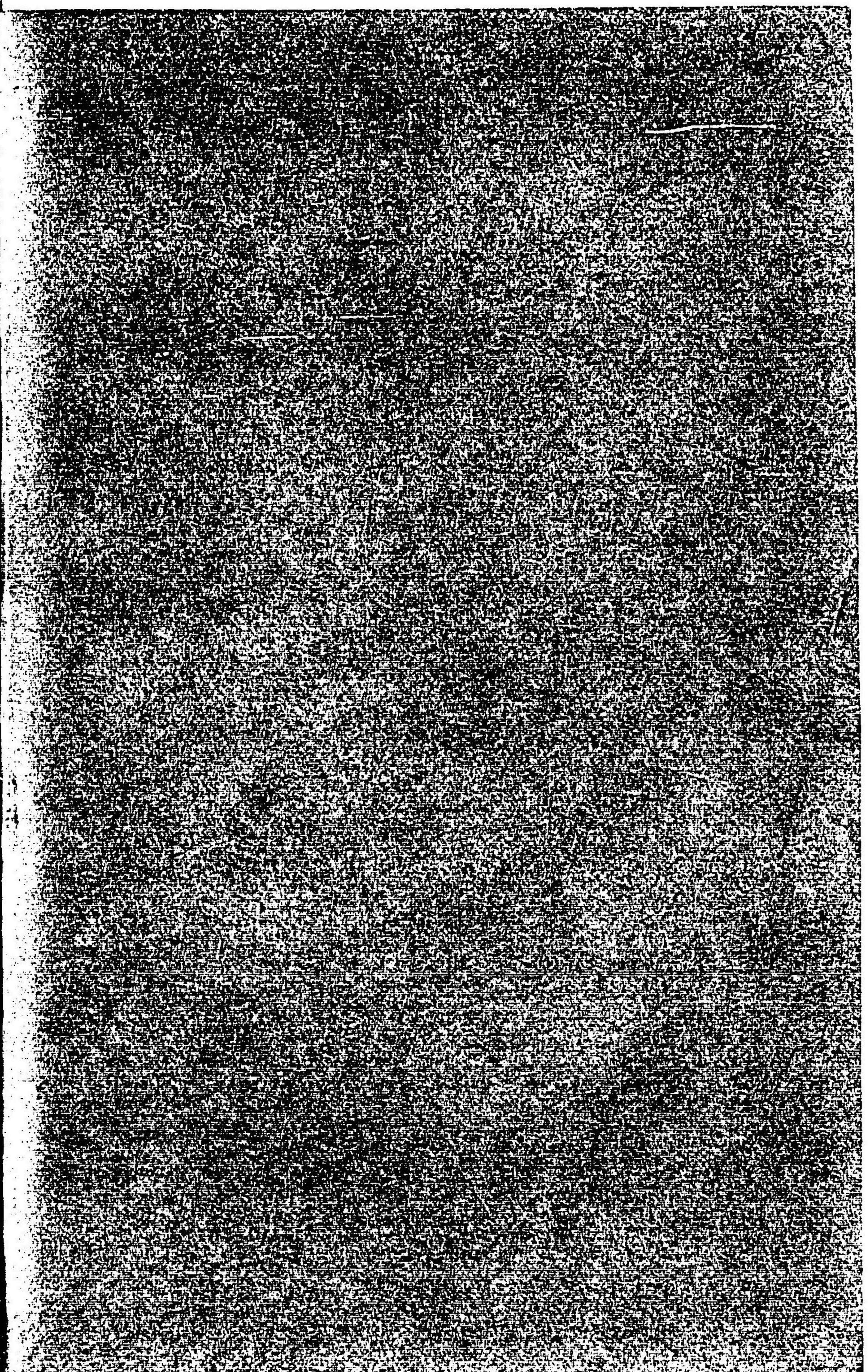


赤
現
代
名
士
の
演
説
振

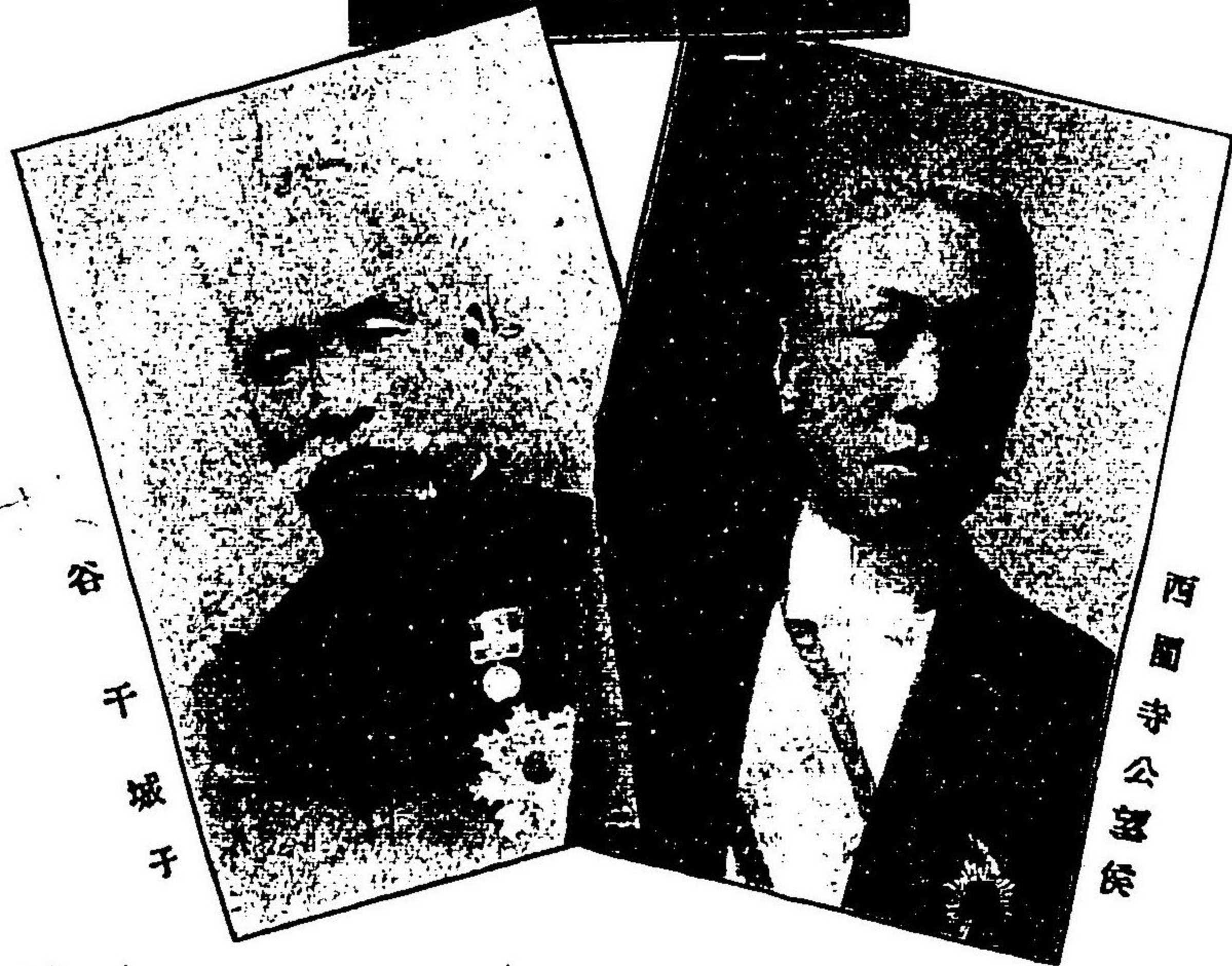
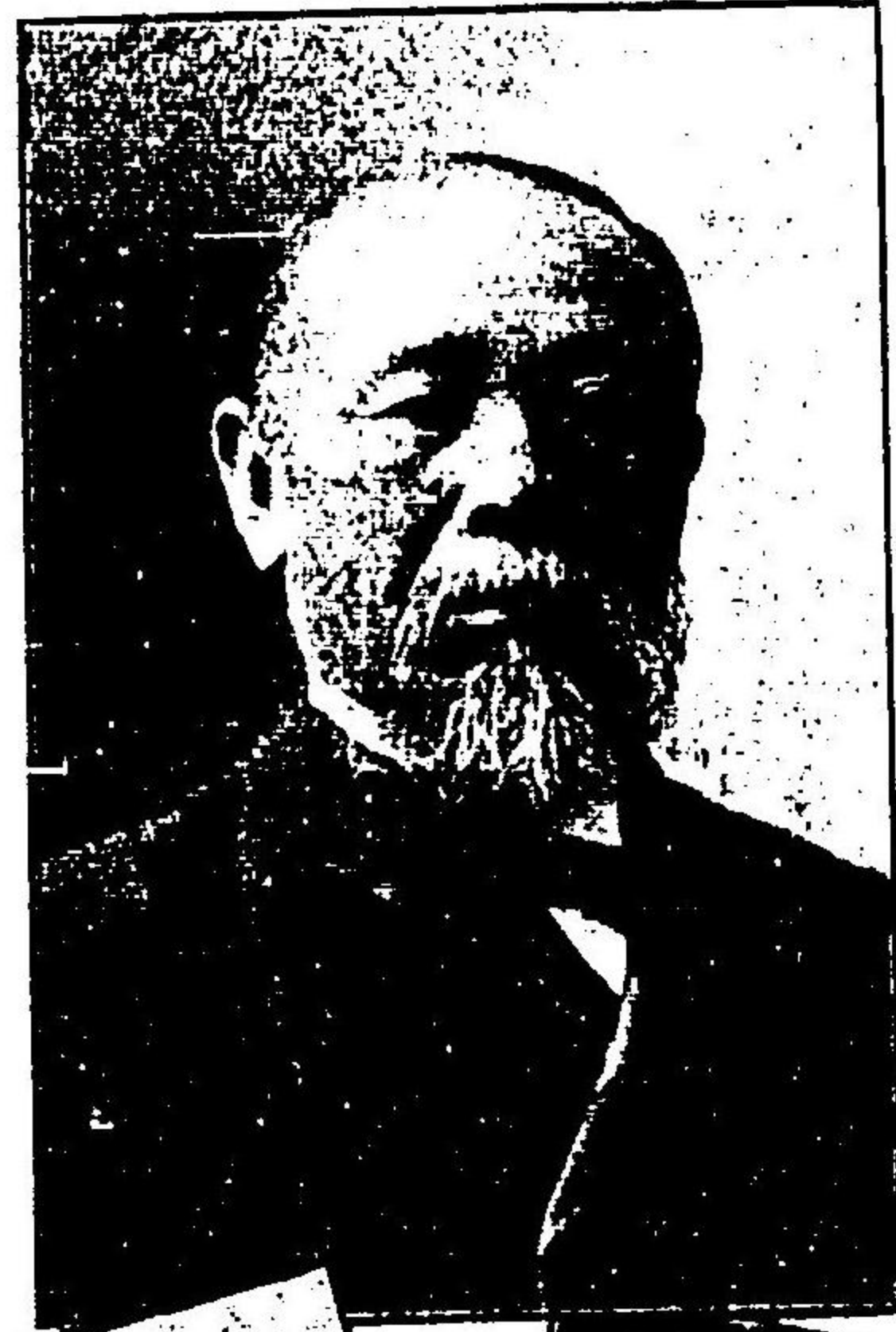


17-328

現代
名士の演説振

明治
41 8 14
内交

伊藤博文公



谷干城子

西園寺公家侯

Vertical text on the right page, possibly bleed-through from the reverse side. The characters are faint and difficult to read, but appear to be arranged vertically.

鳩山和夫氏



高田早苗氏



田尻稻次郎子



尾崎行雄氏



三宅雄次郎氏



花井卓藏氏

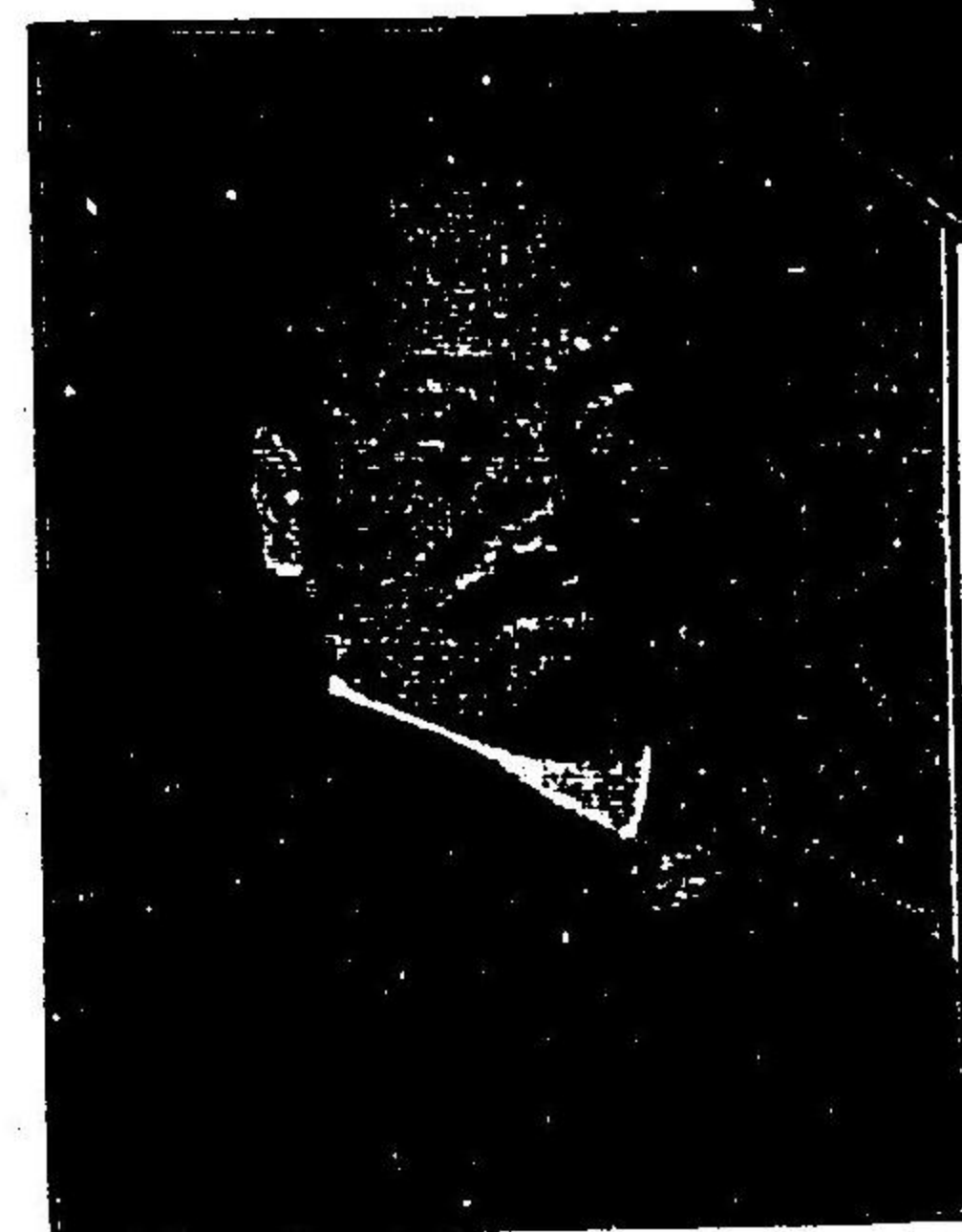
坪井正五郎氏



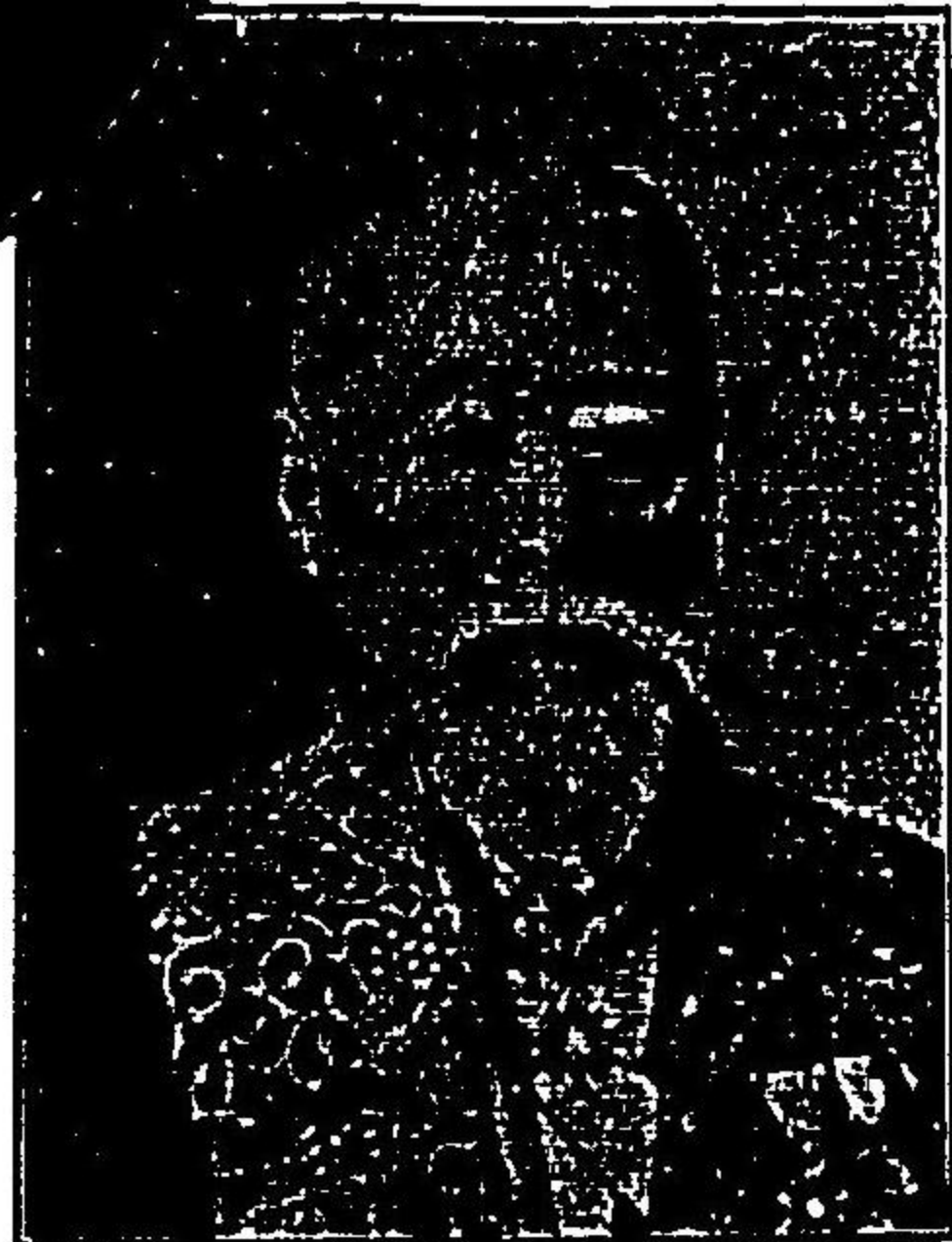
新渡戸稻造氏



澁澤榮一男



氏六静多本



氏釋安野電

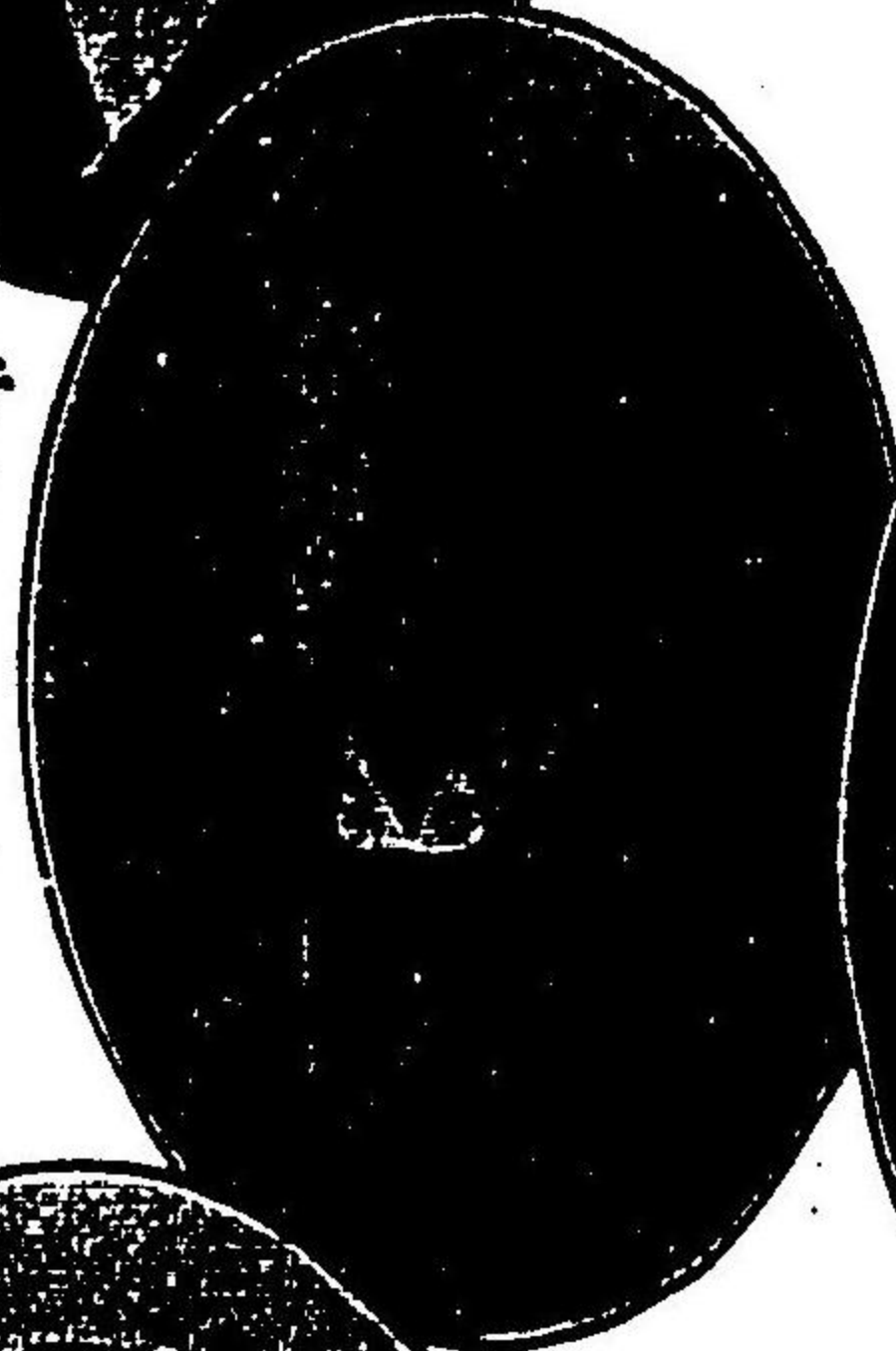
菅一郎氏



田川三郎氏



竹越三郎氏



山路愛山氏



大岡青造氏



城野



海老名正氏



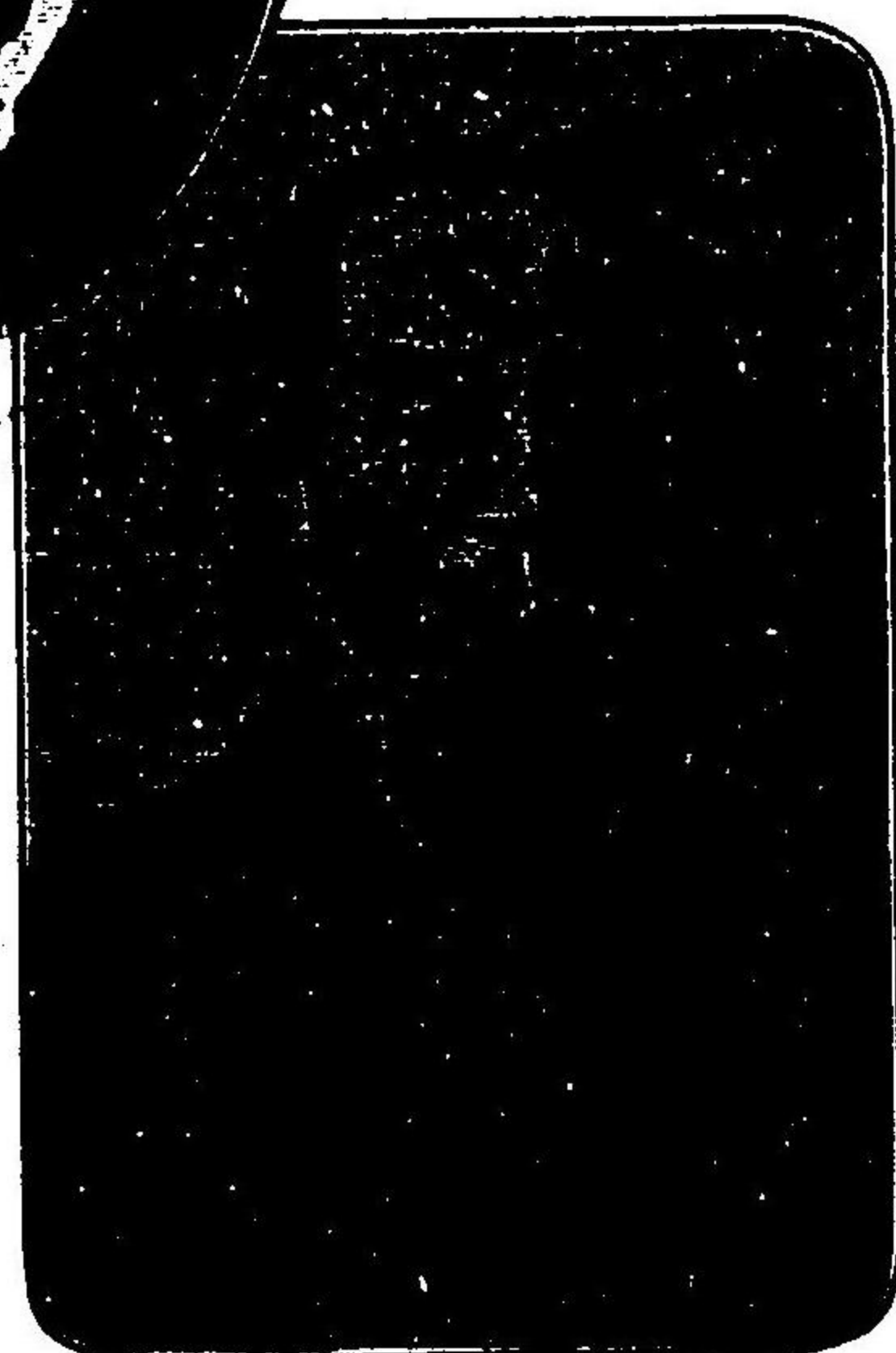
釋宗演師



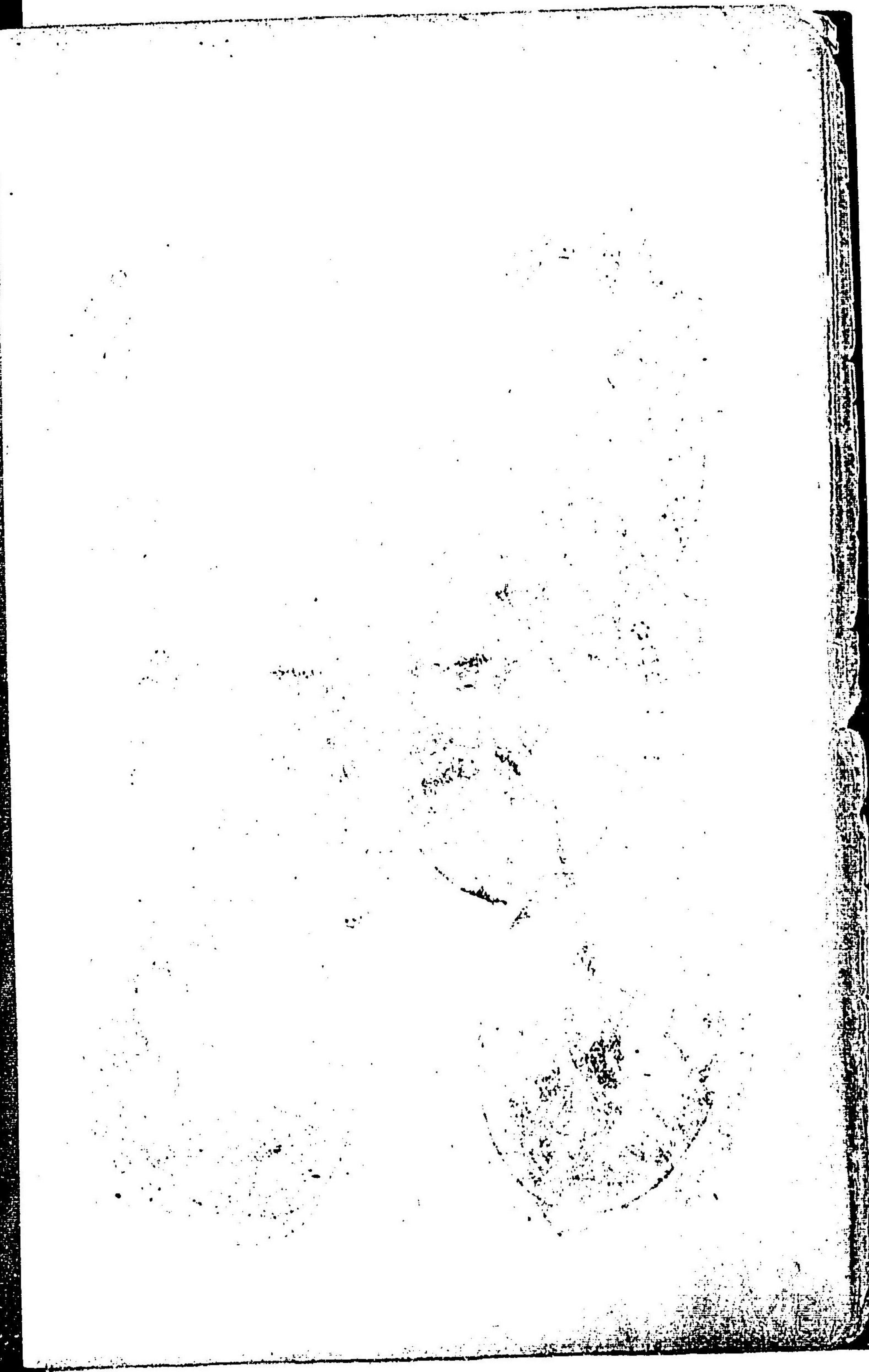
南條文雄氏



江原素六氏



宮川恒輝氏



成瀬仁藏氏



三浦田孝雄氏



柳橋孝雄氏

序

速記は演説の好伴侶なり、演者の聲音は空間に消え去るも、速記の力によりて痕迹を紙上に留む、演者其聲音、意義が聽者の耳に達して、如何の應効あるを驗する能はざるも、其迹を紙上に留むるの文字によりて、自己の缺點を省視し、之によりて以て修練の便利を享く可し、速記によりて言論の巧拙、飾り無く紙上に印せらるゝと、恰も寫眞術の面貌を印して、永く其研醜を留むるが如し、

朋友の切磋は、相互の進歩を助く可し、予は怪む、速記は年を逐ふて大いに進歩するも、演説は之に伴ふて變化せず、社會的講演は稍進境を見るも、政治的演説は之に反す、而して議會の

演説と其速記とに於て、此狀の特に顯著なるを見る、是れ單に演説の衰狀を示すのみにあらず、又思想氣力の萎靡を示す者と言はざる可からず。

小野田翠雨君は速記界の雄なり、速記の場數を経て、練達の技能を有す、耳聴くして腕敏し、各種の演説を速記して其人の能力を實驗し、其辯説、態度等を品評して其文を蒐め、題して名士の演説振りといふ、演者之によりて、自己の短所を發見す可く、讀者も亦演説の修練に參考すべし、演説其者の爲めに、豈他山の石たらざらんや。

島田沼南

はしがき

余嘗て揣らず、『名士の演説振』を草して、漫りに名家の演説振を評し、輕からざる罪を得たり。而もこれ余が二十年來の速記生活より得たる經驗と、同業諸氏より與へられたる材料とに依り、公平に、率直に忌憚なく記述したるもののみ。潜越不遜の罪は、偏に宥恕せられんことを請ふ。尙本書の刊行に當り、世の注意を請はんとするもの二三あり、左に之れを擧げん。

一、本書は曩きに讀賣新聞紙上に連載して、大方諸賢の劉覽を辱うせしもの、今回同社の承諾を得、更に増補訂正して、刊行する事とせり。

二、本書所載名士の順次は、唯心に浮みたるまゝ、又は材料

を得るに従つて、起稿したるまでにて、速記者泣かせ五人男を巻頭に掲げたる外、他は全く次第不同なり、右了承を請ふ。

三、本書所載の名士六十四人の外、尙、紹介すべき名士多し、されど著者舊冬より兎角健康勝れず、己むなく一時筆を擱き、餘は時機を見て再び續稿に著手すべく、其節はまた愛讀の榮を賜はりたし。

四、本書の起稿に當りて、先輩速記者若林鉗藏、林茂淳、佃與次郎、荒浪市平、長谷川篤、山本新太郎及森本大八郎の諸氏其他辱知諸氏より種々材料を供給せられ、又畫家池上蓮齋氏は本書の爲めに其敏腕を揮はれたるは、誠に感謝に

堪へず、今こゝにこれ等の諸君に對し、深厚なる謝意を表す。

明治四十一年七月中浣

著者誌す

現代名士の演説振

目次

(一)	島田三郎氏	一
(二)	辻新次氏	一〇
(三)	肝付兼行男	一四
(四)	花井卓藏氏	一九
(五)	坪井正五郎氏	二三
(六)	伊藤博文公	三四
(七)	西園寺公望侯	四一
(八)	尾崎行雄氏	四七
(九)	大岡育造氏	五三

目	次
(一〇) 角田眞平氏	五
(一一) 山本權兵衛男	六
(一二) 樺山資紀伯	六
(一三) 三宅雄次郎氏	七
(一四) 本多静六氏	七
(一五) 谷干城子	六
(一六) 田尻稻次郎子	六
(一七) 細川潤次郎男	六
(一八) 鳩山和夫氏	六
(一九) 鳩山春子女史	六
(二〇) 田中正造氏	九
(二一) 澁澤榮一男	九

目	次
(二二) 江原素六氏	一〇
(二三) 高木兼寛男	一三
(二四) 井口あくり女史	一六
(二五) 横井時敬氏	一四
(二六) 成瀬仁藏氏	一七
(二七) 竹越與三郎氏	一〇
(二八) 松本君平氏	一七
(二九) 望月小太郎氏	一四
(三〇) 下田歌子女史	一七
(三一) 釋宗演禪師	一五
(三二) 芳賀矢一氏	一八
(三三) 田代義徳氏	一〇

次	目
(三四)	巖谷小波氏……………一六三
(三五)	三輪田真佐子女史……………一七一
(三六)	棚橋絢子女史……………一七五
(三七)	海老名禪正氏……………一八一
(三八)	加納治五郎氏……………一八七
(三九)	戸川殘花氏……………一九二
(四〇)	加藤咄堂氏……………一九四
(四一)	高田早苗氏……………二〇〇
(四二)	北里柴三郎氏……………二〇〇
(四三)	高島平三郎氏……………二〇三
(四四)	松村介石氏……………二〇六
(四五)	近角常觀師……………二〇四

次	目
(四六)	重野安釋氏……………二一九
(四七)	徳富蘇峯氏……………二二七
(四八)	宮川經輝氏……………二四三
(四九)	田川大吉郎氏……………二四九
(五〇)	石川半山氏……………二五三
(五一)	○圓城寺清氏……………二五六
(五二)	井上豊太郎氏……………二五九
(五三)	木下尙江氏……………二六三
(五四)	○幸徳秋水氏……………二六八
(五五)	安部磯雄氏……………二七三
(五六)	南條文雄師……………二七七
(五七)	長谷川泰氏……………二八一

(五八)	田中嘉一氏	二八四
(五九)	山路愛山氏	二八八
(六〇)	中島觀誘師	二九三
(六一)	嘉悦孝子女史	二九四
(六二)	鷺山彌生女史	二九八
(六三)	大町桂月氏	三〇三
(六四)	新渡戸稻造氏	三〇五

目次終

現代名士の演説振

——速記者の見たる——

小野田翠雨

(一) 島田三郎氏

(上)

速記者泣かせ五人男——一分間五百五十音——不思議な音響——井ノ角、高哲、島三——上すべりがする——證據立つる

▲氏は、當代辯論界に於ける速記者泣かせ五人男の隨一である。我々は二十年來、言論場裏に出入して居るから、大概の演説にはビクともせぬが、島田氏の演説と來ると、チト手應がせぬでもない。氏の主義や論旨の如何は、固より我々の品隣する限りでないが。さて、其辯舌の速度は、優に一分間五百五十音内外であるから、日本人の演説としては、是以上速度のものは先づなからう。速記の技術にかけては、

島田三郎氏

一步も退けを取らぬ斯界の選手でも、氏の演説だけは、大汗ダク／＼である。
 ▲それで氏の演説中、演壇の傍で速記して居ると、氏の舌の上下左右に動く度毎に、喉頭か將た舌頭かは知らぬが、ゴ、ゴ、ゴと云ふ不思議な音響がする。それが微細ではあるが、鋭くもあり、バツと散るやうにもある。恰も汽船が大海原を進行する時、濤聲に和する機關の響に似て居るから妙だ。然しこれは至極微細の音であるから、氏の演説に聴惚れて居る聴衆には、無論聞えまい。恐らく氏自身にも分らぬであらうが、氏の演説を寸語も漏さじと、耳を澄ます速記者には、此響さが手に取るやうに聞える。いづれ何か生理的作用から起るものであらうが、氏の舌や聲帯やが、如何に劇しく使用されるかは、これで見ても知れるのである。

▲世には聴いて面白く、書いて一向引立たぬ演説もあれば、書いてはダメだが、聴いては能いものがある。氏の演説は、聴いても能く、書いても好い。氏が生粋の東京辯士で、サラ／＼とやつて除けらるゝ處は、確かに能辯の價値がある。而して又これを翻譯するに當つても、テニハの謬なく、助字の轉倒も少なく、重言も無要の副詞も

先づ少ない方で、餘り手を入れずに、其の儘文章になるからえらい。初期の議會の頃には、井ノ角（井上角五郎氏）高哲（高梨哲四郎氏）島三（島田三郎氏）を能辯の



島田三郎氏の演説振

三幅對としたものだが、即今井高兩氏は、早く既に辯論界より凋落して、氏獨り今に覇を稱せられて居る所を見ると、喋郎の名遂に空しからずである。其態度は、右手を演壇に突き、左手を後に廻はし、夏は扇を演壇に突きなどして、嚴正であり、洒脱である。大低の人は、イサ壇に上ると、思つた事の半分も

言へぬものだが、氏は腹案した事より二倍も三倍も言ふのださうだから驚く。

▲然し一面から云へば、氏の演説は、あまりに流暢過ぎて、上すべりがする。雄辯と云はひよりは、寧ろ多辯の方で、俗に云ふ壁板に水、一本調子だ。自然其語數に反比例して、感動を與ふる事に乏しい。そして尙ほ氏が癖とも云ふべきは「證據立つる」と云ふ語を、何度も繰返す事である。今てこそ改良されて、餘り出ないやうになつたが、六七年前までは、無暗矢鱈に「證據立つる」が出たものだ。少し誇大に云へば、十分間に六七度は出る。甚しきに至つては「冬は寒い事を證據立つる」「夏は暑い事を證據立つる」と連發して、速記を翻譯して見ると「證據立つる」が行列をして居たものだ。

(中)

私は思ふ——論語と管子——氏の孔子論——百年之肝有養人——
うお馴染——冒頭が長い

▲それからもう一つ氏の癖は、演説の段落に「私は思ふ」と云ふ語が能く出るのである。「證據立つる」の方は、大分少なくなつたやうだが、「私は思ふ」の方は、今尙

ほ盛んに用ゐられる。例へば「斯くの如き事と私は思ふ」「さうなければならぬと私は思ふ」と云つたやうな調子で、殆んど「私は思ふ」で持切つて居る。聽いて居ては、氏の能辯の爲めに、左程耳觸ではないが、若し能辯ならざる人が、氏の如く「私は思ふ」を亂發したならば、随分聽苦しいであらう。此「證據立つる」や「私は思ふ」の如きは、全く氏の言葉の癖だらうと私は思ふ。

▲また氏の演説には、必らず附隨の書物がある。それは論語である。氏の如何なる方面の演説にも、論語の出ない事は稀だ。さつと論語の或一章を引證せらるゝのが例である。尤も現代の名士で、その演説中に、能く論語の出る人が三人ある。それは谷干城子、澁澤榮一男、島田氏である。谷子の如きは、常に論語を座右より離さぬと云ふ位である。澁澤男も能く論語を引用して、縷々説明される。氏の如きも、餘程論語は御好ましく見える。余の同業煙崖君は「氏の孔子論を速記したことがあるが、なか／＼精細緻密の觀察で、其熱心に評論せられた所は、最も正鵠を得て居て、他の諸名家の孔子論も、十數回速記したが、自分は島田氏には、非常に敬服した」

と評つて居た。

▲それに今二つ面白いのは、氏の教育講話に、好んで管子の『一年之計有植穀十年之計有栽樹百年之計有養人』の語を引用する、事である。何時も教育の講話には、此管子を引張り出されて、其意味を敷衍する、事が、殆んど常例になつて居るやうだ、氏の講話が佳境に入ると、一段聲を張上げて『諸君…管子に…』と來ると、ソラ御出なすつた『百年之計』だらうと、余は鉛筆を休めて一息する。氏の講話中、管子の一段だけは、もう御馴染であるから速記するに及ばぬ。優に余の頭腦に記憶して居る。記憶の儘翻譯してそれで寸分違はぬ。傳聞する所に依れば、米のブライアン氏は、從來幾多の演説中、未だ嘗て一回も、同一引例を繰返した事はないと云ふ事である。假令管子の語が、千古不磨の格言にもせよ、教育上適切なる引證にもせよ、其引用が餘りに度重なれば、何となく妙な感じもする。

▲又氏の演説は、比較的冒頭が長がい。『私が此會に出ましたのは…』がキツカケて、出席の理由を長々と述べられる。全く演説の三分の二は冒頭と云つても宜

い位なのだ。

(下)

豆蔵演説——聽衆が動く——實は不得要領——聲が潤れぬ——年と共に益圓然——帝國議會の花——千回以上の演説——代りが喰へぬ——電話に因る——斯界の恩師

▲楠本西州男が、嘗て氏の演説を評した事がある『鳥田のは豆蔵演説である。それは何う云ふ譯だと云ふに、鳥田の演説は確かに旨い、旨いけれども、彼の演説には癖がある。演説をする場合に、他の人ならば一時間掛るものを、鳥田なら廿分か卅分て遣つて除ける。唯、速度が早い一方で、ペラ／＼／＼喋舌つて了る。時間は少なくて、内容——言葉の分量が多い。さうして其早いのを、彼自身も得意として居るやうだが、演説と云ふものは、聽衆に能く解らなければ役に立たぬ。鳥田の演説は上手に違ひないが、其割合に感動が起らぬ。又鳥田の演説は、一部分の人には能く解るが、多數の人には解らぬ。解らぬから始終聽衆がザ／＼／＼動いて居る。ペラ／＼／＼喋舌るのが能だから、あれは全く豆蔵演説だ。我輩の演説は、成るべく解るやうに勉める。演説の目的は、聽衆に解るのにあるのだ。だから我輩の演説には、

満堂水を打つた如くである』と自慢を言はれて居る。けれども曷ぞ知らん、此水を打つたやうなのは、男自身の言はるゝ如く、解つて謹聴して居るのではなく、實際男の演説は不得要領のもので、何が何やら意味が解らず、聴衆が聴かうくと、思はず耳を敬るから、そこで満堂がシーンとなるので、詰り不得要領の爲めにシーンとなるのだ。それを自身だけは解つた積りて、サモ聴衆が感心して居るが如くに思つて居らるゝから滑稽だ。單に辯舌の上から其巧拙を云へば、男の演説と氏の演説とは、それは同日の論ではない。けれども豆蔵演説の評は或は適中して居るかも知れぬ。

▲然し大低の人は、二時間以上の演説になると、聲も涸れ、態度も自然崩れるが、氏に限つて、二時間が三時間でも四時間でも、聲も涸れず、態度も一向に變はらぬ。終始同一調子で、平然として辯論を續けられるのは、如何にも美事なものだ。近來は又年と共に益、圓熟の境に入つて、一議會に何うしても氏の演説がなくてはならぬ程で、氏の辯舌は、日本議會の花と云つても可いのである。それに千回以上の演説

をされた人は、日本に氏一人くらゐのものであらう。氏の如きは眞に先天的辯士である。

▲氏の演説は比較的『カラカラ』『ソレカラ、コレカラ、アリマスカラ、致しマスカラの類』の接續詞が多いので、一寸聴くと、段落がないやうだが、速記して見ると、それは立派である。けれども此カラカラの立續けて、四時間以上も喋舌されると、随分速記者は閉口する。嘗て青年會館で、氏が三時間以上の獨演説をされた事がある。其時に、某々速記者が四人で、十五分交代で速記しての歸途、空腹を充すべく、小川町の或蕎麥屋へ遣入つた。其内の一人は、非常に蕎麥が好きで、平生は七八杯も平らげる豪傑であるが、其日に限つて代りさへ命せぬ。他の三人が怪しみ問ふた所が、其答が面白い『イヤ今日は島田を一時間も速記したら、肩が張つて横腹が痛くて、蕎麥のツルツルと咽喉へ遣入る音が妙に響いて、代りさへ喰ふ勇氣がない』と云つた珍談がある。其位だから氏の辯舌を完全に書ければ、立派な一人前の速記者としてあるのだ。

▲氏の辯の早いことは、速記者達が云ふばかりでない。氏の知人の或る人の話に「島田君から電話のかゝるのは宜いが、御自身に電話口にかゝられたら大變だ。早言て聴取れない。實に閉口する。ペラ／＼ペラ／＼少しも間隙なしに發音(?)は聞えるが、何を言はれるのかサツパリ分らない。僕一人ばかりでない、誰でもさう言つて居る。御當人は御氣が付かれないのかしら。』と成程さうであらう。然し氏の如き能辯家あつてこそ、我々速記者の刺激劑となり、興奮劑となつて、其技術を磨くのであるから、一面速記者泣かせの隨一たる氏は、一面斯界の恩師として、大に感謝せねばならぬのである。

(三) 辻 新次氏

二重の語——切れ／＼の語——意味を爲さぬ語——アリマスノデア
リマス——鼻の穴が狭い——演説機より議長機——非常な精勤——
極めて御多忙——教育の爲め

▲氏の演説は、言語も明晰で、且莊重で、聴取り易いけれど、さて速記しあげて

読んで見ると、如何にも二重の語や、切れ／＼の語や、意味をなさぬ語が多くて、其儘出せば速記者の不信用となる。だからこれを物にするには、餘程の骨折である。

辻新次氏の原稿演説



詰り演説が極めて風變りである所から、速記者泣かせ五人男の内に擬せられて居るのだ。▲氏の言葉癖は『ソレカラ／＼』が矢鱈に出ると、御丁寧に『ゴザイマスノデアゴザイマス』アリマスノデアリマス』と来るから、イヤイヤ耐つたものではない。先づ氏の演説の雛形を示せば『元來もと此教育と云ふ…最も重んずべき…言を俟たぬ事であり、あります。であります、それから教育に従事するものもであります、それから教育に従事するものも

最も尊重…尊ぶべき職務であると云ふ事を…』と云つたやうな工合で聴いて居ては、左程耳觸にならぬかも知れぬが、速記を見ると、全く意味を爲さぬ。夫故速

辻 新次氏

「記者は、或は『…』を用ゐる、或は『—』を用ゐる、又は『？』を用ゐて、苦心慘憺、これにお化粧を施す。それでも旨く往かぬ。此點に於て速記者泣かせの資格は十分にある。

▲それに氏は、鼻の穴が少し狭い。速記席から見上げると、小さいのが際立つて見える。自然鼻息が荒く聴えて、氏の辯舌を打消す事のあるには、随分困難する。或人の説に、速記は神聖であるから、二重の語があらうが、切れぐの語だらうが、意味を爲すまいが、鼻息で聴えぬ所は聴えぬて、其儘翻譯して出したら可うてはないかと云ふが、營業となると、まさかさうは往かぬもので、成るべく論旨を傷けぬやう、口調を好くして、讀まれ得るやうにしたいと、なか／＼苦心せねばならぬ。▲傳聞く、氏は非常の精勤家で、何事も綿密に處理し、議案などは徹頭徹尾、一字も漏さず精讀され、これが爲め往々夜を徹する事があるさうだ。其點は如何にも敬服する。が、其傳で速記の原稿なども、なか／＼精細に檢閲されて『イヤ自分は斯う云ふ不味事を言つた覚えはないが…』など、他に小言を言ふ事もあるさうだ。

だ。それかあらぬか、近來は頻りに朗讀演説をされる『私はこのに書いたものがあゝるから、これを讀上げます』と云つて、原稿其儘を朗讀されたり、地方などへ往くと、帝國教育會で印刷したものを、其儘朗讀される事もある。

▲然し演説はさう云ふ風だが、教育會で議事など開く場合に、議長としての手腕は、なか／＼旨いものだ。議場騒然、此處彼處より發言を求むる際なども、少しも狼狽の態なく、嚴然として『何番には發言は許しません』もつと靜かに發言なさい』と、ピシ／＼遣付ける。演説振は零だが、議長振には云ふに言はれぬ旨味がある。

▲氏に今一つ面白い癖がある。帝國教育會などで、名士を聘して講話を請ふ時に、氏がこれを聴衆に紹介する文句が、いつもちやんと極つて居るから可笑しい『諸君、これから何々君の御講話があります、何々君は極めて御多忙中を、教育の爲め御出下すつたのでありますから、其御積りて謹聴を願ひます』と云ふ。それから其講話が濟ひと『何々君は極めて御多忙中を御出下すつて、御講話下すつたのでありますから、謹んで私から御禮を申上げて置きます』と『極めて御多忙中』を繰返す。次の講演者

が壇に上れば又同じ板で押したやうな文句で、紹介もし、禮も云ふ「教育の爲め」と「極めて御多忙中」は必らず出るのである。

▲斯くの如く氏が極めて御丁寧であり、いつも「御多忙中」の紋切形を繰返し、教育の爲め」と云はるゝのも、詰り氏が文部次官として多年令名ありしだけそれだけ、中心誠實の人であるところが發露されるのであつて、其辯舌に依つても、氏が如何に濃厚篤實の君子人であり、又如何に熱誠なる國士である事が、證明さるゝてあらうと思ふ。

(三) 肝付兼行男

(上)

雄辯拙辯兼帯——語尾が消える嚴正秘密——我儘と思へば輕し笠の上——閣下は將官以上——其様な頓馬はない——至つて難物

▲氏の演説は、雄辯拙辯兼帯の方で、滔々と説起す所は、如何にも雄麗であり、莊重ではあるが、肝腎の語尾がハツと消えて了まふ。「ア、リ、マ、セ、ン」だか「ア、リ、マ、ス」だ

か、頓と聽取れない。然も其語尾不明の辯舌を以て、二時間三時間に渉る長演説をされ、術語が出る、方言が出る、精細なる數字を以て埋められたる統計表を、淀みなく讀上げる。イヤ速記者は耐つたものではない。

肝付男統計表朗讀



其上述記の檢閲が嚴重で、ゴザイマスとゴザリマスとの相違まで指摘されるのであるから、此點に於て、速記者泣かせ五人男の内に數えられてあるのだ。

へ男の氣象嚴正にして然も綿密精細なる事は、獨り辯論の上のみならず、各方面に

肝付兼行男

も現はれて居る。先年博文館の故大橋乙羽氏の渡歐送別會が、澁谷の長田秋濤氏方に開かれた時、餘興に松林伯知が、義士大高子葉傳を一席口演た。其の中に例の『わがものと思へば軽ろしかさの雪』の句も出た。スルト男は『ヤ、お前は感心ぢやな。わがものと思へば軽ろしとやつた。大抵の俗物は、思へば軽ろしとやる。輕ろしは不可ぬ。是非輕ろしとやつて欲しいが、成らう事なら、我雪と思へば輕ろし笠の上と、正しくやつて貰りたいものだ』と注意された。伯知は又日清海戰談を口演した。其のうちに、我が海軍の下士卒が、艦長の佐官に對して、閣下々々と言つて居る。スルト男は又口を開かれて『伯知君。お前にも似合はぬ事を云ふ。軍隊で閣下と敬稱は、將官以上に限る。佐官では閣下とは敬稱ぬ。如何に講談とは云へ、日本軍人に其様な頓馬はないから、以後注意したら可からう』と云はれた。如何にも御尤てはあるが、其筆法で速記者にも對するるのであるから、氏の演説を速記するのは、至つて難物としてある。

(下)

海上権力史論——拍手急聲の加し——コケの一心——口の先で小言を云ふやうな口調——海軍思想鼓吹——原照澤山——數字擧出——寶船

▲男の御得意の講話は、マハム氏の『海上権力史論』である。言ふまでもなくマハム氏は、米國有數の戰術家て、海軍にかけては、非常に見識のある人だ。男は此マハム崇拜で、三四年前までは、日本全國到る所の講話が、大抵は此『海上権力史論』で持切つて居た。始めて聴く者は、男が態度嚴正、辯舌壯重、滔々と此書の内容を説き、マルタ、スエズ、ジブラルタル、を對馬、津輕海峽、臺灣海峽と對比し、或は大奈翁を品騰し、或はネルソンを評論する、所は、如何にも壯快で、且有益で、演説の一節を終る毎に、拍手急聲の如く起るのが常であつた。けれども余は此講話を五六回も速記して居るから、ア、又あれかと、實は多少ウンザリしたのだが、然しお蔭で男の演説の呼吸を呑込み、さしもの難物も、後には至つて速記し易くなつた。所が此呼吸を呑みせず、コケの一心に速記しやうものなら、往々失敗する。男は少しく意味の通せぬ速記原稿は『此速記意味不通なれば返戻す』と、會主へ突戻さるゝ事

もあるさうだ。島田氏も「此速記支離滅裂検閲する能はず」と朱書して、突返える。事が偶にはあるさうだ。尤も島田氏のは辯が早いとは云へ、聴取れぬと云ふ程ではないから、速記の不完全なのは無論速記者の罪だが、男のは今言ふ語尾が判然せず、ちよいと方言が出て、其上原語澤山、數字續出、然も口の先で小言を云ふやうな口調なのだから、速記の充分ならぬのも、強ち速記者の罪許りてはない。

▲所が男の演説が、近來は大變に圓熟して來た。昨春、本郷の日本女學校の講話會で、「寶船」と題して、例の海事志想鼓吹の演説されたのを速記した、某速記者の談に「今度の肝付男の演説は、語尾も判明し、調子が非常に練熟して來て、これなら聴いても面白く、速記しても物になる」と云つたが、成程近來男の演説が、一層の垢抜かして、上手の上にも上手になられたやうだ。何はしかれ、男が多年到る所に、其雄辯を奮つて、海事志想の發達に勉められ、國民の元氣を鼓舞作興された功勞は、實に多とすべしこととて、近く日露の役に、然かく我が軍の大勝を博したのも、氏の辯舌が興つて大に力あることと思ふ。果して然らば男の辯舌の如きは、世に珍重すべきもの、一つであると思つて、決して過稱ではないのである。

(四) 花井卓藏氏

速記者泣かせ三博士——如何にも多辯——肩が張つて堪らぬ——五
段の論法——法律づくめの頭——熟語の不熟語——精力非凡

▲六七年前までは、島田、坪井(正)、肝付の三氏を、速記者泣かせ三博士と稱つたものだが、昨今は、辻、花井の兩氏が加つて、五人男となつたのである。氏の聲は稍太くて響く所があり、盛んに辯論する時は、一寸聲を揮ふやうに聞えるが、速記と云ふ上から云へば、さう困難する程の辯ではない。けれど、氏は如何にも多辯で、三四時間に渉る演説が多いから、肩が張つて堪らぬ。此點が速記者泣かせなのだ。

▲昨年の議會で、刑法改正委員會が十數回開かれたが、其速記録を見ても、三分二は氏一人で喋舌つて居られる。御得意の法律論とは云へ、如何にも縦横無盡、思ふ

事を思ふが儘に辯論されて居る。其多辯誠に驚くべしである。今春の議會でも随分喋舌つて居られる。

花井卓藏氏の演説振



らるうちに、後の第二段の主旨を考案し、第二段を辯じつゝ、第三段の論旨を工夫されてあるかの如くに見える。斯く咄嗟の間に工風考慮を廻らざるゝに拘らず、條理

▲氏の演説は、大抵是を五段に分ち、一段を又五六節に分つて、極めて精密に論述される。而も口調も態度も極めて好いので、聴いて居ても感が快い。我々速記者側の想像によると、どうも始めより其演説を何段に分ち、何節に分つと云ふ腹案があるのではなく、第一段を辯じて居

瞭然として其要を得て、流石に法律づくめて頭の練つてある人は違つたものだ。

▲氏の演説で、速記者の困難するのは、氏自身の製造にかゝる熟語、否、不熟語を多く使用する事である。翻譯の文字を當嵌める場合に大に窮する。其爲めか、衆議院の速記課へ、速記録の正誤を申込まるゝ事の多いのは、氏が一番であるといふ。速記録正誤の申込の一向にないのが島田氏で、多くて困るのは氏ださうだ。本會議なり委員會なりが終ると、氏は速記課へ來られ、往々夜十二時頃迄も、熱心に速記の翻譯を檢閲される事があるさうだ。さうして翌日又二三時間も喋舌られて、又其速記の檢閲に従事される。我々速記者側では、氏の精力非凡なるに舌を巻いて居る。若夫氏が法廷に於ける武者振の如何は、他日辯護士諸君の辯論振を纏めて書く積りであるから、其時に譲る事とする。

(五) 坪井正五郎氏

(上)

棒を呑んだやうだ——獸聲と鳥音——豎板に水——速記術と速辯術
——ゴリラ、チンパンジー——材料頗る豊富

▲人類學の泰斗、坪井理學博士の辯説を、一言に做へば、まるで棒を呑んだやうである。ノベツ幕なしノツペラボー、ペラ、く、く、と演つて退けられるが、然し何處か腹に應へる所がある。「まるで棒を呑んだやうだ」とは、蓋し適評だらうと思ふ。然も其態度までが、棒を呑んだやうに突立つて居らるゝのだから愈妙だ。

▲博士は有數の能辯家で、其速度は優に一分間、五百五十音を算し、此點に於て鳥田氏と伯仲の間に居る。一人人間の發音は、大略獸聲と鳥音との二つに分かれるやうで、獸のオーオーと云ふ太く短かく幅のある聲と、鳥のペチヤ、細く長く囀づる音の如くに發音する人とある。速記者側から云へば、いづれが速記易いかと云ふに、それは獸聲の方に謳歌して、鳥音の方を難物とする。

▲所が博士の辯舌は、此鳥音の方に屬するので、一度講壇に立れると、水も飲まず、息も吐かず、豎板に水、車に油、富妻那の辯も斯くやと思はるゝ許りに、立續けに述べらるゝのは、それは、美事なものだ。斯くのごとく矢よりも捷き博士の講話

坪井博士の演説振



を、耳より頭腦に傳へ、頭腦より指頭に傳へて、寸語も餘すまじと速記する

其忙しさ、鉛筆を持換へる暇さへなく、また卒業した許りのホヤ、の速記者は、「先生。能くアノ坪井さんの速記が出来たものですな、私はもう眼が廻はつて、速記どころぢやアありません」と云ふのが常である。夫故博士も速記者泣かせ五人

男の内へ敷えられてあるのだ。

▲博士は、それに就いて面白い考を有つて居られる。「僕の辯舌を、世間で早くと云ふけれど、世の中が進歩して、段々と時を経済的に使はなければならぬやうになつて、何事でも早くして用が辨ずるやうになつて来たので、譬へば籠の後へ人力車が出来、それから馬車、電車と進んで来た。手紙を持つて歩く代りに飛脚が出来、それでも遅いと云ふので、郵便制度とまで發達して来て、電信と云ふものまでも出来るやうになつた。文字を書くにも正しく書くに暇がかゝると云ふので、速記と云ふものが發明された。其通り種々進歩して、何事も早く辨ずるやうになつたが、唯、昔と變らぬのは人の話と云ふ事だけは、依然として進歩しない。

▲演説とか、講話とか云ふ事は、昔の通りの遺方であつて、時を惜むと云ふ世の中に釣合はない。故に僕自身だけは、一方に速記術と云ふものが出来たから、一方に又速辯術と云ふを工夫して、成るべく短かい時の間に、多くの事の分るやうに心掛けて居る。他の人は昔風に遅い話許りして居るから、及ばずながら自分一人だけは

他の事と釣合ふやうに、早く話す速辯術を考へて居るのである。さうすれば話す方の人にも速記者の方にも却つて便利であらう。

▲要するに段々と進歩する世の中だから、何人も時間の經濟になるやう、早く話すがやアない、勝手に泣くんだから仕方がない。けれども速記者に悪まれては困り者だから、以後成るべく注意するから、何分御手柔らかに頼むよ。以上は博士が余に向つて語られた所であるが、此談話に徴しても、如何に博士が、鋭敏犀利、然かも無邪氣なる、氣質と辯舌との相似たる事が、發露されて居るであらうと思ふ。

▲氏の辯舌は、古今稀なる速度とは云へ、余等十數年、博士の講話を速記し來りたる者の耳には、御蔭にて人類學の概要を領會し去り、コリラ、チンパンジーも實は聽飽きて、博士の辯舌の急所を呑込んで居るから、さのみ苦にはならぬが、唯、驚くべき事は、博士が常に人類學てふ同一の講話でありながら、其内容はと問へば、或は人類の種類、或は各人種の風俗、各人種の分布、或は何、或は何と、其題目と其趣きを

異にし、いつも新しいもの新しいものと、提供されるのにある。博士の學識の深奥なる、其材料の豊富なる、實に我々同人の敬重推服して措く能はざる所である。

(中)

演説調と講話調——日本人はマレー、朝鮮、アイヌ種族の混交——片假字のハの字とリの字——笑聲潮の如し——人類學の趣味——人類は役者——人類學の系統

▲氏の講話は、趣味に富んで居る。其博覽精確なる學說に、時々滑稽を交えられ、二三時間に渉る長演説でも、決して聴衆を倦ましめると云ふ事はない。博士は「演説調と講話調とは、自から相違のあるもので、講話なら其説を五段なら五段に分つて、順次に第一段から説いて往つても可いが、演説となるとそれでは往かぬ。諸君、私の演説は五段に分ち、先づ一段づつ、説いて往きますと來ると、もう聴かぬうちからウンザリする、さう最初に斷はらずに、種々交互錯綜して説いて置いて、さて諸君以上の所説を大別すると、凡五段になりますと云ふ風に結論せぬければならぬが。僕は勉めて、演説調の方を用ゐるやうにして居ると言つて居られる。それかあらぬか、博士の講話は極めて紛糾錯雜して居るやうだが、其内に井然と段落もあり、脈絡

もある。

▲博士が講話せらるゝ時に當ては、或は黒板に圖を引き書を描いて、一々叮嚀に説示され、或は兩腕を上へ屈し、自身の顔面を指して説明せらるゝから、聴衆には能く了解さるゝのである。又滑稽趣味に富んで居るから、時々笑聲の堂を撼かす事もある。それが博士自身笑顔でもすればまだしもだが、御當人は一向平氣で、眞面目腐つて滑稽をいはれるのだから、猶更可笑しい。聴衆が笑ふと、博士は益々眞面目な、嚴肅な顔をされるのだから、聴衆は愈々堪らなくなる。そして其眼付には一種の愛嬌があるのである。

▲昨春、牛込富久町の成女學校の講話會で、博士が「人類學大意」と題し講話された中に「我々日本種族は朝鮮人、マレー人、アイヌ人の混交であります。體格及び風俗習慣、並びに古代の遺物を見ても、それが證明さるゝのであります。鬚髯の多いのはアイヌ、毛の薄く少ないのはマレー種族で、僕のやうな顔のイヤに細長く、鬚が少く鼻が辣蕪のやうな形をして居るのは、先づ朝鮮種です。尤も鼻に就いては面

白い事がある。亞細亞人の鼻は、先きが丸まつちいから、穴を下から覗くと、片假名のハの字になつて居る。歐羅巴人は先きが尖つて、穴が片假字のリノ字になつて居るから、定めし鼻汁もかみ好たらう」と、黒板に鼻の畫をかいて説明された時には、聴衆は皆妙齡の女子で、箸が轉げてさへ可笑しい時代だから堪らない。満堂動搖めさ渡つて、辯士も速記者も、潮の如くに起つたる笑聲場裏に葬られ去つた事がある。

▲此の人類學は、博士が到る所に講話普及せられて、漸く世人に、其真相が知渡つてあつたけれども、まだ世間多數の人は、人類學なるもの、如何に面白味があり、如何に有益であると云ふ事を知悉せぬやうだから、今、氏の講話の大要を紹介しやうと思ふ。

▲博士の講話はいつも「人類學の趣味」と云ふ事から始まる。其口吻を速記せば斯うである「人類學の趣味」と云ふのは先づ例を芝居に取れば、舞臺の道具立を見、又筋書を見、而して役者の實際舞臺に登るのを見て楽しむ。それを學問に比較すれば、道具立は地理學である。筋書は歴史、人類は役者に當るのである。役者が或事

柄を演じて居るのを見て、面白味を感じるのには勿論であります。然るに今日迄筋書たる歴史と、道具立たる地理とは研究せられ來たつたに拘はらず、働らいて居る役者たる人類に關する事は、頓と忘れられて居たのであります。又日月星辰の運行に關しては、天文學がある。海陸山川の成立變動に就ては、地質學がある。其他金石學、動物學、植物學等があります如く、人のほたらき如何を知る人類學と云ふものもなくてはなりません。殊に現在我等自身が、その役者の一人なのでありますから、趣味は一層深いのであります。

▲又解剖學、生理學、心理學、言語學、社會學等もあるが、是等は皆人類其物の研究にはありませぬ。人類學の系統は、動物學の一部ではあるが、さう云へば動物學は博物學の一部、尙遡つて理學の一部、廣く云へば學問の一つとも云へます。夫故天體と云ふ上で、地球も天體の一部でありながら、別に地質學と云ふものがありませぬ。人類學も動物學の中より獨立さしても差支ありません。況んや吾人々類を一の完全なものとして研究するのでありますから、其趣味も一層深いのであります。

す。

(下)

用意極めて周到——一時間に二萬六千四百二十九字——記憶力の強盛——人類本質論——人類は動物である

▲博士の講話は、用意頗る周到で、一時間でも二時間でも豫め其分量を定めて、きちんと其時間に當嵌まるやうにせらるゝのである。それに例の速辯であるから、言語の分量の多い事は非常なもので、嘗て試に博士の一時間の講話を速記し、これを普通文字に翻譯して、其字数を計算して見たら、漢字假名共全體で二萬六千四百二十九字あつた。これを四百字詰の原稿紙へ書くと六十六枚弱となる。尤も正確な分量を知るには、數回速記して其平均を取つて見なければ分らぬが、然し雜とこれで見ても、殆ど普通の辯の倍に近いと云ふ事が知れるのである。

▲博士の記憶力の強いには、更に驚かるゝので、本郷の東京裁縫女學校で、毎月二回開かれる講話會には、生徒が多いので、毎回甲乙二組に分けて、別々に講演せらるゝのであるが、双方共同じことを同分量に言へと云ふ校主の依頼であるやうで、

博士は双方へ其主意の同一なるは勿論、其分量、其語尾に至るまでも、寸分違はず請説せらるゝには、如何に熟練を加へて御手に入つた講話とは云へ、氏の記憶力の強盛には、同校の職員達も舌を捲いて居る。

▲博士が『人類學の趣味』に續いて請説せらるゝのは『人類本質論』で、これは人類學の根據とも云ふべきもので、なか／＼價值もあり、面白味もあるから、其内の二二節を掲ぐる事とした。氏は先づ『人は動物である』と云ふ事から説かるゝので、『人類は動物であるか』と云ふに、確かに人類は動物の一ツである。尤も歐羅巴諸國でも、人は動物であると云ふ説も、又動物でないと云ふ説もある。人は動物でないと云ふ方の説に、人類には感情、推理力、言語があるが、他の諸動物にはないと云ふ。然し他の動物でも是等感情、推理力、言語がないとは云へない。又佛蘭西の有名な人類學者アカトルファアジは、植物と礦物は生活力有無で違ふ。生活力のある上に知覺運動を備ふものが動物である。人類は其上に宗教心を具へて居るから、礦物、植物、動物が相互に別界を成す通りに、人類は人類で、動物から離れて人類界

を形成すべきものだと言ふ論を主張する。

▲然し此説の當否は、二つの方面より吟味せなければなりません。氏の所謂宗教は、人類悉く具へ居るか如何と云ふ方からと、動物には果して斯う云ふ事が缺乏してあるか如何と云ふ方からと、此二方面から考へねばなりません。第一の方から云へば、野蠻未開人の中には智識の度低く、己れの運命などの分らぬものもあり、又人よりも上のものがあるなど、云ふ信仰を持たぬものもあります。靈魂と云ふ事の考も浮ばぬものもあり、又不滅なる事を考へぬものもあります。又知識の高いために、或研究をなし、或信仰をもつて運命又は優者と云ふ老へを容れず、靈魂の有ると云ふ説、又其不滅で有ると云ふ説を採らぬ人もあります。されば知識の低いものの中にも、高いものの中にも、カアトルファアジと云ふ如き宗教を有たぬ人がある、故に斯の如き宗教心は人類全體に共通ではないのであります。

▲次に第二の方から考へると、諸動物の比較心理學は、今研究の初歩であるから、それを根據として信仰上の事を論ずるのは大早計であります。(中略)一體宗教と云ふものは、想像、恐怖、好奇心、推理力等か、一定のまざり方をすれば出来るものであります。所が是等の想像力も、恐怖心も、好奇心も、推理力も諸動物が有して居ます。一方に於て宗教心は人に普通とは云へませぬ。又一方に於ては諸動物の心の働きが、また明らかに知れて居りませぬから、之を以つて動物と人類と別の證據とする事は出来ませぬ、此所が確かに動物と違ふと云ふ點が無い以上は、人類は動物の一つであると云はねばなりません。其他骨格及び成長の有様其他に徴して見ても、人類は確かに動物の中でありませぬ。單に似たるものに止まるのではありませぬ。其他氏が人類學上より觀察考究せられたもので、面白い説がいくらかもあるが。餘り長くなるから、此位にして置く。

(六) 伊藤博文公

(上)

「デアル」式と「デアリマセ」式——公と大隈伯との比較——氣を以つて勝つ——一分間三百音内外——今回が此度——言葉が婉曲

▲日本の辯論界では「デアル」「デナイ」式と「デアリマセ」「デアリマセン」式との二つに分れて居るが大隈伯は、第一の「デアル」「デナイ」式を用ゐられ、公は第二の「デアリマセ」「デアリマセン」式を用ゐられて居る。然しこれは演説と云ふ上からの比較で、座談の時は、公も重に第一の「デアル」式を用ゐられて、大隈伯は、演説でも座談でも、徹頭徹尾、詰つた縦談的の「デアル」式である。

▲それで速記側から言へば、第二の「デアリマセ」式の方が活氣には乏しいけれど、秩序井然、言語も穏やかに聴えて、至つて速記し易い。第一の「デアル」式は、氣を以て勝ち、言語も強く擧ぐから、非常に速記し難い。故に速記者は、公の演説に謳歌して、大隈伯を難物として居る。然し大隈伯の演説が、我々の技倆に於て速記

ない程の速度ではないが。唯、公の辯論と比較すると、確かに大隈伯の方が早い。それは詰り兩政治家の性格の異なる所を發揮して居るので、辯論に依て其人の氣質

伊藤博文公の演説振



が出来るから面白い。▲嘗て公が某速記者に向つて「我輩は演説をするに當つて苟もせない方で、

多少句を練る、句を練るから餘裕がある、従つて御前方にも速記し易いてあらう」

伊藤博文公

と言はれたさうだが、全く公の演説には餘裕がある。其辯舌の速度は、一分間に、三百音内外で、日本人の辯舌としては、極く早くもなく左して遅い方でもない。又句を練らるので、公の演説を速記し、翻譯して見ると、恰も歐陽脩の文章を讀むやうで、如何にも秩序が立つて居る。夫故聴いても悪からう筈はないが、唯、言語としての抑揚、頓挫、虚々實々の花々しい所が尠くないから、速記したものを見た方が、層一層の價值があるやうに思はれる。これも公の立場として自然さう云ふ傾きになるのであらう。所が大隈伯は一分間三百五十音内外で、『ヤ、これが……オ、それが……』と云つたやうな口調で、左右を顧盼して、意氣頗る揚り、聴いて居ては、大に興味を感ずるのである。

▲それに公の用ゐらるゝ言葉で、最も注意すべきは、普通の辯者が『今回』と云ふべき所を、必らず『此度』と言はれる。又他人ならば五分間位で済むものを、公は言葉を婉曲に言廻はさるゝ爲め、廿分位は費さるのである。統監歡迎會の席上で速記者の感じたのは『諸君の此度の御厚意は深く感謝する所でありませう』と云ふのを

「諸君の此度の御厚意は、深く感謝する所、何と御禮を申して宜いか、其辭を得るに苦しい次第であります」斯う云ふ風に、句を練り、言語の中に自から温情の籠るは、公獨得の長所であつて、大隈伯には望んでも得られないやうに思ふ。

(下)

社評を省けて見送へ向つたやうだ——世界の反響——公と大隈伯の討論——文字の人——燦爛として光彩を放つ——袴を着けた辯——何と云つても伊藤さん——臨時議會の演説——頗る壯絶——聲が漏れる——語音の判明を缺く

▲公の演説も随分速記して見たが、誠に敬服すべき事は、一日三回若くは四回演説をされても、決して同一のものを繰返へされない事である。それは場所によつて、材料も異なる譯だから、當然の事ではあらうけれど、嘗て政友會組織の當初、各地方を巡廻された節も、同一主意のものを、種々に言葉を換へ、順序を變て、千篇一律、版て押したやうな演説をされなかつたのには、密かに感服した人も少くなかつたやうだ。詰り公は歴史に富み、文學趣味に堪能であられるから、敘事引例の一日に二度と出ないので、公の博識なる事を證明して居るのである。然も態度が極めて

謹嚴であるから、恰も神を付けて見臺へ向つたやうな氣がする。

▲某政客の談に「公の演説には一つの目的がある。其目的と云ふのは、公の演説に就いて、世界に如何に反響するかと云ふ事を常に注意して居らるゝ様子である。嘗て日本國民に聴かせる許りではない。常に倫敦あり、巴里あり、伯林あり、聖彼得堡あるを忘れぬのである。それが爲めか、アノ雄辯が、口を噤んで、語を撰んだり、句を練つたりするので、自然辯も澁り、壯快な事も言へず、雄大な辯論も避けざるを得ぬのである。夫故公の演説が、聴いて左程面白くないと云ふ原因は其處にあるのだ」

▲又曰く「大隈伯の演説は、聴いては非常に興味がある。又伯の座談は、最も其長所であつて、素より趣味が深い。公の演説は、腹案もあり、用意も周密で、伯の如く不用意に題を捕へて、縦横に談ずると云ふ長所はないか知ぬが、其代り文字に現はした上で見れば、言葉が即ち文章で、整然と章句を爲して居る。然し公とても座談はなか／＼長所で、氣焰萬丈、當るべからざる雄辯と揮はるゝ事がある。故に僕

の理想をして、實現する事を得せしむるならば、公と大隈伯とを一堂に會して、充分に討論さして見たら、定めし面白であらう。其縦横的辯論に於て、容易に孰れが優、孰れが劣であるかを判定する事は出来まい」と評して居られたが、誠に肯綮に當つて居ると思ふ。

▲また公は學問好きで、所謂文字の人であつて、詩を作つて見たり、文章を書いたりなどして、至つて文學趣味が深く、學者的であるから、其演説に頗る雅致があり、燦爛として光彩を放つ事は、恐らく公の右に出づるものはあるまい。それに公は眼前に集る人をして、十二分に自身の演説を了解せしめんとせらるゝので、聴衆にあつても餘程聴取好いのである。

▲公の態度は、得意に辯論する時は、身體をヒタと卓子へ着けて、腹部を少し卓へ乗せる加減にし、手を左右へ開いて卓へ突かれる。其風采が如何にも磊落に見える。又謹慎嚴肅に辯ぜらるゝ場合は、左手を洋袴の隠袋へ入れ、右手を卓上へ置れるのである。又は左右共隠袋へ入れらるゝ事もある。公は其昔、常に袴を着けた癖

が失せぬので、洋装してもツイ隠袋へ手を入れらるゝのだ。西洋ではこれは禮を失するものとしてあるさうだが、我國の習慣では、左程無禮とも見ず。却つて謹嚴の意を表する場合に用ゐられるやうである。

▲それに總理大臣としての演説では、何と云つても伊藤さんだよ。首相として草稿持たずに施政の方針を演説したのは、公許りだらう。公の演説中でも、日清戦争の際に、廣島の臨時議會で爲した演説程、壯絶を極めたものはない。一篇の文章を滔々として(草稿なしに)澀みなく吐出されたには、大分驚いた人もあるさうだ。尤も時機も好し、場所柄も好かつたのであらう。然し近來は少し下手になつた。下手になつたのではあるまいが、非常に義齒を氣にする癖が出て、却つて聲が漏れるやうになつた。例へば過日の統監歡迎會に於て、ミヂヤウ(未定)の問題と述べられたのを、速記者の耳には、未了の問題と響いたやうなことがある。お年のせい知らぬが、語音の判明を缺く事が多い。

(七) 西園寺公望侯

(上)

細心綿密家——容儀清麗貴公子の態——聲が立たない——演説は三段目——極めて平板——一部分早口——フリマ……ス

▲『旋轉乾坤の大事業は深淵に臨み薄氷を踏む底の細心なる工夫より來る』と云ふ語があるが、侯の氣質も矢張り其の通りで、なか／＼細心綿密家である。世間では侯が鐵道國有を斷行したり、随分思切つた政策をやらるので、疎暴とか大握みとか云ふ評もあるやうだが、決してさうではない。それは侯が巴里時代には、疎暴とか大握みと云ふやうな事もあつたが、現今では夜の一時二時頃迄、政務に關する書類を檢閲され、朝は六時半にはさちんと睡が覺めて、終日孜孜として政務に執筆される。それは非常な勉強である。従つてそれが辯舌の上にも現はれるので、侯の演説は、其草稿や速記を翻譯した文字の上から見ると、如何にも豪放の所もあり、又精細な所もある。

▲侯もまた文學的趣味が深いから、其言ふ所に、何となく雅致があるのは、伊藤公と能く似て居るけれど、イザ壇に上つての演説振は、何うかと云ふに、容儀清肅、貴公子たる態度は申分はないが、何しろ聲が立たない。見るからに病人らしく、ハシケチなどを首に巻いて、多くは草稿持参の朗讀演説を遊ばすのだから、先づ演説家としては三段目だね。幕の内へはまだなかく遠い。遠い。

▲それに侯の演説は、極めて平板である。抑揚がない。波瀾が少ない。而して或一部分丈はチコ／＼と早口になる。夫故先づ聴いて居ては興味のない方で、其代りこれを文字に現はすと、非常に価値もあり、趣きも添はるのである。これは一國の宰相として、又大政黨の首領として、固より當然の事であらうが、速記者より御注文申すと、今少し同じ原稿を朗讀さるゝにしても、綱目丈を筋書にして、『アリマス』『アリマセヌ』『アル』『ナイ』と云ふ語尾は、其時の自然に任せらるゝ方が、血氣もあり、感動も起り易いやうに考へる。

▲イヤ朗讀演説で憶起したが、確か十四議會の時だつたと思ふ。某伯が衆議院の演

壇で、朗讀演説をされて、冒頭から滔々と讀去讀來つたのは好かつたが「何をシタノデアリマ」とあつて「ス」の字が原稿紙の裏になつて居た。それを眞面目に「アリマ」



て、裏をあけて「ス」と讀まれたには、満堂腹を抱つて笑えたが。侯の朗讀演説は夫程

に甚しくはないが、草稿に『アリマス』とあれば几帳面に『アリマス』『ナイ』とあれば其通り『ナイ』と云ふやうに、語尾に至るまでも、成るべく草稿通りにやらうとせらるゝから、何うも活氣に乏しい。

(下)

有苗問題——書記官長の代作——第二の伊藤侯——座談が得意——
死人に土砂——生々した答辭——學者風の演説

▲侯の演説は、所謂一上一下、虚々實々の花々しい所がない代りに、其辯舌に何處となくツツシリとした重みがあつて、又時々奇句警語を放たれる。例の有苗問題なども、大分やかましくなつて、世間では定めし竹越三又氏が書いたんだらうと、想像したものもあつたやうだが、全く竹越氏などには相談なく、侯自身に草稿を書かれたのださうだ。

▲一体議會に於ける總理大臣の演説は、大抵は書記官長が代作するので、大臣自ら筆を執ると云ふのは、伊藤侯以外に一人もない。夫故總理大臣が何を言ふかと云ふ事は、前以て略々分つて居るものだが、侯の如きも、伊藤侯と同じく、自から筆を執

て、斷乎として其信ずる所を述べらるゝので、決して書記官長や昵近の人々に相談などはない。此點に於ては第二の伊藤侯とも云ふべきもので、誠に敬服の外はない。

▲侯の總理大臣としての演説が、思つたより面白くなく、いくら堅くなり過ぎはせぬかと思はるゝのは、總理大臣の演説は、十年以來先づ以て陛下の御覽に供しての後に於てする。さうでなければ演説した後で、御覽に入れる事になつて居るさうであるから、侯が總理大臣となられてからの演説が、堅くなり過ぎたやうな感があるのも、強ち無理はないのである。

▲侯は演説よりも寧ろ座談が御得意なので、非常に大きな問題を、小さい事にしてしまつたり、又非常に小さい問題を、容易ならぬ大問題の如くに説かるので、さう云ふ事が餘程侯の長所である。或時某政客が非常に或問題に熱中して、侯を説きに往つた所が、侯は其政客の議論を傾聴して居られたが、やがて例の奇句警語に諧謔を交へられて、口角沫を飛ばして居る人を、まるで死人に土砂を掛けたやうにして了はれた。夫故議會などで、演説でなく、議員より質問の矢を浴せ掛けらるゝ時な

どの方が、當意即妙、なかなか巧みに言抜け、生々した面白い答辯をされる事が、往々あるのである。

▲侯の辯舌の速度は、一分間三百音内外で、敢て速記し悪いと云ふ程でないが、一部にチコツ／＼と非常に早い所がある。又如何にも難解の文字を多く用ゐらるゝから、それに速記者は困難するのである。一速記者が、侯の演説を速記した内に「あいちよう」と云ふ言葉があつたが、何うも文字が當嵌らない。前後の脈絡関係を見ても、何うも考が付かない。定めし「愛情」であらうと、其通り翻譯して出して、後で侯の檢閲されたものを見ると「哀腸」と訂正してあつた。其如く侯は學問があらるゝだけに、餘程専門の智識を備ふるものでなければ、容易に解し兼ねる文字を餘計に使用するのである。要するに侯の辯舌は、政治家的の演説と謂はんよりは、學者風の演説と云へば大過なからうと思ふ。

(八) 尾崎行雄氏

單刀直入——頭地を抜く——羽織の紐が美事——手を大きく揮ふ
——ニラミが利く——氣取る點に於て破れる——體正しからざれば
言正しからず

▲氏の辯舌は、單刀直入的である。寸鐵人を殺す的である。弓矢鐵砲を以て、遠卷に敵陣を崩すとか、長柄の槍先揃へて、堂々敵陣を突きまわると云ふ側ではなくして、匕首を懐にし、躍然、簇がる敵中に奮進し、敵將に肉薄して、其首を齧かずんば止まざる底の概がある。氏が以前議會で政府攻撃演説をされた時などは、如何にも物凄いやうであつた。

▲言ふまでもないが、議會の演壇に登つて見ると、田舎の學校や古寺で演説した調子とは全く違つて、喉が苛々して旨く饒舌れるものではない。其等て成程地廻りの旅役者が檜舞臺へ出ると、膝が震えると云ふ譯ではないが、何となく軀の舉止がシヤチコ張つて遣りきれぬものだ。夫故下院三百の議員中、一席讀切の演説を遣る人

は、可なりあるが、御家騒動のやうな、續き物になると、どうも手の出し人が少くなす。

▲それに場所慣れがしても、態度が悪しく音調が皖々として朗かなくては、演説は引立ぬものだ。下院議員中、故神鞭、田口兩氏の如きは、論鋒が時として鋭利なこともあるが、聲が皺噎れて錆れて居るし、態度が如何にも引立たないから、氣の毒で聽いて居られぬ。工藤チン急氏は、お國訛だから仕方がないとして、栗原氏が鼻のやうな聲を出すと、饒舌らぬ先きから退屈して小便に立つ者もある。藤澤星松兩氏なども先づ此仲間だつた。大石氏は當代の雄辯家ではあるが、十四議會で御得意の外交質問を三度やつれが、三度とも氣餒は多少上つたやうだが、どうも速記で居ると、擒縦頗る不十分たるを免たない感じがした。所が氏は、是等の點に於て一頭地を抜いて居るやうに思はれる。

▲氏が例の黒五紋の羽織に、白丸打の紐を房々と胸高に結び、少し反身になり、手を大きく揮ふ態度は、如何にも立派で、政府委員をズラリと並べて置いて、一句一句、



突込んで往く所は、敵をして膽を寒からしむるに足り、政府委員等尾は、穴でもあらば入り時たきやうにも見ゆる。此點になると島田氏は一段の損がある。何となれば島田氏は、人相が柔和で、俗に云ふ夷顔で、敢て愛嬌を賣る譯ではないが、常にニコクして居るやうに見えるから、どうもニ

ラミが利かぬ。尤も島田氏が嘗て選舉干渉の質問演説された時は、平生に似合はず頗る物凄く感じたこと、其時の速記者は語つたが、何しろ島田氏は愛嬌が有り過ぎる。

▲所が氏の態度の莊重なる、言語の犀利たる、眼光の炯々たる、如何にもニラミが十分に利く。嘗て衆議院の政府委員席で、伊藤侯が（當時は伯爵）「余は陛下を代表して云々」と言はれた時は、氏は透かさず、「陛下を代表すると云へば取りも直さず勅使である。伊藤君は勅使ではない、總理大臣である。故に陛下を代表したるにあらずして陛下の政府を代表したのであらう」と切込んだ時は、流石の伊藤侯も少しタチ／＼とされたやうだ。尤も侯は其の言違ひであつた事を直に正誤されたから、何の事はなかつたが、此時満場は一種凄愴の感に打たれたのである。

▲それに氏の口調は何時も「アルナイ」と云ふ言語遣で「アリマス」とか「ゴザイマス」など云ふ口調は、未嘗て聞いた事がない。尤も近來市會の番外席に立たれるやうになつてから、偶には「アリマス」調が出るやうになつた。余の同業膳庵君

の談に「下院三百の頭顱を並べて片端から數へて見ると、辯の聴くに足るものが甚だ少ない。島田は輕快にやるが莊重を缺き、井上は皮肉は旨いが諧謔が過ぎる。武富は單調に失し、高梨が喋々と陳腐なるロジックを得意がるだけそれだけ無識のやうにも見える。死んだ星が誰れに向つても愚弄的口調を用ゐるだけそれだけ氣品が乏しく、杉田の倍偏、龍野の冗慢、さて尾崎は氣取る點に於て破れる」

▲成程氏は大に氣取る所があるやうだ。東洋のビーコンス、フィロドは乃公だぞと云はぬ許りの態度がある。けれど氏の説に依ると「體正しからざれば言正しからずで、正々堂々と辯論する場合には、態度も又嚴正でなければならぬ」と言はれて居る位だから、氏が勉めて態度の嚴正を保たれんとするために、他からは氣取るやうに見えるのかも知れぬ。流石に氏は辯論界の宿將だけあつて、其辯舌に就て、奇聞逸話が頗る多いけれども、大抵は世に知れ渡つて居るから、今更贅言を費さぬ事とした。

(九) 大岡育造氏

(上)

隔世の感——速記者より碩徳表——穩健着實——大向ふから喝采——
一言語と文章の接近——天下一品——進化か退歩か

▲氏も元は随分速記者を泣かせたものだ。遠い昔、氏が辯護士時代は、例の櫻間要三郎や、相馬事件の錦織剛清の辯護で、散々検事を手古摺らせ、斯界の花形役者として、今の花井、高木辯護士の如く、盛名噴々たりし事を考ふると、殆んど隔世の感がある。斯くの如く古い時代はヌキにしても、氏が國民協會に籍を置いて、衆議院の演壇若くは議席に立つて、反對黨と辯難攻撃、長廣舌を揮はるゝ場合には、其辣辯導る驚くべきものであつた。所が居は氣を移すとやられて、人は其境遇に依つて辯論にまでも變化を來すものか、即今氏の辯舌の速度は、一分間二百五六十音、早くて三百音内外となつた。嘗て衆議院の速記者連が「ヤ、今日は誰を速記した」「イヤ大岡につかまつて酷い目に遇つた」と言はれた位の速辯家も、今では速記者より碩

徳表を上つても可い位に、辯論に餘裕を生じて來た。

▲それは何が爲めてあらうか。氏は明治卅三年に洋行をして歸つて來られてからは政友會に入つて總務委員となり、又は院内總理となり、大臣の候補者にも數へらるるやうになつたので、其議論が、穩健となり、着實となり、餘程責任を加へられて來たやうにも見える。従つて昔のやうに、大向ふから拍手喝采を受くるやうな派手な演説はしなくなつた。以前氏の演説には、警句奇語口を衝いて出て、殆んど天下一品と稱はれたものだが、近來それが一向なくなつたので、昨今の演説振は、勉めて言語と文章との接近を計つて居らるゝやうである。故に句を練る事は、第二の伊藤侯とても云ふべき程である。材料もなか／＼豊富である。此等の點を彼は考察して見ると、氏の辯舌は、進化と云つて可いか、退歩と云つて可いか、ちよつと疑問である。

(下)

聽衆の趣味——辯論の變化——テアルとデアリマスの折衷——三味線のない薩太夫——感に打たれて涙が落つる——溢みに餘

▲氏が近來、句を練り考慮を費さるゝ事は非常なもので、氏自身筆を執らるゝ時でも、又速記者に談話を書かせる時でも、一段半位のものに、一時間以上を要すると



云ん話である。是等が自然と辯論の上にも發露する事があるから、知らぬ人は、氏の辯論の退歩と誤解するものもあるであらうが。氏の辯論は、昔は聴く一方にのみ重きをなして、聴衆の興味と云ふ事を主とせられたやうだが、昨今は其反比

例として、演説でも文章でも、後に遺す印象として與ふるものに勉めらるゝものゝ如くに思はれる。尤も人は其地位の變遷に依つて、辯論の上にも變化を生ずるのは、

獨り氏に於てのみこれを見るのではない。必ず多くの政客、若くは學者に於ても、これに思當る事があるやうに考へらるゝのである。

▲氏の言葉癖は、これと云つて格段に言ふ程のものもないが、要するに「デアール」と「デアリマス」との殆んど折衷的であつて、聲に幅があり、抑揚に非常の力がある。

嘗て日露戦役の當時、歌舞伎座で國民後援會の演説をされた時に、同座の顧問たる田村正義氏は、「三味線のない義太夫を聴くやうだ」と評つた。又三井の益田、朝吹兩氏などは「感に打たれて涙の落つるを禁じ得なかつた」と言つて居られた。無論時に依つて出來不出來もあらうが。氏の辯舌は、人の感情を動かす力に富んで居る。これは例の淨瑠璃の素養が與つて大に力があるのであらう。惟ふに戦後經營に關する諸問題も、續出する時機に當つて、雄辯の士に待つ事多きに拘はらず、朝野を通じて、諸辯士が兎角に意氣銷沈せられて居るやうに思ふ。氏の辯舌の如きも、流みに鋪が加はり過ぎては、世間を賑はす事もなるまいから、今一度昔に返つて、奔流激湍、奇句警語、人の心胸を穿つ底の快辯を奮はれん事を、偏に願ふ次第である。

(一〇) 角田眞平氏

(上)

氏と沼間氏——嚶鳴社の全盛時代——何と左様ではござらぬか——
ソコテ即ち——蛇は寸にして人を呑む——日給廿五錢の御雇——議
論許りして居る——俚て元老院の玄關へ乗付ける

▲余は氏の演説を聴く毎に、いつも故沼間守一氏を聯想する。従つて例の嚶鳴社全盛時代を追想するのである。嚶鳴社は明治八年の創立で、林正明、波多野傳三郎、西村玄道、堀口昇、富永冬樹、沼間守一、大石正己、大岡育造、小川善太郎、河津祐之、小畑美稻、金子堅太郎、田中耕造、高梨哲四郎、角田眞平、乗竹孝太郎、益田克徳、福地源一郎、荒川高俊、島田三郎、末廣重恭、須藤時一郎など云ふ顔揃で、多士濟々、一時は世の耳目を聳動せしめたものだ。

▲創立當初は、小石川の摩利支天の本堂を會場として居たが、後に柳橋の萬八(今の龜清)へ移し、梯子の下に鏡箱があつて、傍聴料としてそれへ二錢宛投込んで二階へ下つたものだ。諸辯士各一癖ある中に、沼間氏の演説振は一風變つて、頭髮を長く前へ垂れ、何時も袴を着けた事がなく、平生は少し吃音だが、イザ壇へ登ると奇態に吃音がなくなる。鼻糞をほちつて、傍の椅子卓子へなすりつけ、手拭を棒のやうに絞つて握り「諸君、何と左様ではござらぬか……」と云つては、手拭で卓を叩く。其當時角田氏は十九歳の少年で、沼間氏の書生であつたから、いつも前座を勤めて居たが。其口調が沼間氏そっくりで「何と左様ではござらぬか」の口癖迄も真似て居られた。矢張其頃府會議員をした木寺安敦と云ふ人も能く演説したが、此人の口癖は「ソコテ即ち」が速く發たので、一速記者の戯歌に。

沼間角田何と左様ではござらぬか

木寺安敦ソコテ即ち

▲氏は少年時代から、辯舌が達者で、理窟が上手で、既に十二三才の頃から、能辯家の資格を備へて居つた。講釋師口調なら「旂檀は二葉より香し、蛇は寸にして人を呑むの氣ありとか申しまして」とても形容するのであらう。沼間氏に知られて元老院へ出仕した時は、沼間氏は堂々たる權太書記官で月給二百圓、氏は日給僅か二

十五錢の雇で、民事要録の翻譯や、布告、布達、布達、達などの草案を作る手傳をして居たが、口許り達者で、終日議論のみして居つた。尤も元老院へ出るに就ては、いくら給金は安くとも、人の下に付くのは可厭だと云ふので、それでは人夫同様日給が好からうと、態々日給にしたものださうだ。

▲一體沼間と云ふ人は無頓着で、美しい服装をしても其儘何處へでも往く、悪い装をして其儘何處へでも往くと云ふ風で。手車はなく、途中から辻車で出勤するので、いつも氏と合乗して往く。其頃奏任官以上でなければ元老院の立關まで、車で乗付ける事はならぬ規定であつたが、氏は沼間氏と合乗して、傲然と俥で門内へ乗込む例であつた。スルト一日氏一人て車に乗り、平生の如く立關へ横付けにさした。

▲所が氏の敝衣短袴、何うしても奏任官とは受取れないので、受付は怪んで「一寸伺ひますが、貴方は奏任官でゐらつしやいますか」「イヤ俺は雇だ」「それぢや立關まで俥で来ては困ります」「イヤ俺が立關まで横付けにしると云つたんぢやアない、車夫が俺を勝手に茲まで持つて来たんだから仕方がない」と、理窟を捏ねて受付を困

らせるので、翌日受付は沼間氏に「ア、云ふ理窟ほい方は誠に困りますから、貴方から能く有仰つて下さいまし」と云つたので、沼間氏も笑つて居たが、其後は合乗を止めたと云ふ話である。

(中)

口から先きに生れた——哲に聞け——長髪の高梨哲四郎氏——
蛟龍豈池中のものならんや——花井お梅の辯護——飛ぶ鳥を落す勢——
——今日は——スベツと頭を撫下す——大飼木堂氏の批評

▲氏も先天的辯士で、口から先きに生れたかと思はれる位、演説が好きで、従つて句を練ると云ふ事にも、非常に熱心であつた。嚶鳴社時代には、まだ白面の一書生であつたが、演説の遺方、又は態度の工合など、一々沼間氏に質問する。スルト沼間氏は「哲に質け」と云つたもので、哲とは沼間氏の令弟高梨哲四郎氏の事だ。其時分もう高梨氏は、なか／＼流行見で、例の房々／＼た長髪美事に、頗る豪奢を盡くし、高梨と云へば、盛名世に隠れなかつたもので、氏は高梨氏を兄分として居たのだ。

▲其後日給廿五錢の氏も、蛟龍豈池中のものならんやで、一躍して辯護士となり、

名聲大に揚つて、例の花井も梅の辯護に、御得意の能辯を揮はれた時分などは、角田さんと云へば、實に飛ぶ鳥を落す勢であつた。鳥越の中村座で『箱屋殺し』の狂言をした時に、衣裳方の千葉勝から、氏が法廷で用ゐた虫喰透小紋の三枚重に、黒五ツ紋の羽織、茶堅縞の袴、大形の鞆まで借りに来て、菊五郎が氏に扮して、今の服装で滔々とお梅の辯護をする所などは、一時満都の士女を唸らせたものだ。

▲氏の言葉癖は「何と左様ではござらぬか」の外に、堂々と議論をして居るかと思ふうちに、忽ち言葉が變つて「諸君、斯う云ふ事があるんですが、さうてございませうな」と、相談するやうな、平易の口調が交ぢる。是も沼間氏の口調をつくりだ。又客に接せらるゝ時は、いつも冒頭に「へ、今日は……」と言はるゝのは、氏獨特の口調である。

▲氏の態度に一寸可笑い事がある。盛んに辯論を續けられて、説が佳境に進むと、右の手でスベツと頭を撫下す(圖の如く)更に夢中になると、今度は両手でスベツと

頭を撫下す癖があつて、傍て見て居るとなかく奇觀だ。



▲然し辯舌の流麗なる事は今更言ふ迄もないが、犬飼木堂氏が嘗て氏の辯を評して「島田の演説は文章を讀ひやうて、能辯と云ふ價値はあらうが、人を感動する力がないやうだ、角田のはそこへ往くと、頗る人に感動を與へる所がある」と言はれたさうだが、感動を與へると云ふ事は全く氏の長所である。

(下)
實は沼津邊の御方——辯舌が江戸式——輕妙該博——一道の光を發す——將を射すして馬を射る——娘口説きの演説——コロツと往生する——香く演説と聽く演説——書けぬ所に價値

▲氏の辯論を聴けば、誰れても純江戸ツ子と思ふてあらうか、嘗て紅葉祭の席上て高田早苗氏も「私は是迄角田君を純江戸ツ子と思つて居たか、實は沼津邊の御方であるさうな。それにしても何如にも流暢な辯舌である」と言はれたか、氏は全く純粹の江戸ツ子辯である。換言すれば江戸式であるから、幾分か舊派の所もあるが、然し政治演説をさしても、又竹冷宗匠として俳諧の講話をさしても、輕妙で、該博で、なかくソツのない辯舌である。

▲一速記者の談に『氏の辯舌は餘りに流暢の爲めに、多少可厭味はあるが、其口調が、輕妙な流麗なる言葉が多く續いて、最後に一斷定を下す時は、平生愛嬌に満ちて居る眼も、忽ち一種の威力を現はして、頗る凄くなり、一道の光を發するやうに思ふ。然かも其議論が、堂々正面攻撃をせずして、或は敵を誦るが如く、或は尊ぶが如く、親むが如く、威すが如く、或時は喋々喃喃々婦人女子の辯の如く、又は機鋒銳利他の心胸を穿つが如き所がある。一問題を討議するにも、先づ其側面より柔らかに真綿で首を捻ねるの辯をなし、將を射ずして先づ馬を射る。故に氏の如きは

宜しくこれを娘口説きの演説と云ふべしてある』と、蓋し當らずと雖ども遠からざる評であらう。全く氏の辯舌は執着力があるので、確かに人の意志を動かす力に富んで居る。又人をコロツと往生させる手際はなかく旨いものだ。

▲氏の談に『演説と云つても、書けるものと書けないものとある。詰り演説は諸君と云つて、暫時満場を睨めて居る所に價値があるので、文字に書けない所が好いのだ。書く演説と聴く演説とは、自から違ふので、法庭などでも、下を向て材料を見ながら辯論して居ると、一向に裁判官の頭に這入らぬ。裁判官は戯書などをして居る。所が裁判官を終始眼を放さずに、ウンと睨んだ儘辯論すると、何うしても先方の頭に這入るのである。演説も其通りで、書いて見て、整然、文章になつて居るものよりも、書けぬ所に味のあるものである』と言はれて居る

(一一) 山本權兵衛男

軍人中の立憲的政治家——犀眼——一種の威嚴——くるべうと、心のへうえ——有是説有是説——予が會心の落語

▲現代の政治界に於て、多大の潜勢力を有して居るものは、言はずと知れた山本權兵衛男であらう。氏は薩人獨特の勇氣に加ふるに、極めて明快なる頭腦を有し、軍人中にあつて、最も立憲的政治家の資は氏を措いて他に無からう。殊に壇上に立つては、其雄辯、實に驚くべきものがある。其態度音聲共に申分がないのみならず、男の眼には一種の威嚴がある。易者に言はせると犀眼と云ふので、口先で説破する前に、先づ一睨みヂロリと注視すると、其注視に恐ろしい凄味があつて、氣の弱い議員などは、質問の矢を放つて置きながらも、其答を得ない中に唖んでしまふ。然も其辯舌は、快暢で、段落があつて、秩序が正しい。抑揚は餘り無い方であるが、大臣の演説としては却て抑揚などの目立たぬ方が、重味があつて嬉しい。

▲男は本名のどんのへうえ(權兵衛)と云ふのを、どんべふと呼ぶるのが、大層氣になると見えて、それに就いて一場の奇談がある。或時某宴席で、餘興に三遊亭遊三が「くるべうえ」と云ふ落語をやつた。其落語の大要を摘むと斯うである。

▲「エ、或所の豪家の御子息様に、學問の御好きな方がありました。何でも勉強は夜に限ると、毎夜二時頃迄御部屋で書見をして居らつしやると、或夜頓馬の盜賊が忍入つて、若旦那の御部屋と知らずに入つて來た。貴様は何だ。へー泥棒で……。コレ馬鹿を申せ、泥棒とは泥だらけの棒だ、棒は木や竹で造つたもの、貴様は人間だ、棒ではない、定めし貴様は盜賊であらう。へー、其盜賊で……。貴様の宅は何處だ。へー麻布市兵衛町で……。コレ貴様は無學だな、市兵衛町ではない、いちへうえ町であらう。へー其いちへうえ町でございます。名は何と云ふ。太郎兵衛と申します。馬鹿ッ、太郎兵衛ではない、たるべうえだ。へー成程、たるべうえで……。一體貴様は何處から忍入つた。へー裏のくるべうえ(黒屏)から忍入りました」

▲先刻から來賓席で、此落語を傾聴して居られた男は、手を拍つて悦んだ。有是哉。

有是哉。是こそ余が會心の落語ぢやと。早速遊三を側近く呼寄せられ『くろべらゑは面白かつたな。就いては余の本名はごんのへうぢやか、世間ではごんべまくと呼んで困る。せめてごんべうゑとでも呼んで呉れ』は宜いのに。以後其方が寄席又は座敷でくろべらゑの落語をする時は、序に余の名の事もごんべゑでなく、ごんのへうぢやと吹聴して呉れ』と戯れに言はれたさうだが、速記者に對しても、『君方は顔が廣からうから私の話が出た時は、ごんのへうぢやと吹聴し、原稿にも其通り假字を振つて呉れ』と言はれた事もあるさうだ。仍ち此機を利用して御吹聴致すこと依て如件。

(一一) 樺山資紀伯

▲思つたより割合に雄辯で驚いたのは樺山さんだ。議長が號鈴を振つて制止するのも頓着せず、滔々と薩長内閣の機能を述立てた時の演説は、實に立派なもので、前後アノ位氣組のある壯快な演説を爲し得た大臣はありやしない。喧々囂々たる反對

の矢面に立つて、悠揚として迫らず、熱涙を双頬に漲らして、諭すが如く、訴ふるが如く、誇るが如く、叱るが如く、一楡一縦、眞に大臣演説の白眉であつたらうと思ふ。

(一二) 三宅雄二郎氏

(上)

筆の人と足の人——極めて訥辯——大辯は訥なるが如し——井上君は學者です——唐突なる一言——極めて眞面目

▲三宅博士は、口の人でなく、手の人でなく、筆の人と足の人である。博士は朝比奈知泉、陸羯南兩氏と共に、政論界の三大家である事は、誰も知つて居る所である。夫故筆の人である事は、言はずと知れて居るが、足の人と云ふのは、即ち博士は徒歩主義の人であるのだ。博士が無紋の羽織に例の體軀で、俛なり電車なりに乗つたのを見たのは殆んど稀である。博士が徒歩主義に就ての奇聞珍話は澤山あるけれども、それは此所に掲ぐる限りでないとして、博士の最も不得意なる口の人に就て語らうと思ふのである。

▲口の人としては、博士は極めて訥辯であるのだ。然し訥辯の人であるからと云て、それでは其演説が、何等の感動も人に與へぬかと云ふと、決してさうてはない。所謂大辯は訥なるが如して、博士の演説振は、如何にも篤實真摯で、口、嚙嚼として言ふ能はざるものに似たれども、餘意を言外に聴取せしむるの特長があると思ふ。又其熱心なる態度が、非常に他の同情を惹くのであるから、或場合には、滔々懸河の辯を奮ふ饒舌家の演説よりも、より多くの感動を人に與ふる事があるのだ。少しく過褒かは知らぬが、博士の如きは、真に大辯の士と云つて可からうと思ふ。

▲然し始めて聴く人には、博士の演説が極めて奇抜であり、唐突の所があるから、何だか狐にても魅まゝれたやうな感じのする事がある。或時哲學館の講演會で、井上(哲次郎)博士が、例の長演説で、和漢洋丸呑の二時間半に渉る能辯を奮はれた時に、聴衆は拍手喝采して、井上氏の才學の博く、辯舌の流麗なるに、只管感嘆して已まなかつたが。其後へ博士は登壇して、凡そ五分間程無言の儘、演壇に突立つて居られたが。やがて劈頭先づ『井上君は學者です』と叫ばれた。此唐突なる一言に、

滿場は實に失笑を禁じ得なかつたのである。それは或一方から云へば何だか井上博士を冷笑た言葉のやうに聴えるが、博士は極めて眞面目であるので、冷笑すの偽はるのと云ふ事は、大禁物とせらるゝ所であるから、若し偽はらざる言葉を以つて言ふ事が、辯論の粹なるものとするれば、訥辯なる三宅博士も、決して辯論界の落第生とは云へぬものである。

(下)
—大粒の涙

崇高偉大——無爵の大將——無位の學者——滿場寂として聲なし——

▲博士の演説で、最も價値があり、最も崇高偉大に感ぜられたものが二つある。日露戦争の際に當つて、滿洲丸に新聞記者諸氏が便乗して、戦地の視察に往かれた時、航海中に三笠艦上で東郷提督と會見した事がある。其時は随分理窟家の記者諸君も澤山居られ、又一つには東郷提督に向つて、饒舌つて見たいと云ふ人も多かつたさうだが。評議の結果、一人の代表者を出す事になり、先づ東郷大將に向つて挨拶をしやうと云ふのは、博士を最も適任とするので、萬口一齊に氏を推す事とした。



▲其時兩者の仲間に立つて、紹介の勞を取られたのは、子爵小笠原長生氏であつた。身分から云へば、一人は無爵の大將、一人は無位の一學者、其紹介者は、九州の豪傑小笠原壹岐守の子孫たる長生氏である。英名世界を震驚せしめたる東郷提督が、姿勢正しく容儀肅然として立たる、面前へ、其危大の軀幹に、整實温厚の態を備へたる博士が出られて、兩々相對された光景は、何となく一種崇高の念に驅られて、

満場寂として聲なく、唯波濤の微かに舷側を打つ響を聴くのみであつたさうだ。

▲其時も博士は例の訥辯で急に言語は出ず、暫時無言で居られたが、やがて重き口より發し



言葉は、他の千萬言を費したる感謝の辭よりも、却つて大なる感動を、提督其他の人に與へた事は、其當時傍聴して居つた人々の、今以て忘れざる所であると聽いて居る。

たる挨拶は、極めて簡單であつたが、語が莊重で、然かも熱烈に「我々は新聞記者として、國民より多く貴官の功勞を知つて居るものがある」と云ふ事も、其妙き言葉の中に交つて居つたさうで、すべての豪傑連を代表して、此訥辯の博士の述べた

▲また博士が伊豫の松山へ、露國の捕虜の慰問に往かれた時に、捕虜に對して一場の演説をされたが、なか／＼誠意が籠つて居たさうで、博士は例の訥々の辯を以て捕虜に語つて言はるゝには『諸君は國家の爲めに矛を執つて我國と戦ひ、刀折れ矢盡きて、我國の捕虜となつたのである。其衷情を察すると、眞に同情に餘りあるのである。我國は諸君に向つて、軍人として相當の待遇をして、充分に諸君の心を慰さめねばならぬ。若し其待遇上に就いて、不便不満足の事があつたなら、我々新聞記者に對して申出られよ。我々は決して棄てゝは置かぬ。當局者に十分に談じて、諸君の精神に不安のないやう、萬事不便のないやうに取計らうであらう』と。言々句句、博愛慈善の意を以て充され、是迄博士を演壇上の落第生とのみ思つて居つた人々も、假令其辯が訥々であらうとも、其熾ゆるが如き誠意に動かされて、場に滿ちたる捕虜達も、通譯の口より氏の演説を聴取し、感謝の念禁じ難く、鬼をも挫ぐ荒くれ男子が、大粒の涙をボタリ／＼と落して居つたさうだ。歴史小説で有名な塚原澁柿園氏も此席に列なつて『生來始めて斯かる凄愴なる演説を聴いた。今日まで泣

いた事のない僕も、此時許りは覺えず涙が溢れた』と余に語られた位である。

(一四) 本多靜六氏

上品な新講談——談興沸くが如し——萬巻の書を読み千里の途を行く——地球を東西に週遊し南北に横断す——年は二八か二九からぬ——御宿を致しませう——ロクに禮もいはぬ——天人の羽衣——目頭六分主題四分——武士的家庭

▲本多林學博士の講話は、上品な新講談であると云つても可い。如何にも滑稽洒脱で、稍もすれば乾燥無味に流れ易い林業上の講話を、いつも其滑稽洒脱なる辯舌を以て、識らず知らず、人の頭腦に注入するの手腕は、實に敬服の外はない。趣味津津々、感興沸くが如しと云ふのは、博士の講話の如きもの、謂てあらうか。目今政治家家に辯士尠なく、辯護士に際立たる雄辯家の少くないのに、却つて軍人、學者側に辯士の多いのは、誠に奇しき現象である。

▲博士の講話が如何に人の感興を惹くかと云ふ例に、今其一斑を紹介するのも、敢

て無用の業でもなからう。博士の演説振を遺憾なく發揮したのは、神田三崎町の日
 本大學の講話會で「南洋探險談」と題して講演されたものである。博士は壇に登る
 やブツツケに「諸君古語に萬卷の書を読み、千里の途を行くと云ふ事がある」と來
 た。大抵の演説者は、壇に登ると、ヤレ「今日は風邪で聲が立たぬ」とか、ヤレ「多
 忙で取調の暇がなかつた」とか、紋切形の前置を言ふものだが、博士はいつも其様
 な前口上はない。氏は一段と聲を張上げられ「余は未だ萬卷の書を読まざるも、千里
 の途は行いた積りである。東奔西走、南船北馬、嘗て地球を二回東西に週遊し、更に之
 を南北に横断し、彼の通常人の行き易き歐米諸國や、支那朝鮮の如きは勿論、南は琉
 琉小笠原の諸島より、赤道を超へて木曜島其他濠洲諸邦に及、北は滿洲樺太より西伯
 里亞の氷野に及、或は炎熱動くが如き亞弗利加砂漠に、虎彪の巢を踏み破り、或は漫
 々たる黒龍江上に明月を賞す、彼のアルプスの山やロッキの峯の如き嘗て余に學
 位論文の材料を供せし所、夫れ我内地の如きに至ては、北海道の斜里山より、台灣
 の新高山に至る、千山萬嶽、殆一として余が足下に踏み敷かれざるものはない」と、

豪放爽快の口調で、先づ聴衆の度膽を抜く。「今回南洋へ往つたのも香港迄は四度目
 だ。先づ神戸より香港までは何の話もない。香港よりマニラへの便船を求めて之に
 乗つた。

本多博士の
 講談演説

「一人固
 より木石に
 あらず落花
 情あり流水
 豈心なから
 んや」



乗つた。
 余は上等
 の三番室
 てあつた
 が、南洋
 に近づく
 に從つて、
 例のムー
 ンズーン

の爲め動搖烈しく、船には強き余てさへ、殆んど堪難き苦しみてあつた。然るに余
 の隣室に一少女あり、年は二八か二九からぬ。沈魚落雁羞月閉花も古き譬、先づ天

人が天降つたとはこれなんめりと思はるゝ程の美人の色白くと云ひたけれど、いづれ南洋の處女でかなあらう、色こそ黒けれ、其風姿楚楚々として風にも得堪えぬ様子、然かも一人旅と来て居るが、船暈に苦しむ様誠にいぢらしかりしが、或日風少しく柔ぎし時、甲板にて余に向ひ、覺束なき英語にて、貴方は日本人で居らつしやるかと聞いた。それから段々話して見ると、此處女は、有名なるアギナルドの參謀たりし某の娘にて、今香港へ留學しての歸途なりとか。父は米軍に捕えられ、大將アギナルドの所在を知らしめざりし爲め、水責火責の極刑に遇うて、遂に慘死を遂げれば、妾等は米人を恨む事深く、不俱戴天の仇と思つて居ります。日本の御方は非常に武勇で、且情けに富んで居らつしやると聞き、常に御慕ひ申して居ります。何卒マニラへ上陸なすつたら妾の宅で御宿を致しませう。母も定めて悦ぶ事でございますませうと、云はれて見れば萬更憎くもない。人固より木石にあらず、落花情あれば流水豈心なからんや。是より余は此處女と交際して、種々と親切にしてやつた、余の心では此航海の一日も長かれと祈つた位である」と。半以上禿たる頭を前後左右

に動かし、右手にハンケチ打振て、眞面目腐つて述はるゝのだから面白い。『やがて船はマニラに到いた。余は彼女の重き手荷物など親切に搬びなどして、やがて上陸すると、是はしたり、彼女は卓頭に出迎えたる、年若く洋装したる南洋のハイカラ何うやら彼女の許婚らしき男と、手を組んで余にはロクに禮さへいはず、サツサツと往つてしまつた』聽衆は思はずアツと云つたが、博士の辯舌態度が何とも云へぬ滑稽さに、思はず腹の皮を捻つた。『是に於て始めて南洋婦女の質の悪くして、油斷のならぬ事を知つたが。然し其時彼女は、革靴の内より鳥の羽にて造れる肩懸様のものを出して纏つたが、それが翩々として風に翻る様美しく、マニラに上陸して見ると、婦女が皆是を纏うて居る。傳聞く、昔、三保松原に天女が羽衣を纏うて天降つたと云ふが、余は此天女こそマニラ美人の漂流し來たつたものと斷定するのである』興に乗じて滔々盡くる所を知らず、談漸く南洋の入口マニラにて既に豫定の一時間に達す。會主後より『先生、他の辯士の都合もありますから、もう十五分位に南洋の話をお願いします』『ウム、宜しい』と。是より話頭一變して十五六分間に、南

洋の氣候、風俗、物産等極めて要を得たる説明して降壇されたには、聴衆一同非常に感嘆した。何時も博士の演説は専門の講義は別として、冒頭に於いて十分に聴衆の感興を惹き、透かさず主題に入て極めて要を得たる説明をさるゝのが例である。

▲博士の嚴父晋君は、極めて俊嚴奇峭、古武士の風あり、一家を率ゆるに最も嚴肅であるさうだが。斯かる家庭よりして此の如き圓滿玲瓏、滑稽洒脱の人が出られたのは、最も不思議とせねばならぬ次第である。蓋し博士は夙に古武士の教育を受けられ、其粹の粹なるものを會得せられたるにや。全く博士の如きも、稀に見るの辯才と云はねばならぬ。

(一五) 谷 干 城 子

己ミナ得ヌー——結果がキツクワ——孔子崇拜——赴々武夫國家干城——學者覺也——人不知而不愠——柄にない口調

▲子も上院に於ける雄辯家である。其態度が頗る謹嚴で、其口調も方言の「己ミナ得ヌー」キツクワ（結果）が非常に目立つけれども、言語が明晰で、又莊重でもあつて、例の熊本籠城以來の氣節が、自然と辯舌の上にも現はれるから、子の演説を聴く時は、思はず襟を正すのである。流石安井門下の高足だけあつて、大の孔子崇拜で、常に座右から論語を離された事がなく、外出される時もこれを懷中されて居る位で、處世の方針を知り、智力を養ひ、人格を高むるには、論語に就て之を求むるの外、他に道がないとまで云つて居らるゝのである。従つて議會に於ける辯論にも、その他いづれの演説講話にも、十三經十子中の或一節を引用されぬ事はない。就中論語、書經、詩經は最も多く出るのである。

▲夫故子の辯舌は至つて速記し易いけれども、漢籍の素養のないものには、到底十分には書けない。嘗て初期の議會の頃であつたが、子の軍備問題に對する演説中「赴々武夫國家之干城」と云ふ語があつた時に、詩經の初を開ければ直ぐあるものを、其速記者に漢學の素養がなかつたので、其文字を當嵌めるに窮したと云ふ話を聴い

て居る。世の中で速記者と一言に言ふが、速記者程學問の要るものはない。日本は歐米の如く、各種専門の速記者がなく、各種各般の辯論を速記するのだから、淺くとも可いから、博く何の學問にも通じて居らなければならぬ。

▲子が神田の斯文學會で、いつも論語を反覆講説せらるゝ時に、其卷頭なる『子曰學而時習之。不亦說乎。有朋自遠方來不亦樂乎。人不知而不慍不亦君子乎』の三節に最も重きを置かれる。子の説に『學と云ふ事は、朱註の學之爲言效也は不可ない。これは説文に學者覺也とある。覺ると説かなければならぬが、人不知云々これは朱註の方が是いと思ふ。根本博士は、學而不厭、誨人不倦の語を引いて、人不知云々を人に教ゆる事て説明されるが、さうてはない。人不知と云ふは。人間は利益名譽の爲めに學問するのではない。學は己に在り、知ると知らざるとは人に在るので、人に名を知られず金錢を得る能はざるも決して苦にはせぬのである。慍らずとは煩悶せず忿怒せぬのである。所が今の學者を觀、青年を見るに、皆學問を以つて富と名とを得るの具として居るから、其弊や言ふに忍びざるものがあるが、論語の首章

の如きは、最も時弊を救ふに適當の教訓である』と言はれて居る。子の經を説くに専ら大義を旨とし、字義訓詁の末に拘泥せぬのは嬉しい。

▲子が餘りに論語を擔廻らるゝので、ヤレ時代遅れだの、思想が古いのと云ふ人もあるが。案外歐米の事情にも通曉されて居て、自身でも斯う云つて居られる「僕は外國語の素養が餘り深くないから、十分に原書は讀めぬが、翻譯書は勉めて多く讀んで居るし、又家の書生に外國の書物や雜誌類を翻譯さして讀んで居る」其爲めか時々演説の中に、柄にない西洋口調が交る事がある。然し子が豫算問題其他で、政府委員と衝突し、又反對論者と辯難攻撃せらるゝ場合は、嚴然たる態度で、案を叩いて叱咤し、なか／＼後へは退かれぬのである。それに子は人情に厚く例の谷村計介の話などさるゝ時は、涙潜々として下るのが例である。全く曾我子と共に、貴族院の名物男たるを失はない。

(一六) 田尻稻次郎子

▲今は會計検査院へ祭られて了つたが、子が次官時代には、面白い話がいくらもあつた。或人が『君は物識だから多知(田尻)』だと言たら『イナ、零(稻次郎)だ』と答へたと云ふが、萬事が其調子で、北雷先生、生れは薩州ださうだが、今でも薩音がなかく、抜けず。毎も講義をする口調で、全然議員諸氏を生徒扱ひさ。妙な癖で『ケレバ』と云ふ所を皆な『クンバ』と言ふ。『徴收しなクンバならぬ』説明しなクンバならぬ』これを繰發される。基金法案か何かの時に、四分間ばかりに、七つのクンバに出會つたことがある。速記者は残らず之を速記しなクンバならぬ。

(一七) 細川潤次郎男

▲男の辯舌は取立つて云ふ程の事もないが、非常に骨董癖があつて、書齋の鑑定眼がある。其辯舌も、諄々として兒孫を諭すが如き口調のうちにも、

何處となく滋味がある。それに『ゴザイマス』を『ゴザースル』と言はれるので、一寸滑稽に聽える。『本員は此の議案に賛成でゴザースル』唯今の説には反對せねばならぬので『ゴザースル』聽衆は『如何にも御尤でゴザースル』

(一八) 鳩山和夫氏

二十年一日の如し——態度と調子と音聲——人相が柔和——諧謔的
的口調——飄逸なる辯舌——軽く受けて投出す手際——穩健圓滿

▲博士も亦辯論界の一雄將たる事は言ふ迄もないが、演説の速度は餘り速い方ではなく、先普通より少し速い位の所である。一體人の辯舌と云ふものは、年を経るに従つて、速度が加るか、又は減るかするもので、博士の以前校長であつた早稲田などでも、浮田和民氏、天野爲之氏、高田早苗氏の如き、皆十年前とは非常に差違を生じて、普通の速度であつたものが、現今では非常に速力を加へて、以前の通だと思つて速記すると、飛んだ狼狽する。博士の辯舌は二十年一日の如く、依然とし

て變化せず、今も昔も速度が同じ事だから、速記者からは謳歌されるのである。
 ▲全体演説振と云ふ文字が、甚だ漠然として居るが、先演説には、態度と調子と音聲と、此三つが揃はなくては、如何な名演説でも大議論でも駄目だ。勿論論旨の筋が好くなくては仕方がないが、マア論旨の善悪を評するとは吾々の領分外だから、何んとも言ふことは出来ぬが、態度が軽卒であると、其演説全體をぶち壊して仕舞ふし、調子と云ふか抑揚と云ふか、其の呼吸が拙いと、折角の議論がノッペラボウで、少しの感動をも與ふることは出来ぬ。

▲それと音聲だ。音聲と云ふものは先天的だから、習つても出来ないと言ふ人が有るかも知れぬが、餘りキイ／＼聲でもいかず、ドラ猫の如き聲を絞るのも、甚だ聞苦しい。國訛りや方言で固めた演説は、如何に熱心にやつても同情が少ない。

▲そこで博士の演説は、此三拍子の中で、態度と音聲とは申分はないが、其調子に一種の愛嬌があつて好やうなもの却て此愛嬌の爲に、威嚴を殺はせぬかと思ふ。博士の御人相が如何にも柔和であり、其上口調が諧謔的があるから、演説の重みも

幾分か減じはしないかと、心配して居る人すらある。

鳩山和夫演説振



▲某政客は「博士の辯舌は如何にも飄逸である。此飄逸なる辯舌を以つて、眞面目なる重々した議論を、極めて軽く受けて投出す手際は、恐らく三百議員中、

博士に及ぶものは一人もあるまい』と評されたが、全く其通りである。

▲又博士の講義としての口調は、實に旨ものである。非常に學生を喜ばしめる事は受合で、眼尻を下げて論破せらるゝ呼吸などはながく巧みなものだ。これは實に博士の肩書のあるために面白く聴かれるのではない。全く講義としては、確かに満點以上のものである。それに英語演説は流石に本場仕込みだけに、頗る旨いもので日外早稻田でブライアン氏の招待會のあつた節、校の廣庭で博士がブ氏の紹介を基語てやられたが、なか／＼巧妙なものであつた。要するに博士の演説は穩健にして圓滿なものであると云へば間違なからう。

(一九) 鳩山春子女史

(上)

鴨越を汽車で馳下りる様な早口——言葉が半分切れて居る——口調が呼吸に依る——ツル／＼と飲込める——以上は極く大要——先天的早辯家——是から五ヶ條を順次説明します——一時間に六十枚

久振て春子夫人の演説を聴いた。以前は愛國婦人會や其他の會で屢々演説をされたが、近來頓と演壇に立たれない。所が珍らしくも、去秋、神田の青年會館で催された國光社の女子學術講演會に、女史の名が見えたから、早速拜聴に出掛けて、速記する手筈にした。

▲女史の早口は有名なもので、以前随分速記で泣かされて居るから、今度も其覺悟で、鉛筆も二ダース削り、紙も十帖が程準備して往つて、さて速記して見ると。相變らず早い早くないのつて、鴨越を汽車で馳下りるなどは、逆も醫にならぬのだ。それに言葉が皆半分切れて居る『私は久しく演説などをね……致した事は……けれども今度の御會には是非出ると……丁度社の方が頼みに御出に……其時宅で大層客がありました……取込んで……大層御待せ申したので……餘り御待せして……御氣の毒でね……據なく承知しまして……今日上る事に致し……所が社員の方がそれは難有うと……歸つても仕舞なすて……別に演題など極めた譯でも……マア母の責任くらゐが宜からうと申してね……所が此處には母の務めとなつて……責任と務めとは一寸違ひますけれども……』と云つたやうに餘り早いので、語尾まで

ちやんと言終はらぬうちに、跡からくと言葉が出て来る。書いて見ると一寸變だが、聴いて居ては決して耳觸りにはならぬ。其の口調が如何にも呼吸に嵌るので、意義明瞭、サツサくと進行して、些の滯滞もなく、聴衆には、恰も蕎麥好が蕎麥を食ふ様に、ツルツくと美事に吞込めて了ふ。

▲此時も女史は、浴々述去り述來つて、凡三十分程も饒舌られたかと思ふ頃、ちよつと一息休かれたから、余の胸中では定めし「私も久振で演壇に上りましたのでありますから、先今日は此位で御免を蒙ります」と來るだらうと思つて居たら、何のく、女史はなかく此位で止めらるゝ御方ではない。懷中から小形の洋紙へ認めた草稿を取出し「さて皆さん、以上で極く大略を御話しましたが、唯今此紙へ母として心得べき事項を、凡二十五ヶ條程書いて參りましたから、これから一々第一より第廿五まで、順を追つて御話しやうと思ひます」と來た。

▲驚くべし、これから廿五ヶ條を順次に演説されては、約一時間掛からう。こりやア堪らぬと、同道した新手の速記者と交代したが、一體に女史の演説は、一種妙な調子があつて、速記し悪い。其上圖抜ての早口であるのを、速記者の責任として、一語も漏らすまいとするのだから、容易ではない。其速記者も敏腕家ではあるが、見るとなかく忙しさうだ。全く女史の如きは先天的速辯家であつて、尋常人の企圖すべからざる所である。

▲某速記者は「大低普通の一時間の演説速度は、一枚四百四十字詰の紙を用ゐ、卅枚(十分間の平均速度假字交り二千二百字)乃至三十六枚で、極めて遅いものは二十五枚(十分間の平均速度千八百三十三字)速きは四十枚(十分間の平均速度(二千九百三十三字)前後に達し、甚しきは一時間に六十枚に(十分間の平均速度四千四百字)に達するものもあるが、春子夫人の演説の如きも、まだ詳しく計算して見ぬが、速辯であるから言葉の分量が多く、確かに六十枚には達するであらう」と言つて居た。

(下)

下田歌子は伊藤公——春子夫人は大隈伯——能辯と能辯との舌戦——
まるで火花が散るやう——死ぬより苦しい——藤栗毛と最急行列車
——日本三早口——今一段の習練——速記料の改正——寶の持腐れ

▲下田歌子女史の辯舌が、八面玲瓏、華麗豊富、ハツと派手な所が、伊藤公に似て居るとすれば、春子女史の辯舌が、氣力あり、機鋒あり、然も其縱談的なる所が、殆んど大隈伯に髣髴して居る。故に辯論界に於ける、鳩山夫人は大隈伯であつて、下田女史は伊藤公であると言つても可からう。女史の能辯なる、演説でも、座談でも、他を壓倒して敵手をして、一切口を開らかしめざる程の饒舌家たる事は、世間誰知らぬ者のない位だが、之れに就いて面白い話があるから、ちよつと素業抜く。

▲嘗て本郷美術學校で、藤田文藏氏と佐藤しづ子女史と、校長の更迭があつて、學校で評議員會を開いた折、何か議論に花が咲き、女史は前校長藤田氏の爲に盛んに氣焰を吐き、現校長佐藤氏側の島田三郎氏と議論を闘はしたが、流石の島田氏も女史の爲めに受太刀となつて、面倒と思はれたのか、遂に沈黙して了はれたが、女史

は尙益々辯論を續けられて、高談雄辯四筵を驚かす所ぢやない、満堂呆氣に取られて了まつたと云ふ。イヤ島田氏と春子女史、早口と早口との論戦であるから、其烈



しい事は、全く火花が散るやうで、これを速記させられた時は死ぬより苦しいと思つてあつたと、某速記者は語つて居た。

▲所が鳩山博士

は英語演説こそ、本場の亞米利加でも持嘶された程の旨さだが、邦語演説の方は、至つて緩くりした辯舌で、尤も法廷では、餘り早口は損で、博士位の辯舌が極く手

頃ではあるが、夫人は又正反對に特別の早口だから、其對照が至極面白い。これを譬ふれば、和夫博士の方は、東海道五十三驛を卅日も掛つて、膝栗毛で道中をするやうだが、春子夫人の方は、何しても、最急行列車で、新橋から神戸まで、十一時間て馳付けると云たやうな、早い、忙しい、急しい、眼の廻るやうな辯舌であるのだ。確かに女史の辯舌は島田、坪井其他の能辯家と角逐して、一步も退けを取らぬ速度であるから、改めて速記者より、島田、坪井(正五郎)兩先生と、春子夫人との三方へ『日本三早口』の稱號を奉呈したいと思ふのである。

▲女史の談に『私が演説をするに云のは、夫や倅に對しても、又世間へ向つても、生意氣のやうでありまして、誠に耻かしく思ひます。それに家庭の方へ力を専らにしなければならぬので、此三四年は何處から御頼みがあつても、御断りして居ました。が、まだ此先倅達の眞の獨立の出来る迄は、私も餘り演壇などへ立たぬ積であります。それに私が演説に慣ぬから、あゝ急ぐのだと、夫から申されて居ますから、今少し習練をして掛らねばなりません』と言はれて居るが、然し令息の一郎氏も各

譽ある卒業をされて、社會へ立たれて居るし、もう家庭の方も左程女史の御世話も入るまいから、これから盛んに演壇に立たれるのも宜からうと思ふ。
▲尤も女史がイザ辯論界へ打つて出られるとなると、我々速記者側では、速記料規定表へ、早速左の但書を加へずばなるまい。

速記料規定表

- 一 著述翻譯の速記 (一時間) 金三圓
- 一 會議一週間以上のもの (一日) 金十圓
- 一 會議、演説、講義、談話等の速記 (一時間) 金五圓
- 但鳩山春子夫人に限り五倍 (一時間) 金廿五圓申受候事
- ▲イヤこれは申戯だが、何しろアノ位立派な辯舌を、空しく藏つて置かるゝのは、所謂寶の持腐であるから、國家の爲め女子問題の爲めに、盛んに其の長早舌を揮はれん事を希望して止まぬ次第である。

(二〇) 田中正造氏

質問演説——詰問演説——明治の佐倉宗五郎——廿分以上の演説——老翁と兒孫——顔色茄草魚の如し——咆哮怒罵——是てもかく——煩る痛快——同情に堪へぬ

▲今では議員ではないが、兎に角一時尾鏡毒問題では鳴らしたものだ。其演説振も實に手に入つたもので、黒木綿の牡丹餅火の五つ紋に小倉の袴と云ふ扮装で、茫々と鬚を生じ、髪も梳らず、ツカ／＼と演壇に上つて、破鐘の如き聲張上げて、質問演説をする時は、辭色共に勵しく、抑揚も柄鎖としては、如何にも呼吸に嵌り、政府の奴等が／＼と云ふ口調で、質問演説は變じて詰問演説となる。尤も質問演説なるものは、實を云へば、詰問的でなければ成功せぬのであるが、初期議會以來、幾百の質問演説もあつたが、氏程に成功したものはありはしない。恐らく今後と雖も有り得難いてあらうと信ずる。

▲氏は明治の佐倉宗五郎と稱はるしだけに、鏡毒問題でも、近くは谷中村事件でも、

田中正造氏の演説



田中正造氏

それは／＼なか／＼熱心なものであつた。現に議會の速記録が證明して居る。氏が一度壇に上れば、必ず三十分以下で止めた事はない。尤も演説としては、一問に就いて、少くも三十分以上儻舌ならなくては、所謂三寸の舌頭、對手の急所を衝いて、活けつ殺し

この活劇を演出するの妙味が出て来ない。所が三十分以上儂舌ると云ふ事は、餘程難かしいと見えて、貴衆兩院を通じて、三十分以上の演説をする人は多くない。況んや二三時間に渉る演説をやる人は、先づ數ふる位である。

▲所が氏が毒鏡事件に對する演説は、いつも三十分以上であつた。嘗て十四議會當時の速記録を調べて見た事があるが、三十分以上儂舌つた人は十二三人しかないの
で、雑と二十五分の演説が、速記録の二頁と見積る。スルと、

- 井の角 議院法 二頁十八行
- 島田 學制調査 二頁二十行
- 議員瀆職 二頁強
- 地方自治質問 同上
- 星松 街鐵問題 二頁半
- 利光 議員瀆職 三頁弱
- 佐々 京釜鐵道 三頁弱

- 尾崎 議員瀆職 三頁弱
- 石黒 鐵道國有 三頁
- 花井 行政裁判所定員及兼勤 三頁二十四行
- 根本 選舉法 三頁十八行
- 龍野 三稅復興 五頁
- 大石 外交質問 五頁
- 同 三頁弱
- 田中 鐵毒一件 二頁
- 同 三頁半
- 同 四頁強
- 同 六頁半
- 同 四頁

斯うやつて見ると、氏は立派に五頁以上の質問が、皆二頁以上に涉つて居り、六頁

から傳舌つた人は、他に一人もない。他に又かくと嫌はれる程、非常なる意氣込、非常なる熱心を以て居られた事は、速記録を見ても知れるのである。

▲氏の演説振は三段に變化する。初めは白い髯を撫で、ニコ／＼然として、老爺の愛孫に向つて媚々する如き態度を示し、音聲も割合に優しく聴えるが、漸次進ひと一轉して顔色茹章魚のやうになり、辯舌も頗る速度を加へて、威すが如く、賺すが如く、叱するか如く、罵るが如く、更に再轉して果は咆哮怒罵至らざるなく、政府當局者の喉首を引締め、殆どこれでもかくと云ふ如き概を示す。實に痛快極まつたものである。氏が鐵拳を揮つて、拍案一番する所、其の昔、後藤象次郎伯や榎本武揚氏なども皆怖毛を慄つたものである。眼中に大臣も次官もあつたものぢやアない。況んや地方の知事をや、小吏をやである。氏が満腔の熱血を瀉きたる、足尾問題も谷中村事件も、氏が所期の萬一だも達する能はざるは、數の免かれざる所とは云へ、誠に同情に堪へぬ次第である。

(一一一) 澁澤榮一男

天下の能辯は澁澤——演説のチヨニ／＼走り——疾窮つて溼生ず——
——貝原益軒の口調——論語が能く出る——辯舌より事柄が價值

▲男は實業家中唯一の能辯家である。男と兄弟分であつた故福地櫻痴居士も、常に男を褒めて『天下の能辯は澁澤だらう』と言つて居られた事がある。居士も随分能く饒舌つたが、長崎辯で何うも分り悪くい所があつた。筆も立ち想もあつて人だが、饒舌る事は男に及ばないやうに思ふ。男の語氣は、頗る莊重で、而も源泉滾々、流て盡さざるが如く、此の澁滯もなく、スラ／＼と往つて居る。實に一字一句も無駄のない、演説自から文を成すと云ふ風で、其結構は百戰練磨を経たる智將が、臨機應變、種々謀計を廻らし、面白い戦を見せるやうな工合なのだ。

▲男の演説の缺點は、少し早口過ぎるので、肝心要の所が充分聴衆の腹に入らぬ憾がある。全體から云へば極く早いと云ふ方ではないが、然し一分間四百音以上は確

かだ。それに時々チヨコくツと恐ろしく早くなる。此チヨコく走りの時に、發音の明瞭を缺くので「避ける」と言はれる場合に「下げる」と聴取れる。「國家」か「國

一〇〇

澁澤男の演説振り



庫」と聴える。

▲男の演説は餘りに能辯の爲めに、

ちよつと聴くと、紛糾錯雜、秩序も

なく、段落もないやうだが、速記し

て見ると、主意も

あつたが、恰も蹊躑つて徑生

能く貫通し、條理もあり、脈絡もある。語塞つて又活路があり、恰も蹊躑つて徑生するが如き觀がある、又口調が比較的平易だから、爺さん婆さん達にも能く解る。今少し緩やかであつたなら、見ぬ昔の事ではあるが、貝原益軒先生の口調が斯様な

風だつたらうと想像されるのである。

▲男の態度は際立つた癖もないが、唯、右の手を擴げてヒヨイと胸へ當てるのと、右手を握つて棒の如く前に突出されるのである。これは以前擊劔の稽古をされた癖が失せぬのであらう。それに演説の前置が長過ぎる位で、他には別段癖がないやうだ。尤も氏は論語を好まれるので、演説の中にも能くそれが出る。

▲余が男の演説を速記した内では、明治三十八年十一月富士見軒に開かれた、東京經濟雜誌乗竹社長の披露會と、早稻田の二十五年紀念會のとが最上出来だと思つた。乗竹氏就任披露會の時は、阪谷、島田、大隈三氏の演説もあつたが、男の一番際立つて旨く聴えた。早稻田のは、祝詞の朗讀のみ多く、大隈伯は主人と云ふ關係で、平生のやうに雄大には往かなかつたので、男の演説が、非常に引立つて好く聴えた。要するに氏の辯舌は抑揚あり波瀾あり、自から一種の體をなして居る。又其辯舌よりは、其事柄に非常の價値があるので、兎に角一異彩を放つた演説振であるのだ。

(三三) 江原素六氏

(上)

ゆつくりした演説——全く靈界の人——融通が利く——自家の経歴
談——眞摯直截——枯木も山の賑やかし——なかく如才ない

▲氏の演説程速記者に謳歌されるものはあるまい。純粹の江戸辯で、首尾明瞭に聴え、聲に幅があつて、速力も左程早くなく、ゆつくりして居るから、是程速記好い事はない。音に速記者許りてはなく、聴衆に取つても、氏の辯舌程聴取好いのは尠からう。それに大抵の人は、其辯舌が政治方面に向くかと思へば、文學又は宗教其他の方面に不向きであるし、文學の講話又は説教などに向くものは、兎角政治演説には不向きなものだが、氏の辯舌は是等の何れへも向くから重寶だ。

▲政治演説をさせても、頗る穩健雄渾で、誠に堂々たるものた。説教をさせても、純然たる牧師の風があつて、背こそ餘り高くはないが、白髯を撫して、謹嚴正直の態度で、講壇に立たる時は、何うしても靈界の人としか見えな。漫ろに青年の師父として、崇高敬虔の念を起さしむるのである。其他文學上の講話、教育上の話説一として可ならざるはなく、目今の辯論界に於て、氏程融通の利く人は先づ他にあらま。

▲氏が各方面に於ける演説講話は、いつも其豊富なる自家の経歴談より説起さるから、誠に興味の津々たるものがある。然も其口調が、眞摯直截の中に滑稽を交へらるから、一種言ふべからざる妙味がある。昨夏、青年會館で東京市内聯合青年會の開かれた際に、氏は會長として「世の青年に告ぐ」てふ題にて演説されたが、なかく其口調が面白。

▲「一體日本の文明は悉く青年の力て成功したのであります。今は元老と云つて、老の字が付くが、維新前後から明治の初年へかけて、日本の文化に貢献した人々は、皆客氣満々たる青年であつた。是迄の文明が、青年の力て成功したと同様に、是から先きの日本の文明も、是非共青年諸君の力を借らなければ、決して成功しないのであります。(拍手起る)夫故私は青年諸君を深く尊敬し、又青年諸君を深く愛するので

あります。

▲青年と青と云ふ字は、如何に立派な販やかな字でありませう。四字に譬ふれば、春風駘蕩として、百花爛熳、妍を競ひ華を争ふが如き観がある。所が私の如き老人は、霜枯れの、葉も落ち、枝も枯れ、風物轉た荒涼たる老耄である。此老耄——枯木が、諸君の様な青年の間に交て居るのは、如何にも可怪事と思はれるか知らぬが、私一向に可怪とは思はぬ。何となれば枯木も山の販やかしと云ふから……。

▲私も維新の當時は廿六才でした。廿六才と云へば最早青年とは云へまいが、然し三十以前の年少者が、日本全國の責任を双肩に引受けて、其進歩發達を計つたのは實際であります。徳川政府が外國の關係上、何うしても開國の國是を執らなければならぬことになつたのは、實は幕府も弱かつたのでせう。伏見の戦争には幕府が負ました。其負方が如何にも江戸見流の負方で、思切つて負けました。(笑聲起る)防ぎもしなければ、盛返もしない。思切つて負けました。と、露骨に、率直に、洒落など雜せて述べられ、續いて自家の經歷を面白く敷衍して言はれるので、氏の

演説は、いつも聴衆の氣に入つて、拍手の響きは堂に満つるのである。先生もなか／＼如才ないぢ方だ。

(中)

氏の口癖 『然し、併し乍ら、苟も』——これはこれは——以前の吃る癖——江原なら何時でも来る——常に自分の經歷が語る理由——驚くべき精力

▲氏の言葉癖としては『然し』併しながら『苟も』の三つが多く出る。以前は五分間に一度は吃度此三つの癖が出たものだが。今では大に少くなつた。又氏は來客に接せらるゝ時に、應接室の入口から『ヤ、是れは／＼……』と云ひながら入つて來れる。尤も此『これは／＼』と云ふのは、江戸士人中流以上の口吻で、『これは／＼、能う御出になりました』と云ふ其口調が、何となく溫和篤實に聽えて好いものだ。又氏の辯舌は、七八年前迄は何うも少し吃るやうな所があつて、演説でも座談でも、一寸聴取り悪い所があつたけれど、今では其癖も失せて、いくら耳を澄ましても吃る所は少しもないやうになつた。

▲氏の談に『僕は諸方から講演の依頼を受ける時に、これは是非僕が出なければな

らぬ場所て、始めから僕に頼まうと云ふ考へて来たのではないと思つて居る。もう最初に博士とか名士とかを頼んで廻つても、なか／＼忙しくて承諾してくれないので、最後にそれなら江原にしよう。江原なら何時でも来るだらう位で、二三ヶ所廻つた後に、僕の所へ頼みに来るのだと思つて居る。然し僕の如きものが、演説に招かれて往くのは、自分では名譽と思ふから、いつも時間がありさへすれば、少しも勿體振らずに承諾して往く事にするが。然し問題はなし、辯は納るいけれども、出来得る限り少／＼なりとも、國家の爲めになるやうにと、及ばずながら考へて居る。

▲さう云ふ方から解釋すれば、僕は成るべく辯舌を磨き、材料を豊富にして、多數の人から喝采を受けやうとは思つて居らぬ。唯自分より年の若い人や、智識の低い者に、いくらなりとも益のあるやうであつたならば幸と思ふ。夫故常に自分より智識の少ない人を目的として講話するのを方針として居るので、知人などからはお前が演説をするのか、年寄の癖に止せば好いに……などと言はれる位で、僕などの天保時代の人間を、立派に演説の出来るものと思つて居られては困る』

▲又氏の持論では「僕は演説の材料には、それは西洋の豪い人の事も多少知つては居るが、世間の人が餘りに西洋の事許りを擔廻るから、少しは日本人の事を話すのも宜からう。然し自分が見た事も聞いた事もない生噛りの人物の話をするより、自分の事が一番好い。人は自分程能く知つて居る事はないから、



高慢にならぬやう、粉らず飾らずに、露骨に有りの儘自分の事を話すが一番だと

思ふ」

▲世の中に氏程調法の役者はない。昨年の事だが、濱松へ招かれて高等女學校で教育講話をされ、夜に入つて同地の教會で本多庸一氏と共に説教をされ、翌日午前七時濱松を出發し、同九時静岡師範學校で講話をし午後二時より同所の高等女學校で講話し、夜は同所の教會で説教し、又其翌日静岡を發して、正午新橋へ着され、家へも歸らず直ちに麻布中學の生徒を監督して日光へ旅行し、翌日歸京されたのは夜の十二時。電車を芝の山門で下りて、もう俵はないので、大きな鞆を自ら肩にして十町もある坂道を、學生の眞先きに立つて従歩で歸宅され、翌朝ちんと五時に起出で、終日來客に接せられる。是から政治演説でもやれと云へば、辭せずして直ぐ出掛けると云つて居られた。イヤ其精力實に驚くべきものである。これだもの、今の學生を柔弱た、弱虫だ、もつと蠻カラになれ〜と言はれるのも無理はない。

(下)

感化力——舊幕時代の家庭——戸摩子禎の開閉に注意せぬは敗家の相なり——下司の一寸野呂馬の二寸馬鹿の丸明け——婦人の地理學は己れの屋敷内を明かにするにあり——美濃紙二枚で鴨の料理——子供の守も出來ぬ女學生

▲余が始めて氏の鳥居坂の邸を訪問した時。坂を上つて半町程往つた右側の、山崎別邸と表札打つた嚴めしき門構への中に、同家の書生とも覺しき、十五六の少年が頻に箒もて落葉を掻集めて居たから「余は江原先生の御宅は何處ぞ」と尋ねた。スルと其少年は極めて素朴なる口調で「オ、それは俺の學校の先生だ。ホレ坂を上つた左の角に、(自轉車にて此坂路降るべからず)と書いた、白い棒杭が見えるだらう彼處を左へ折れると、中學の寄宿舎がある。其處を又右へ入つた隅の家だ。ドレ、俺が一所に往つて教へて遣らう」

▲今までポツリ／＼位の雨が、急に本降となつたので、彼の少年は遽て、奥へ飛んで行き、態々傘さして出來り、余を案内して來れた好意は、感謝に餘りある事であるが、余は同時に氏の徳行が、誠に人を感化するの力に富んで居る事を感じた。所

が辯舌も其通るりて、花々しく、烈しく、人を激刺する側ではないが、着實眞摯なる中に、確に感化力があるのである。

▲氏の演説中に「今の女學生は、學校生活計りして居るので、家庭の事などはカラ駄目です。私の家へ戀意な者から頼まれて、某女學校の卒業生を家庭見習として置いた事がありますが、まるで行儀とか作法とか云ふ事は無茶です。私の家は、舊幕でありますが、武士の家庭はなか／＼今の人の想像以上の嚴格なもので、私の家なども矢張嚴重でありました。第一秩序と云ふものを非常に尊ぶ、座敷はいつも掃除が届いて、庭に草が生へたり、縁側に塵一つあつた事はない。押入の中までも人に見られて恥かしくない。衣類夜具は何れも正しく畳み、枕は紙をかへして、油の附かぬ所が出してあり、敷布の洗濯、糊の剛軟、火熨斗の加減まで周到綿密に注意したもので、臺所の流板に、澤庵の切れ端、飯粒など決して落ちて居ない。

▲物置には炭や薪の積方、明俵、古細の始末まで整ひ、洗濯物の乾方も、早く取込み、少し濕つて居る時能く伸して畳み付け、更に又乾かすから、極めて工合よく皺が伸びる。それを棒鱈の如く乾かして、口に水を含んで霧をかけて伸ばすのは、頗る不經濟だ。其外物の焼方、焼たり煮たりする炭の積方、薪のくべ方、などもなか／＼作法のあるもので、又戸障子襖の開閉に注意せぬは、敗家の相なりと太田錦城も言つて居り。又昔の家庭の諺に下司の一寸野呂馬の二寸馬鹿の丸明けと云つて、戸障子のピッタリ閉らぬ程見つともないものはない。

▲處が私の家へ置いた女學生は、是等家庭の作法は一向に知らない。英國の諺に婦人の地理學は己れの屋敷内を明らかにするにありと云つてあります。唯學校で修業して科學的智識が如何に立派に講釋が如何に堪能でも駄目です。唯今割烹が大分流行して、お料理の稽古をするが、偶々女學生に烏でも料理させると、臺所中血だらけにして騒ぐ、昔の旗本の家内などは美濃紙二枚で鴨の料理をしたものだ。

▲又其女學生は小兒の守一つ満足に出来なかつた。小兒が二階へ上つて危険いから後から其女學生が押えてくれるのは宜いが、小兒は坊一人て上るのだから、押えるなく／＼と云つて泣く。イヤ危険ないから押えなくては往けませんと小兒に理窟を云

ふ。小見は解らぬからワイ／＼泣く。其處へ私の伯母が来て、坊や好い兒だ。伯母さんも一所にも二階へ連れて往つておくれと云ふから、小見は自分が伯母を連れて上かるのだと思つて、悦んで伯母の手を引いて上る後ろから、密と帯を押えて落ちぬやうに加減して居る。今の女學生は斯う云ふ呼吸を知らない。

▲又男子もさうだ。商業學校などを卒業して、始めて會社にても採用されて、重役室へ用でもあつて入る時の態は、何とも言へぬ片腹痛い風がある。我々の青年時代は、禮儀こそ守るが、さうヒヨ／＼頭を下げたものでない。僕等の成長した時分を考へて、今の若い人達を見ると、どうも柔弱過る。偶には蠻カラも可い。唯餘りに物質的にのみ片寄過ぎてはならぬ』と、例の自家の經歷より觀察して、ピシ／＼訓戒を施されるのである。

(一一三) 高木兼寛男

刀圭界中の能辯家——涼風腋下に生ず——一に存精二に藥——頂乘
足熱——果物と發明力——地獄道の苦しみ——往生安樂土

▲男は刀圭界中の能辯家である。醫科と農科は奇妙に辯士に富んで居る、詰り汎く各階級の人を相手とせらるゝのであるから、自然辯舌を練るやうになるのだ。男の辯舌は頗る流暢で、其裡自から豊裕重厚の所がある。速度は確かに一分間四百音以上で、速記者の鉛筆を休める暇のない方である。而して講話が如何にも通俗的で、主意が能く徹底する。風彩も學者風を銜ふ厭味なく、質素淡泊であるから、いくら長くとも倦怠の念を生しない。男の演説を聴く時は、恰も清涼劑を服したるが如く、精神が生々して来て、盛夏三伏の候、蒸殺さるゝ如き會場に在つても、男が演壇に立つて、御得意の衛生講話をさるゝ時は、冷風の腋下に生ずるを覺ゆるのである。

▲男は頗る教育に熱心で、教育の講話と云へば、好んで出演さるゝのであるが、い

つも教育と衛生の關係に就て説話され、大抵は俗語を以つて充されて居る、「一に看病、二に藥と云ふは、舊式の語だが眞理である」とか「頭寒足熱とは能く言つたものた」とか、或ひは桃太郎カチ／＼山などの伽噺を利用して、巧みに衛生上の學理を解説せらるゝのである。世間男の講話に依つて醫學上の知識を得たものは、決して少なからぬ事であらう。宜しく氏に向つて感謝の意を表して可なりである。

▲そこで男の講話が、如何に通俗的であるかと云ふ一二例を示さうと思ふ。男の「果物と發明力」と云ふ講話があるか、一寸面白く。昔の老爺さんや婆さんは、孫が可愛いと云ふので、も前御乳を飲んだ後で梨を食べると腹の中へ白く虫が生くよ。其柿を食べると寐小便が出るよなどと、果物類を餘り食はせぬやうにする。江戸時代の中等以上の家庭では、此類の風習が盛んにあつた。現今でも傳染病流行の際などは、絶対に禁止するから、果物が賣れなくなつて、隅田川に西瓜や瓜が浮いて流れるやうになる。これは惜しいもので、寶を捨てるやうなものだ。それは不熟のものには不可ぬが、十分に熟したものなら食して可い。果物には一種の鹽類——即ち加里

里鹽類なるものを含んで居て、子供の成長するには、身體構造上最大必要のものであるから、是非獎勵して食はせなければならぬ。

▲世界で亞米利加人が一番果物を好む。然して亞米利加人は多く發明力に富んで居る。歐洲から亞米利加に移住すると、子孫に至つて體格が益々偉大になり、腦力も確かになる。發明事業も多くなるのだ。決して風土氣候の關係ではなく、全く亞米利加人は、朝も、晝も、晩も、食後に果物を食ふ習慣があるから、生理上これが體格の偉大、發明力の發達を來す原因であるのです。又尾籠千萬の話だが、婦人達が大便が秘結して五日、七日、十五日も通じがなく、ウン／＼云つて苦しむ場合に、三度々々食事後に梨でも林檎でも食べれば、便秘の爲めに地獄道の苦しみを受ける方も、忽ち往生安樂土に往かれます」と云つたやうな口調だから、老人小供達にも能く解つて、誠に有益のものである。

(二四) 井口あくり女史

(上)

あぐりを嫌ふ——瑞典式體操——千遍一律——活潑な態度——流石は米國仕上げ——洋服が似合ふ——東京七分秋田三分——演説の上乗——三四名のお供——體格が美事——何れあやめか杜若——演説の秘訣

▲先づ女史のお姓名の稱呼から御吹聴申さう。女史姓は井口(ののくち)名はあくりと稱ばれるので、あぐりと濁るのではない。あぐりは英語の ugly (醜)又は angry (忿怒)と通じて、苟も醜又は忿怒など云ふ思はしき文字は、女だてらにあるまじき事だと云ふ、優にやさしき御心から、あぐりと濁るのを痛く嫌はるゝさうだ。然し漢字で書けば阿具利て、又我國從來の習慣で、知らぬ人はあぐりゝと云ふ。

▲さて女史の演説は、いつも『瑞典式體操』で千遍一律、板で押したやうなものであるが、女の體操の先生と云へば、まだ日本では物珍らしいのと、其生々した活潑な態度とて、到る所喝采を以て迎へられ、今こそ少し下火になつたが、一時地方などで、女史のモテ方と云つたら大層なものであつた。

▲女史の體格は、流石米國の體操學校で鍛え上げただけに、萬遍なく完全に發達して、スラリとした姿勢に、清楚たる洋服が能く似合ふ。言語も割合に明瞭で、女史が何時も演説の冒頭に「秋は秋田の出生でございますから、定めし方言が出て、所々お聴取り悪いてございませうが、其點は幾重にも御免しを願ひます」とお断りになるが、然し案外に方言も出ない。先づ東京七分秋田三分と云ふ調子であつて、却つて東京のペラ／＼辯より、此位の所が重みがあつて好いやうに思ふ。それに女子特有の痾走つた聲で、臆面なくスラ／＼とやられるから、聲が隅から隅迄徹つて、男の癖に、グズ／＼口の中て言つてるやうな演説よりも餘程好い。先づ女子の演説としては上乘の方であらう。

▲女史が地方へ出張する、場合には、何時も三四名のお供を連れたまふ。いづれ高師の女生徒か、女史の塾生中の一粒選てもあらうが、揃ひも揃つて體格が美事で、血色も好く、舉動も活潑ではあるが、疎暴の所は無論ない。肅然として女史の傍に

井口あくり女史

侍るのであるが、やがて女史が壇に上ると、お供の女生も亦其傍の椅子にズラリト並ぶ。何れを菖蒲、何れを杜若、引きもわづらふては、少しく誓へが違ふだらうが「瑞典式體操で仕上げた女子を見る、何と立派だらう」と云はぬ許りの御自慢がほの見える。而して女史の壇上に立たれたる風姿と相俟つて、何となく一種の光彩を放ち、朴訥なる地方人士は、演説を聴かぬ先から、此光景に氣を吞まれて了まふ。女史や又なか／＼に、演説の秘訣を解して居らるゝのである。

▲女史の氣質は、誠に活潑で、男優りてはあるけれども、流石に女性であるから、兎角女子の通有性たる感情と云ふ事に贏い。従つて演説の中にも、感情的の言葉が多く、他の噂を大層氣になさるゝ人様は何と有仰るか知りませぬが、私は斯う考へる』とか「世間で私の事を轉婆々々々と有仰るがそれは酷であります」とか「男子は一言に女小供と云つて、女子を小兒同様に取扱ふ」とか、又近來は「私の演説も大低何時も同じ事であり、世間で兎角私の陰口を有仰るから、私ももう可厭になつて、此會へ出席する事も強て御断はりしたのであります、今度は校長からの命

令で、是非往つて來いと云ふ事てありますから、已むを得ず上りました次第で。」

井口あくり女史の體操演説

「私ですら斯うやつて見上げるやうになります」



と云つたやうな事を言はるゝのである。

▲成程女子として世間から夏蠅く兎や角評はるゝのは、堪えられぬ所もあらうけれども、餘り其様事は氣になららずに、紛々

毀譽我無關焉と、ツンと澄して己れの信ずる所を行つて居らるゝ方が、却つて奥床

しくもあり、他に攻撃の材料を興ふるやうな事もないだらうと考へる。

▲女子の演説は先づ體育に廣狹の二義ある事から説明される「體育と申しましても其範圍に廣いと狭いの區別があります。廣い意義から申せば、體操、遊戯は無論、擊劍、柔道、すべて身體を働らかす事を體育と云へませうが、狭い方の意義では、生理的訓練的の二要素を備へたる體操、遊戯の二つに限られて居りまして、私共の申す體育とは、此狭い方に屬するものであります。成程、劍術、柔道等も筋肉の發達を計る上に於て、可いかも知れませぬが、身體各部の調和を計るの體育法ではありませぬ。現に擊劍師柔道師に、肺病胃病者等のあるのは其證據であります」

▲次にそろ／＼瑞典式體操の効能が始まる。「現今の運動界を見渡しますると、體操にも種々の式がありますが、獨逸式と瑞典式とが、體操の目的及効用の上に於て完備して居ると考へます。私は三年間米國の體操學校で、苦勞して修業致しましたが、米國では夙に瑞典式の長所を認めて、全然これを採用して居り、世界の重なる國でも、現に獨逸ですら、瑞典式の優つて居るのを認めて、其長所を採つて居ります。文

部省の體操調査會からも、私に種々御相談もありまして、遂に瑞典式を基礎として、新式體操を編成せられたのであります。私も是迄研究に研究をして見ましたが、獨逸式も強ち捨てたものでもありません。瑞典式の方が亦一層優つて居るやうに思はれます」

▲次に「近頃は矢鱈に新式體操とか、日本式體操とか名を命けたものが出來まして、全て體操としての價値のないやうなものでも、少し形式が異つて居ると、世人は之れを目して彼も瑞典式、是も瑞典式と誤認して攻撃し、爲めに瑞典式は非常の冤罪を負はせられて居るのであります」と慨嘆され。更に竿頭一步を進めて、氣焔は愈々揚る。

(下)

ホーツマウスと體格——額に手をかざして見上ぐる眞似——和辻博士の駁論——日本の盆踊のやうなものだ——口あんぐり

▲女史は論歩を進めて「體育の一日も忽にす可らざる事は言ふ迄もないのであります。日本人は急務中の急務として體育に努めなければなりません。少し申し悪くい

事でござりますが、ポーツマウスの日露兩講和大使が、相對して談判して居らるゝ繪畫を御覽なさい。一は嬌小、一は長幹、私は見る毎にゾツとする程恥かしく思ひます。此體格の相違の爲めに、事實上の利害に毫も關係がなかつたとは申されずまい。何うしても日本人は、最も力を體育に用ゐて、ズツと立派なる身體を造り出さねばならぬと思ひます」

▲終りに「それから女子です。何うも日本の女子は例の引込思案で困ります。女子の體操と云へば、世間では御轉變だ、婦徳に缺けるとか何とか有仰いますが、大誤解です。元々體操は生理的訓練的のものでありますから、却つて行住座臥の動作にまで節制を與へるものでありまして、身體を強健にし、意志を確固にして婦徳を缺く處か、反對にこれを養成します。眞正の賢母良妻が出来るのであります。又母親の體格が好くなければ、健全の小供も出来ませぬ。女子高等師範學校へ入學して來た始めは、如何にも弱さうな女子でも、私が預つて體操で仕込みますと、二三年の内筋肉も美事に發達して、背も私ですら斯うやつて見上げるやうになります」と、

少し體を斜にし、右手を額に翳して、見上げる態をされる。

▲「胸が引込んで腹が出張つて、背踠のやうに猫背な女は、到底社會に立つて活動も出来ませぬし、立派な小供も生ませぬから、私は世間から何んと云はれても、飽まで献身的に、女子體育の爲めに、及ばずながら力を竭くす積りてあります」と、紅の如き氣焔を吐かれて降壇される。

▲所が世の中は妙なもの、女史が熱心に主張せらるゝに拘はらず、一方には瑞典式體操をケナす人がある。昨夏、叡山講和會で和辻醫學博士か「井口女史は頻りに瑞典式體操を擔廻るが、あれは日本の盆踊のやうなもので、誠に詰らぬものだ。小供が手球を突くのや、村の若衆が濁聲張上げて不恰好な手付で、盆踊を踊ると一般、探るに足らぬものだか、女史がこれを聴いたら定めし口あんぐりであらう」と駄洒落を云はれたさうだ。負けぬ氣の女史の事だから、いづれ何所ぞの會で、此反駁論があるであらうと、余は今から其速記をするのを楽しみにして居る。

(二五) 横井時敬氏

農學博士中の辯士——萬語て聲が漏れる——大聲は俚耳に入らず——
領袖一分陣笠九分——貴賤貧富皆天賦——小農論者——講話が通
俗的

▲博士も又農博中の辯士である。九州辯をつくりて、素朴な中に壯麗の所もあり、
語尾なども明瞭に聽える。それになか／＼多辯で、いつも二時間に近い演説であつ
て「私の演説は少し長くなるかも知れぬから、其積りて聽いて下さい」と云はれる
のが例である。それに博士は常に再齣て惱んで居らるゝから、演説中も大層氣にさ
れて、聲が少し漏れるやうな所はあるが、然し聽悪いと云ふ程でもない。

▲博士の辯舌の速度は先づ一分間四百音位であつて、決して遅い方ではない。一體
農科の側には、流暢な快活な然も通俗で、能く主意の徹底する辯舌の人が比較的多
い。余は不思議に思つて、これを博士に質したるに「我々農學を修めた者に辯士が
多いか少ないかそれは知らぬが、然し外の學問と違つて、農學の方は相手が農民で、

新らしい學理などは知らぬ昔の頑固一方の人達に講話をして聽かせるのだから、餘
り高尚な事許り言つて居ても不可ぬ。大聲は俚耳に入らずで、何うしても通俗的に、
然かも其言語が明晰で、噛んで含めるやうに、手に取るやうに話さなければ効用が
ないのだから、何しても辯舌を練るのである。平生から多少演説に就いての工夫を
凝らすのであるから、自然饒舌家が多いのかも知れない。私なども以前は、演説
の法則は斯うだとか、抑揚波瀾が何うだとか、種々考へてやつたものだが、今では全
て放縱になつて了まつて、自分でも愛想が付さる位だ」と謙遜されて居る。

▲博士の人物養成論が面白い「世の中の親達は子供を養育するのに、お前早く大き
くなつて豪い人になれ、豪いものになれと云ふ。これが抑々根本からの誤である。
天下の人が悉く豪いものになつたら、夫れこそ大變、一日も社會の秩序が保てやし
ない。世の中は領袖株が一分、陣笠連が九分あつてこそ好いのだ。教育の目的と去
ふものは、漫りに豪い——千人に豪れ萬人に傑れたる人のみを造るにあらずして、
社會の一分子として、身體強壯、意志強堅、獨立獨行して、人の厄介にならずに飯

を食ひ得る人間を造らねばならぬのだ。何でも人は他の厄介にならずに、世を渡つて往く考を持つて居らねばならぬ』言、平凡ではあるが何處となく旨味がある。

▲博士の所謂日本小農論も亦有益なものである。「歐米の大農を見た眼で日本の小農を見ると、何如にもケチな小つぼけなものだ。歐羅巴邊の大農となると、一人て數千町歩を所有し、嚴然たるシロス(城)に住まつて、蒸氣機械などを据付けて、盛んに耕作して居る。然し日本などの土地の狭い國では大農は往かぬ。何處迄も小農が可い。又大農で器械力を使用すると、人の手を借る事が尠くなるから、田舎の農民が都會に出て職を求むるやうになる。都會の不潔な空氣で壯健な農夫も身體が弱くなる。従つて國も弱くなる譯だ。所が日本は從來小農で、健全なる農民が多數だから戦にも強かつたのだ。何處までも日本は小農で、農夫の多數が都會に入込むのを防遏せねばならぬ。健全な農民が多數なら國家も健全な道理である」誠に至言と云ふべし。

▲博士の演説が餘りに通俗的なので、時として學術上の見地より彼是批評を受けられるやうだが、それは議論にはならぬと思ふ。殊に演説の巧拙を論ずる標準にはならない。比較的高尙なる學理を如何に無學なる農民にも、克く了解し得る様にといふ主意で演説されるので、乃ち氏の演説は能く氏の主意に適したものである。

(二六) 成瀬仁藏氏

遅い方の極端——言葉が美的でない——乾燥無味——簡單々々の聲起る——一種犯すべからざる風——生氣あり趣味あり

▲島田氏を速い方の極端の例にすれば、氏は其反對に、遅い方の極端の例にして可いのである。氏の演説の速度は非常に遅い、言語と言語の間が、確に二分や三分隔つて居る。氏がエーと發音するものが、三十秒位はかゝる。其代り言葉に強みがあつて、遅いだけそれだけ力があるやうに思ふ。語尾は明瞭に能く聴こゆるけれど、言語が美的でないから奇麗に往かない。流麗とか雅致とか云ふ所がないから、乾燥無味、至て蠟を嚼むやうである。それに氏は兎角出嫌ひて各所から講演の依頼も、

大低は断はらるゝのが例である。滅多に出演されない。

▲氏の長所であり又短所であらうと思はるゝのは、其意志が強い爲か、言はんと欲する事を言盡さなければ止まぬ癖がある。夫故或場合には、假令高貴の方々の前ても、二三時間に渉る長演説をさるゝ事がある。女子大學で講話會を開く際なども、其説を盡さねば已まぬから、同校數千の生徒は慣れて左程にも思はぬが、來賓は兎角倦怠を來す事がある。

▲現に昨年五月、横濱の第五回關東聯合教育大會の席上で、氏は「女子教育」と題して演説をされたが、例の乾燥無味の口調で、一時間以上の演説をされたので、聴衆は漸く倦んで、滿堂何となくザワ／＼し始めた。教育會など云ふものは、會員が大低は教育に従事して居る人々であるから、演説を聴いても、漫りに拍手喝采したり、ヒヤ／＼／＼／＼などの聲を放つものが尠なく、神妙に謹聽して居るのである。

▲所が此時許りは、他に三輪田眞佐子、高田早苗、高木兼寛等の諸名士が控へて居

られて、時間の餘裕も尠なかつたのに、牛の歩みの如く徐々として然かも蠟を噛む如き辯舌で、纒々數千言、何時果つ可しと思はれないので、流石に聴衆も堪へ兼

ねたと見え、期せずして八方より「簡單々々」の聲が盛んに起つたにも拘はらず、氏は一向平氣なもので、益々尊嚴慎重の風を現はし、毅然として、言ふだけ言はねば已めぬぞと云ふ如き態度で、それから又數十分間續けられたのは、簡單々々の聲を放ちながら、敬服した

成瀬仁蔵氏の演説



らも、密かに氏の意志の強健にして、一種犯すべからざる所のあるのに、敬服した人も尠くはなかつたやうである。

▲氏の演説は、聴くと云ふよりは、後て其速記を讀んだ方が價値のあるやうに思ふ。就中氏の御得意なる亞米利加流の女子教育論と來れば、論理も明確で、秩序段落も整然として法に適ひ、材料もなかく、豊富なものである。聴いては飽きが來るが、讀んで見ると、生氣あり、趣味ある事他に餘り類似を見ないのである。

(二七) 竹越三又氏

(上)

常世三ハイカラ—少し氣取る—聲が黄ろい—立派な撰手—
宋史の趣味—演説の墮落—言語の吟味

▲當世三ハイカラの稱空しからずて、氏の演説は其態度が、左手を屈し右手を垂れ、演壇に聽立せらるゝ内に、何となく氣取る所がある。尤も氏自身では氣取らるゝ積りではなからう、恰も尾崎學堂氏が勉めて嚴正の態度を装はんとする爲めに、氣取屋など、酷評を下さるゝと同じく、氏を以つて氣取ると云ふのも、蓋し傍人の僻目でがなあらう。

▲然し氏の音聲はもう些と太いと可いのだが、惜い事に少し細い。従つて俗に云ふ聲の黄ろい所がある。尤も此黄ろいのがハイカラのハイカラたる所以かも知れない。抑揚とか頓挫とか云ふ調子は、是は申分ない、又氏は文學的素養が深いから、言語に雅趣があり精彩がある。言々句々盡く洗練を經來つて、俗に云ふアカヌケがして居る。ソツがない。其内に又緻密精刻の所がある。演説といひ、文章といひ氏獨特の妙味ある事は、實に天下一品である。

▲氏の支那史に通曉せられて居る事は、殆ど誰れ知らぬ者もないが、就中宋史には最も精通され、又宋時代に趣味を有せらるゝと見えて、いつも演説中に宋史の或一節が引合に出る。西洋の歴史も無論出る。氏の辯舌は可なり速い方だが、敢て速記し悪いといふ程ではない。けれども今云ふ通り歴史上の事柄や、學問的の言語が多いのだから、速記を翻譯する際、文字を當嵌めるのに困難する。素養のない速記者では到底十分に速記し得ない。従つて氏は演説を一つの文學として、聴いて面白く、又書いても後世に遺るやうにせねばならぬと勉められて居る。唯其場限り喝采

を得れば可なりと云ふ主義は、極めて排斥せられるのである。

▲氏はそれに就いて斯う云ふ事を言はれて居る『從來議會其他の演説が、極めて文學上の趣味に乏しい。演説を一つの文學として遺すとか云ふ點よりすれば、殆んど詰らぬものにしてしまふ。グラットストン、ジスレリーなどの演説を見れば、思半ばに過ぎるであらう。日本の演説は如何にも文學上の價值がない。故に是から成るべく學問のある人が議員になつたならば、さう云ふ點より演説の墮落を防ぐ事が出來て面白からうと思ふ』

▲又演説には、言葉を能く吟味しなればならぬと云ふ説であつて『世の中で言文一致と云ふが、文章をして成るべく言語に接近させたいと云ふのは可いが私は今少し言語をも文章に近寄らしめたいと思ふ。日本人の演説は詰らぬ、面白くないと云ふ缺點は何處にあるかと云へば、人の力量——學問にも依るだらうけれども、一つは言語に甚だ力がない。其言語をしてもう少し意味のある、力のあるものならしめたならば、これを以て直に文章とする事が出來やう。言文一致を唱ふるには、

文章のみならず、言語の方にも、意を留めて改良し吟味せなければならぬ。況んや演説をする場合に、言語の吟味と云ふ事は最も大切であるのだ』

(下)

アルノデアリマス——ノデアル——ゆいに——速記は言葉の寫眞——純政府黨の演説——厚生館が皮切——補綴がまだ背い——聴いても好く、讀んでも好い

▲氏の言葉癖は、演説では『アルノデアリマス』座談では『ノデアル』が連發する。此二つさへ出なければ、外に癖と云ふものはない。殆んど完璧に近い。唯、お國訛りだけは仕方がないけれど、氏は『かるがゆるゑに』と『故に』とを比較的多く使用されるが、それが『ゆゑに』と云へば何でもないが、お國訛りで『ゆゑに』又は『かるがゆゑに』と發音される。固より速記は言葉の寫眞であるから、例令伊藤公でも大隈伯でも、多少お國訛はある。其他の諸名士でも、方言やお國訛りのあるのを、ちやんと速記者の手帳には載せられてあるが、何もこれが演説の巧拙には關係せぬけれども、然し政治界の花形役者として、又彼の位立派な文章を書かれる氏の事であるから、其風采を想望して、尊重愛敬の念を以つて其演説を聞く矢先へ、頻りに『ゆ

イに』とか『かるがゆい』と云ふも國訛りを連發されると、何となく變である。但し速記者の癖に生意氣をと叱られては困る。

▲氏が東大久保に巍然たる西洋館を構えられ、天晴當世の政治家を氣取つて、暇さへあれば薔薇の培養に餘念がなく、大層薔薇に興味を有たるだけ、演説も又薔薇の花の、研を競ひ、芳香を放つが如く、文華精麗、芳香復郁、至つて味があるとはいへ、活潑々地、迅雷疾風の活氣に至つては、少しく缺けて居るやうに思ふ。然し、それは氏は常に純政府黨として演壇に立たれるのであるから、已むを得ぬ次第であらう。

▲氏の演説は、木挽町の厚生館に於ける故新島襄先生の追悼會が皮切で、爾來餘り多くの演説をされないが、これは苟もせざる氏の主義で、漫に壇に上らるゝを厭はるゝからである。氏は演説の前に非常に言語を練らるゝのである。従つて言語に就いては餘程研究されて居る。

▲氏は嘗て斯云ふ事を話された『伊蘇普物語に、狐が葡萄の熟して居るのを見て、喉を鳴らして、飛付いたが届かない。再三再四繰返して試みたが、如何しても届かない。



振説演の氏郎三與越竹

い。遂々腹を立て、此の葡萄は未だ青いと行って、行ってしまつたといふ話がある。それが葡萄が

未だ青いと言へば、英國人には直ぐ負け惜しみの強いとを意味して居る事が解るが、

日本には斯ういふ言葉が餘り無い。それから又日本の言語には、ガギグゲゴの音が尠ない、夫故演説には、甚だ工合が悪い。何うしても議論などには當りが柔か過ぎるのである。然れば此の邊は適當に洋語を交へ、漢語を使用して補つてゆくやうにしなければならぬ。

▲それからもう一つは歴史上の比喩が極めて尠くない。亦これを用ゐる人も尠くない。譬へば三十六年に伊藤公が政友會の首領を罷めて、樞密院へ祭込まれた時に、政友會中で非常に心配した人があつた。けれども我々は此事を如何ともする事は出来ない。決して騒ではならぬ。マルチャルの立場に我々は居るのであるからと言たが。マルチャルと云へば有名な武將で、ナポレオンが莫斯科で大敗を取つた時に、殿の役を勤めてナポレオンが敗軍を纏める事が出来て、兎に角大敗の上で大敗を重ねなかつたのは、此マルチャルの力である。それもマルチャルだから好いので、本多平八郎小牧山の殿では物にならぬ。さう云ふ歴史上の比喩が日本には甚乏しのである。

▲故に演説が悪いならば、畢竟其罪は言語の尠くない事と、自由に言語を使ふ事の出来ないのに歸するだらうと思ふ。それに又文學上の頭のある人が演説するのが尠くないのと、聴衆の學問のないのにも依るであらうが、何うしても演説としては、聽いて面白いのみでなく、書ても價値のあるものでなければならぬ』

(二八) 松本君平氏

(上)

舌を上顎へ付ける——小供の甘へる様——厭味タツプリー——ハイカ
ヲ黨のおん大將——馬上にて演説の腹案を練る——睨み殺さん許りに睨める——ニニューツクホルの應接演説

▲氏の辯舌の速度は可なり早い方であるけれど、左程速記し悪い程ではない。氏は舌の頭を上顎へ付けて發音されるので、丁度小供のあまへるやうな言語で、何處か甘つたるく聽える。従つて一種の稚氣を帯びて居る。氏は二三年前までは、途上いづも腕車の上で洋書を繕いて居られたが、近頃は俵を廢て、馬に代へ、例の鼻眼鏡にカイゼル髯美しく、氏の好みとかにて、薄鼠の中折帽子を意氣に冠り、顯も埋れ

松本君平氏

ん許りの高襟をつけ、丈は五尺四五寸もあらうといふ遅しき白馬に、ゆらりと跨りたる其の風采は、如何にも美事である。正にこれハイカラ黨の御大將、二十世紀の紳士を見よと言はぬ許りの態度があるので、世間からは氣取屋とか、厭味タツブリとか言はれて居る。而して氏は重に馬上にあつて演説の腹案を作らるゝさうである。

▲氏が演壇に上らるゝに當つては、右とか、左とか、又は前とか、一方を睥めらるゝ癖があるので、決して左顧右眎手を振り足を上げるなど云ふ様子が一向ないのである。余は不思議に堪へぬから、此事を氏に質した所が、氏の答らるゝには「イヤ僕は他のやうに、演説する時に、まるで體操をするか、踊ても踊つて居るやうな真似はしない。壇に上ると、先づ一度場内隈なく見渡して、其中の或一人を目標として、渾身の力を眼に込め、其人を殆んで睨殺す程に睥めて演説すると、何となく自分には演説に活氣があるやうに覺えるのである。

▲大分新聞にも書かれたから知つても居やうが、僕が先年米國に往つて居た時分に、紐育の市長選舉の争があつて、チャイナルの主幹ハトストが僕の親友なものだから、應援演説に来て呉れと云ふので、僕は出掛けて往つたが、會場はニエリジックホールで、三萬人も傍聴者があつた。日本人の應援演説は僕が始めてとあると云ふので、物珍らしいものだから、非常に喝采を博したが、僕が生來アノ位多數の

松本君平氏馬上に
演説の案をくつる



人の前で演説したのは始めてとあつた。其時も僕は三萬人の聴衆を一度ズット見渡して、演壇から稍や右方五六間の處に、一巨漢が居たから、それをグツと睨殺さん

許りに睨めて演説したが、何うも一つの目標を定めて、遮二無二それを睨めて居ると、どうも工合が好い』これで氏が演壇上に屹立して、餘り活動的の態度のない理由が解つた。

(下)

一議會に二回——井の角氏を慕ふ——レシテーションとエロキエー
ション——ハイカラ、ハイカラを評す——夫人が揃つて妾物

▲氏が演説と云ふ事に重きを置かる、事は、既に警醒社から『雄辯學』を出版されて居る位で、なか／＼熱心なものである。然し議會では國家の大問題と目すべきものを二つ丈捕へて演説されるので、一議會に二度づゝと定めてある。それに幼時より、井上角五郎氏の演説振を大層好かれて『僕は嘗て井上氏の演説速記を読んで、其口調が如何にも美いと感じたから、氏の演説風を真似て居る。議會で一度井上君の演説を聴たい／＼と思つて居るけれど、惜しい事に井上君は、近來金が出来たので、一向に演説されない』と言つて居られる。

▲中學以上の課程に、雄辯科を加ふべしといふのは氏の持論で『僕は政治學校で、毎月二回づゝ、辯論演習會を開いて、生徒に演説の稽古をさして居る。始めの内は何れも壇に上るのを可厭がつて困つたが、追々慣れて來ると、議論好きになつて、如何に咄嗟に問題を出しても、立派にこれを解説し、演説するやうになる。詰り場慣れがするのだ。一體に日本人は、沈黙寡言を尊ぶ風習があつた。支那などでも辭達する而已とが訥于言敏于行など云つて、饒舌る事を惡徳のやうに云ふのは根本から謬つて居ると思ふ

▲僕は學生の時代に、デモセンスやシセロの傳記を読んで、其如何に辯論を尊重し。苦心慘憺、演説の練習をした事を承知して居る既に西洋では中學以上にはレシテーションの科があつて、セクスピア、ミルトン、ロングフエローなどの詩文を暗誦し、續いてエロキエーションで演説の稽古をする。所が日本には、中學にも高等學校にも、レシテーションもなければ、エロキエーションもない。これだもの、日本に大雄辯の士が出ない譯だ。これから先きは青年者に、ドシ／＼演説をやらせるやうにせなければならぬ

▲「ナニ、望月、竹越二氏の演説振は如何かと質くのか。左様。望月君の演説は非常に身の入った力のあるもので、なか／＼旨いものだが、何うも聲が悪いから他に快感を興へない。三又君の演説は、矢張アノ文章の通りで、前提あり、結論あり、又頗る比喩に富んで居て、辯論界のオーソリテイとして決して恥づる人でない。けれどもこれらも聲がもう少し大きいと可いのだが……」ハイカラ氏、ハイカラ氏を評して、肯綮に當れりと云ふべしである。

▲イヤ辯論のみではない、平生に於いても其通りの氣象であると思ふ。竹越氏は余等速記者が往訪しても、一應々接室へ導き、來意を傾して後習齋へと招ぜられる。咖啡が出る。令閨御手製の西洋菓子が出る。書架には洋書五分、唐本三分、和書二分の割で整然と並べられ、壁間には故陸奥伯の畫像が掲げられてある。夜に入つて氏の談話を速記する場合は、電燈の外に特に燭火を點ぜられ、速記終れば氏は自ら立つて燭火を消される。なか／＼に規則正しく嚴格なものである。松本氏は頗る書生肌で、些の城府を設けず、洋書は室充滿に取亂され、歐米偉人の畫像など多く

掲げられ、滴たる計りの愛嬌を以て客に接せられる。望月氏は唯人をアツと言はせるやうに、萬事が頗る大業である。三氏を並稱するは、少しく其常を得ないとは信ずるが、其人格は別問題として、三氏の辯舌が、各其氣象ソツクリであるから妙だ。▲それに又夫人が揃ひも揃つて豪物で、竹越夫人は才學兼備、琴瑟最も相和し、松本夫人は岡内男爵の女で、温良貞淑を以て聞え、望月夫人は良人御自身が、かよさん、かよさんと敬稱せらるゝにて知るべく、三夫人とも内助の功は大したものださうだ。話が段々横道へ外れるやうだから、此位にして次へ移る。

(二九) 望月小太郎氏

演説は旨い——兎角八百長——身を入れて聴かぬ——夫人に讀んで聴かせる——大業で空々しい——島田尾崎二氏を真似る——

▲高襟黨の随一として、其キザなる事に於て、これまで世間から種々と批評を受けて居られるが、然し演説としては實に旨いものだ。手を舉げ、案を拍ち、左右を顧眄

して、一擒一縦の態度に至つては、上下兩院七百の名士中、恐らく氏の右に出づる者はないであらう。けれど惜いかな、外交の演説などは、兎角八百長であると云ふ評判があるのて、折角の名演説も、身を入れて聴く者が一人もありやアしないなど云ふものもあるが、これは少し酷だと思ふ。

▲然し氏が演説に對しての熱心は非常なもので、先づ速記者に一度速記させて、出來上つた原稿を再三翻讀して、今度は夫人かよ子の前で、演説して聴かせる「何うだ、かよさん、大抵此位で宜いかの」左様です、ア何てしたつけねバルガン半島が何うしましたつて……」「ウム、萬一バルガン半島に戦争が起たならば……」「戦争は文字が雅でありますね、風雲が起つたならばの方が可いてせう」「左様それが宜からう」「地中海が何てすつて……」「地中海の形勢は、我が日本海に髣髴たりである」「髣髴たりであるは口調が悪い事ね、それに髣髴は政治演説としては言葉に力がありませんね、一層我が日本海に似て居りますとした方が、露骨で好てせう」「ウム、さうせう」一々かよ夫人の意見を徴しての後、始めて公衆の前に立



望月小太郎氏夫人に原稿を讀みさす

のなさうだ。

▲氏の派手好きで大業な事は、誰れも知つて居るが。氏が今の聖阪の邸宅は、櫻樹を以て圍繞され、柱は櫻の自然木で、又應接室、書室、寢室まで其裝飾が頗る大業で、三度々々の食卓の上へも、必ず一對の花瓶へ西洋風に花を生け、料理の皿が處狭きまで並ぶ。調物や何かは頗る熱心ではあ

るが、それが濟むと、ア、疲れた〜と御大層に騒がれる。又以前外出の時は、おかよ夫人と二頭匹の馬車で大道を練廻はす。イヤ、ハヤ其大業なる事一通ではない。従つて演説も其の如く、大業にして派手やかなる、他に比類なく、自然空々しいと云ふ缺點が見えるやうになるのだ。

▲氏の演説は、今後まだ上達する餘地があると思ふ。何故なれば演説と云ふ事に就ては、尾崎學堂、島田沼南の二人者を師として居られる。常に此二人者には敬服すると言はれて居る。のみならず三十分なり一時間なりの演説をしての後。必らず其演説筆記を讀返して、發音の悪い點、人に誤つて聴取れるやうな音は、常に直さう〜と頻りに苦慮して居られる。此熱心あつてこそ辯論は上達するのである。今五六年の後には、確かに尾崎、島田二氏を凌ぎ、優に衆議院第一流の雄辯家となるに違ひない。氏の演説は、『鶯溪演説集』に詳しいから、これを讀めば能く分る。鶯溪は氏の號である。

(三〇) 下田歌子女史

(上)

第一流の價值——下田式束髮——下田式被布——頰る厚化粧——花にも優るなりかたち——皺が見える——何とも云へぬ嬌態——頭髮をいぢる癖——さうですれえ

▲女史の人格に就いては、毀譽紛々として、或は女豪傑と云ひ、或は奸物と稱はれて居るけれど、演説は確かに旨い。第一流の價值はある。辯舌が如何にも流暢で、抑揚あり、波瀾あり、興趣あり、情緒あり、態度も又身振りをされつゝ、熱心を籠めらるゝ所は、なか〜旨いものだが、説が佳境に進むと、餘りに熱心が過ぐるのか、身振が段々烈しくなるので、心ある人から見ると、能くまア彼様に空々しく出来たものだ、思はしめるやうになる。

▲女史の演壇に立たれた風采は、それは〜美事なものだ。頭髮は所謂下田式の束髮で、一體に上へあげて結び、扇を出し、鬘を大きくするのだから、中が透過つてトンネルのやうに見える、恰も銀杏返の輪の中が透過つてゐるやうな恰好だ。顔は頗

る厚化粧で、キワズミを以て眉を太く書き、口紅さへ點して、服装は、是も下田式の被布に、黒又は紫紺鹽瀬の袴を穿たれ、澁く質素に見せて、なかく質素でない。何處となく濃艶して、バツと派華やかな所があり、遠目で見ると、妍媚窈窕、花にもまさる風姿、人をして心神恍惚、御光が放して眼も眩む許りて、何うしても十五歳のお婆さんとは受取れない。確に十二三は若く見える。けれど演壇に近接したる速記席から見上げると、哀しいかな顔の皺も見える。如何に厚化粧しても、何となく顔がガサ／＼して、艶氣のないのは已むを得ぬ。

▲女史の持論では「凡そ女子と云ふものは、出来る丈お化粧しなくてはならぬ。極言すればこれが權利でもあり又義務でもある。古語にも女は己を悦ぶ者の爲に容るとあるが、己を悦ばざる者の爲めにも、お化粧をして見せれば、自然其人が自分の命令を聴くやうになる。男子をして自己の命令に服従せしめんとならば、お化粧をするに限る。お化粧なるものは女子の唯一の武器である」成程女史の濃厚とした風采は、艶麗にして且上品であり。又其辯舌と相俟つて、層一層人を服従せしむる力がある。

ある。

▲女史が演説をする時に、妙な癖がある。それは右の手で、例の下田式束髪を氣にして捻らるのである。恰も十三四歳の女子が、頻りに髪を捻るやうな工合で、何となく甘へるやうな、澄すやうな、媚るが如く、すねるが如き、言ふに言はれぬ嬌態である。これはもういつものお定りの事だから、學習院女子部の生徒でも、實踐女學校の生徒でも、女史が髪を捻らると「ソラ始まつた／＼」と私語のが例である。又語尾に「ねえ」か能く出る「さうですねえ——」それからねえ——と云つたやうに、其「ねえ——」を長く引張らるので、ちよつと耳觸りになる。

(下)

お男子方——自分を吹聴する——議論堂々——源語がお得意
涙も亦武器——全て芝居掛り——駭然頭角を抜く

▲女史の言葉癖は、矢鱈にお男子方が——と言はれるのと「私は今度斯う云ふ事を考へました」とか「私の如き學問のない、不辯舌の者をお招きになりまして……」とか「私如きものが、教育家諸君の席末に列つて……」とか云ふやうに、大層御自分の

一五〇
事を吹聴なされるけれど、然し概して癖のないスラリとした演説で、聲も清く透徹るし、婦人にしては、議論がなか／＼堂々たるもので、先づ現代では、女子の演説家として、女史の右に出づる者は一人もあるまい。

▲實踐女學校内に源語學會と云ふが設けられ、一週一回女史は源氏物語の講義をされるが、これは流石にお得意のものだけあつて、文法や古實の調べがなか／＼能く届いて、講義の主旨も徹底し、聴く者皆敬服せぬはなく、女史が如何に國文學の蘊蓄の深いかは、充分に證明されてあり、其講義に一種獨特の長所があるとの評判である。

▲女史は化粧を以つて、唯一の武器と云はるゝが、外にまた一つ女史に武器がある。それは何だと云へば、即ち「涙」である。女史は非常に涙脆い(?)と云はふか、詰らぬ知れ切つた事にも涙を出される。實踐女學校の卒業式などでも、生徒に告別演説をされるのに、さも別れを惜むが如く、潸然として面を上げ得ず、將來の方針など諭示する、場合は、聲涙俱に下り、それは／＼情の籠つた言葉が口を衝いて出

下田歌子女史の演説振



女生徒『ソラ始まつた』

るから、生徒の一部や、地方から来た父兄などは、密かに嘘啼流涕する者すらある。

▲女史の涙が、何うして彼も旨く出る者かと云ふ一つの例がある。嘗て女史の知人が一人の子息を喪つた。所

が其子供は餘り頼もしくない性質で、死んだ方が却つて親の爲めになるので、他の人々は「失禮ですがまあ死亡になつた方が、貴方の爲めてございませう」と慰める場合に、女史は左程痛痒を感じず、同情もないに拘はらず、座敷の入口から轉がる計りに泣き込み「貴方も嘸も力落してございませう、私も何とも御悔みの申さうやうがありません」と散々泣いて見せる。極言すれば全て芝居掛りである。

▲演説も亦其通りで、態度が如何にも巧妙で、或時は尊嚴他を厭するの威を示し、或時は楚々風にも得堪えぬ様をなし、空々しく輕薄の所はあるが、然し何所か一種言ふべからざる旨味があつて、其辯舌の如きも頗る人に快感を興ふるから、平生女史の行爲に慊焉たらざる人でも、其演説を聴けば、全く時の移るを知らず、芝居で云へば、役者が餘り上手に狂言をするので、役者と云ふ事を忘れて、唯、狂言の面白味に見惚れて了ふやうな工合である。誠に女史の如きは當代女流中、嶄然一頭角を現したる好辯舌家であると謂つべきである。惜しい事に若し男子であつたなら、雄辯堂々、機鋒縱横、それは立派なものであらうと、余はいつもさう思ふのである。

(三二) 釋宗演禪師

(上)

多少の街氣がある——演題は無我則大我——聖僧の旗上——宗演坊主の酒量——諸君は盡く拙僧の門弟ぢや

▲師の風采態度は、眼が窪んで眉毛が猫ジャラシのやうで、眼と眉毛の間が著しく蹊を成して居る。鼻は比較的小さいけれど、非常に力の籠て居るやうな形だ。緊く結んだ唇を開くと、頗る長いスキツ歯が見えて、顔面に悽艶の氣が満ちて居る。首を少し傾け、如何にも活氣ある聲を放つて演説され、主意も能く貫徹するが、然し其態度に多少の街氣あるを免がれない。

▲師の御得意の演説は「無我則大我」と云ふので、大抵は此主旨を敷衍し綜合して述べらるゝのであるから、若し師を聘して講演を依頼し、演題の分らぬ場合は「無我則大我」として掲げて置けば、決して間違はない。又た今一つ御得意の演説は、「聖僧の旗上」と云ふのである。其主意は、「廿世紀の僧侶は、須らく破天荒の活動をせぬければならぬ。宗教制度の一大改革をせぬければならぬ。それには公然結婚

として、夫妻相携へて献身的に、傳道布教に従事する熱心がなくてはなるまい。然らずんば到底、佛教の新生命を開く事が出来ぬ。故に若しこれを實行する人あらば、余は之を聖僧の旗上と稱するのである』と云ふのだ。如何にも面白い説ではあるが、



宗釋演説の師

請ふ陳より始めよて、願くば先づ師御自身がこれを實行されたなら、一層面白い事であらう。

▲師は元非常の大酒家であつたが、嘗て上京すべく大船停車場より汽車に乗た時、傍に五六の軍人が居て、盛んに酒の話が

始つた。スルと其中の一人が「イヤ誰が大酒だ、彼が酒飲みだと云つて、此鎌倉に居る宗滿坊主の酒量に敵する者は、一人もありません」と頻りに師の噂をして居るのを、ニコ／＼笑ひながら聞いて居られたと云ふ。其位の大酒家で、頗る元氣があるから、境に上つても、活聲を放ち、舉動が生々して居るのである。然し亞米利加へ往かれる時から、絶対に禁酒して、今では一滴も口にされぬ。

▲師が教育會などへ聘されて講演される場合に、其冒頭に「諸君は教育と云ふ事は學殖もあり経験もあらうが、宗教上に就ては、拙僧の方が餘計知つて居る。宗教は拙僧の専門であるから、諸君から見れば拙僧の方が先生である。師匠であるのぢや。夫故是から甚だ失禮ぢやが、拙僧は諸君を皆弟子と思つて御話する。諸君も拙僧の門弟ぢやと思つて聴聞して貰ひたい」と。先づ數百數千の聴衆を吞んで掛かる所は、實に慣れたものだ、余はいつも敬服して居る。

(下)

キザな金縁眼鏡——ラッセルから貰つた化粧道具——演説が提唱風になる——鎌倉の名物男——禪は福澤が御弟子——

▲師は流石に慶應義塾の出身だけに、英語は頗る達者で、演説中にも能く英語が出る。

又漢學の素養もあるので、言葉は頗る重みがある。然し佛教者としては大いにハイカラで、洋行中常に洋装をして居たが、歸朝後は重に紫の衣を纏はるゝが、金縁の眼鏡が非常に目立つて見えるので、多少キザな所もある。ラッセルから貰つた化粧道具などを、秘藏して居らるゝさうな。けれども日本の僧侶として、外國人に接し、宗教上の論判の出来るのは、先づ第一に指を氏に屈せざるを得ないのである。

▲師の提唱は、是亦有名なもので、普通の提唱とは大に趣きを異にして居る。教理を旨く咀嚼して話さるゝので、サイエンスの頭ある人にも能く嵌るので、學者間にも非常に尊敬されて居る。提唱の時は、例の金縁眼鏡をかけ、餘談に涉る時は眼鏡を外して手に持ち、又講本に向つて提唱する時は、又眼鏡をかけるのが癖だ。従つて演説の口調も何うしても提唱風になる。南條博士のは、説教風になる。師は佛教界の人氣役者で、南船北馬、東奔西走、人からは「宗演は禪宗の本領を忘れて、唯も内職の方に許り奔走して居る」と言はれる位なのだ。

▲師の演説の口調は斯うである「私は禪の問題と云ふ事に就いて御話をするが、一體禪宗と云ふ宗旨は、殆んど物を云はぬのが本領であると云ふやうな有様で、何でもまア禪宗式と云ふならば、山の中に立て籠つて、さうして先づ竹篋口をして、年中何か一つの座禪三昧に従事するのが、禪宗の本領であるのに、私は常に彼地此地と飛び走つて、世間の教相家の爲すが如く、或は講演者のするが如く、其後塵に従つて、迂路々々して居るので、殆んど宗意に背いて居る如くに思はれて居るのです。所が私は一方にさう思はれて居るのは、密かにこれを徳として居るので、私は勿論學者でもなければ辯者でもない。物識でも何でもありません。けれど今日は日本に萬國宗敎大會を開らく世の中で、ブース大將も七十の老驅を提げて、日本へ来る程の時勢だから、我々も唯山の中のみ引込んで居るわけに往かぬので、諸方を飛廻はつて居るのです。

さて禪宗の話であるが、これも若し舊式的に解して了へば、無言で宜い筈。禪宗の話と云つて別に言ふべきことはない。それに付てちよつと思ひ出したが、例へば或僧が如何なるかこれ祖師西來意と問ふと、丙丁童子來求火と答へたと云ふ話がある。

これを支那の言葉で言へば、火の神様が来て、火を求めると云ふ筈なのだ。禪宗の話と言へば、是丈を言つても實は責を塞ぐことは出来る。然し斯う云ふことは又他日専門として御話する場合もありませう」云々。

▲師は鎌倉の名物男で、人が鎌倉へ往くと云へば、宗演さんの所へ教を受けにても往くやうに思はれて、鎌倉と云へば、直ぐ師を聯想するのである。師は嘗て慶應義塾で福澤氏の教を受け、後には福澤氏が師の許へ、禪の話を聴きに往くと云ふ始末で、禪の方では福澤氏が弟子であつたと云ふのは誠に面白い。

(三二) 芳賀矢一氏

早口で語尾不明——雄麗は幽霊——どもりの八助——出るのか、へるのか——文章體の講話——洋々耳に滿つ

▲文學博士芳賀矢一氏の國文學は、世既に定評ありて、博士が學問の深遂、識見の卓越なる事は、余等の敬重する所ではあるが。其辯舌と來ては、如何にも速記者は困難を感じるのである、早口で。少しどもつて、然も語尾が分明でない。聽いて居て

は、左程おかしくはないやうだけれど、イザ書かうとすると、なか／＼これが際立つて分かる。けれども聲に太い所があり、博士が邊幅を飾らざる無頓着の態度と相待つて、其辯舌に莊大雄麗と云ふ點がある。某速記者の戲言に「肝付男のも芳賀博士のも辯舌に雄麗と云ふ所があるが、何うも語尾が分らぬ。尤も語尾が分らぬ譯だ。雄麗は幽霊と通じて、語に足がない。

▲余は博士の講話を速記する度に臆起す一つの落語がある。それは「話稿聞上手」と云ふ冊子で、昔の一口落語を集めた中に「年男」と題して「今年の年男はどもりの八助、さぞおかしからうと云ふ内に、八助は升をしやにかまへて大音聲、フ、神はフ、フ、福は内、鬼は、鬼は、と云へば、鬼が門口からのぞいて、これさ、出るのが入るのか」博士の辯舌は年男の八助程ではないが、多少似通うて居る所もある。我々速記者は、博士の辯舌を、何う速記して可いやら分らぬ事が屢々あるのは、出入に惑ふ鬼の如くである。それに氏の言語に「アリマス」とか「ゴザイマス」とか云ふ助動詞は更にない。「ベンシ」「ベカラズ」の文章體である。尤も常に文章體の講

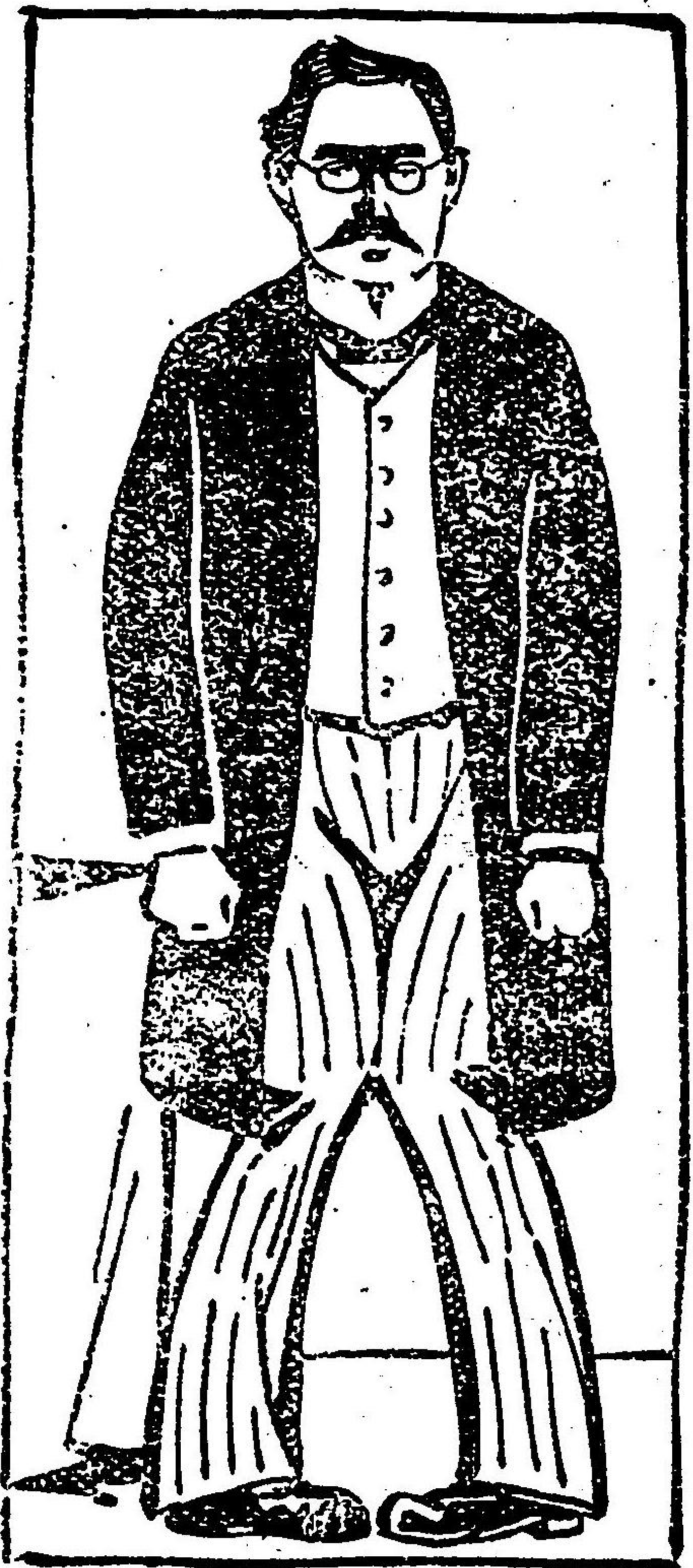
話で、有名なのは、博士と建部田中館南博士とであるが、是等は餘程風変わりである。
 ▲とは云へ、以上は皆な速記者側より観察したのであつて、博士が深遠該博なる講
 話を聴取し、より多くの智識を得んと欲する聴衆には、決して博士の早口であり、
 咄辯である所に氣は付まい。博士の講話に言ふに言はれぬ旨味ある方面にのみに熱
 中して、早口であり咄辯であるのも、却つて洋々耳に滿つる音楽のその如くに聴
 えるであらうと思ふ。是等は全く氏の學問の徳と言ふべきものであらうか。

(三三) 田代義徳氏

整形下科の大家——態度身振の演説——是れだく……聴いたり見
 たりすると能く解る——輸入の速記

▲田代醫學博士は整形下科の大家として、又田代病院長として、有名なのだが、
 其講話は古今無類、頗る妙珍である。博士の辯舌はなかく流暢明瞭でありながら、
 言葉を以て説明されずして、態度身振で説明される。小兒科醫會などで、講話を
 する時に「早産——八九ヶ月で俗に月足らずで産れた兒には。兎角リットル氏病が
 多い。リットル氏病と云ふは、股から膝が内へ曲つて居て、足首も内へ曲つて相對
 して居て、それでビヨココ歩るゝ畸形兒だ」と言葉で説明されず「月足らずで産

り振説演の氏徳義代田



れた兒は兎角リットル氏病が多い。リットル氏病と云ふは……これだ、……」と
 圖の如き態度でビヨココ歩るゝて見せる。

▲股間節脱臼の説明も「股間節脱臼と云ふのは……これだ、……」と兩手で骨の外れ

た形をして見せる。背椎碗曲の説明にも「骨が腐つても、経過が好いと固るけれど遂に不具になる。脊骨が曲つて……これだ、これだ……」と踞蹠の真似をされる。「小兒の畸形を直すのはなかく苦勞なものだ。全體小兒は、乳が飲みたいと云つては……これだ、……小便が出たいと云つては……これだ、……だから治療をするにも餘程注意せぬと、直ぐ……是れだ、……」と何度も両手を眼へやつて泣く真似をされる。

▲其他跛ても首の曲つたのでも、種々畸形の人體を、身振、手真似て、すべて……これだ、……と態度で示されるから、聴いてたり見たりして居ると、實に能く解る。尤も言葉で説明のちよつと爲悪くい形は、博士の如く態度で示されると、是程好い事はない。けれども速記したら全て物にならぬ。唯「これだ、これだ」とあるのだから、何の事やら薩張解らぬ。昔無筆の亭主が女房を離縁するに、牛と鎌と椀（もろかまわん）と繪で離縁状をかいたさうだが、矢張博士の講話筆記も繪入りにせずばなるまい。尤も近頃は大分繪入が流行る。漱石氏の「吾輩は猫である」本屋の廣告に「古本高く買ひ升」など皆字を用ゐずに繪で説明してある。

(三四) 巖谷小波氏

(上)

穩健多趣味——新話術——圓熟玲瓏——聽いて毒にならぬ——紳士、
 文士、色男——活氣に乏しい——號外先きに立たぬ——子供はお寶
 ——細心の工夫——お伽噺其儘

▲明治の少年の叔父さんとして有名なる巖谷氏の講話は、極めて穩健多趣味で、何時聴いても飽きが來ない。氏の洋行前は、辯舌もなかく早く、態度も多少固い所があつたが、歸朝後は非常に辯舌に落付きが出て、態度も頗る調子が好なつたやうである。所謂場敷を踏んで、練熟に練熟を重ねられた結果であらう。

▲近來は新話術など唱道されて、饒舌ると云ふ事には大變研究して居られる。まだ新話術で成功したとは云へまいが、此上層一層研究を研まれたならば、確かに成功の域に達するのであらうと信ずる。

▲氏の性質は至つて理屈が嫌ひ、可厭事を言ふのが嫌らひ、人を攻撃するのが嫌ら

一六四
ひ、圓滿玲瓏人のこれに接すれば如何にも懐しさを覚える。辯舌も又其通りで、少しも圭角のない、當觸りのない、誰れが聴いても毒にならぬ口調で。態度も又一個の紳士として、又文士として、も一つ色男然とした意氣な所はあるが、可厭味は一向になく、人柄な所があつて、講話としては上乘のものである。けれども活氣と云ふ點になると、少し足らぬやうにも覺えるけれど、文學家庭の講話としては誠に上乘のものである。

▲氏は又眞面目で滑稽を言はれる。明治三十七年の秋、神田青年會館で、軍費献納の爲め文士連の演說會を開らいた事がある。諸名士が順を追ふて登壇して、やがて村上浪六氏の番となつたが、浪六氏は壇に登るや否や「僕は生來演說が嫌らひであるから、強てお断はりしたのだが、會主から、唯、顔さへ見せて呉れれば宜いと云ふから、茲で諸君に僕の顔だけ見せます」と云つて直ぐ降壇してしまつたので、聴衆は呆氣に取られて居たが、其次が福田琴月氏の番だ。所が琴月氏はまだ演說の腹案が付かず、いづれ浪六氏が三十分位は饒舌るだらうから其間に考案しやうと、沈

思瞑目、頻りに工夫を廻らして居た。

巖谷小波氏の演說振



▲所が急に起る拍手の響に琴月氏はフト顔を上ると、もう浪六氏は降壇して居るので、何が何やら夢中で演壇に飛上つた。何うやら無難に講話を終つ

て、最後に氏は登壇した途端に、戸外では「號外々々」の聲が盛んに聞えた。スル

と氏は即座に「諸君。何うです、大分號外の聲が聴えますが、定めし又我軍大勝利の報道でありませう。露西亞の人達は案外日本が強いので、止せば宜かつたと後悔して居ませう。アノ號外の聲なんぞ聴かしたら定めし震ひ上がるに違ひない。ごうぐわい先きに立たずてあります」とやつたので、劈頭先づ大喝采を博した。

▲成田幼稚園の落成式の席上での氏の演説は、如何にも巖谷の叔父さんの口調である。「私は唯今御住職石川照勤師の御案内で、お寺の御寶物を盡く拜見致しました。が、然し私の考では、此の御寶物は、唯お寶として保存せられるだけで、まア世の中に左程役に立つものはありません。又年々共に毀損もし消滅もしますが今其處へ並んでお出でになる幼稚園の生徒諸君。可愛らしい坊ちゃん嬢さん達は、先生方が細心工夫して善く教育なされれば、それこそ立派な人になつて、お國の爲めにもなり、其事業も長く千萬年の後まで傳はりますから、私は此生徒諸君こそ立派な眞個の御寶と思ひます。お寺に藏して居らるゝのは、死んだお寶で、此處に居らるゝ生徒諸君は、眞に生きたお寶であります」と云ふ主意で、講話が全くお伽噺をつく

りである。氏は何の講話でも演説でも、必らず小供と云ふ事に歸着するので、即ち氏の本領はいつも小供が相手になつて居るやうだ。流石に巖谷の叔父さんである。

(下)

子供を同化する——大人も笑つて貰ひたい——草稿なしの往當リメ
ツタリ——際物の材料を使ふ——洒落が生きる——妃殿下も微笑遊
ばされた——面目を施す——サア大變——腕を組む——口も八丁筆
も八丁

▲氏の談に「演説と講話とは自から別であるが、又講話と云つても二種ある。第一は普通の講話で、第二は小供や女を相手の御噺であつて、其演方に大變に相異がある。女や小供は同じ様なものだが、小供を相手の御噺は、何うしても小供の後機嫌を取らなければならぬ。學校の先生のやうに威嚴を保つて、これに斯うしては往けませんぞと突込んで駄目だ。何でも劈頭第一に、滑稽で小供を笑はして置いて、小供と同化して、自分が小供の心になつて、小供の身振などして、退屈せぬやうに、時々滑稽を入れたり何かして、御機嫌を繋いで置かなければならぬ。其處へ往くと小供は無邪氣だから、話も遣り好いのだ。

▲唯困る事には諸方から依頼されて小供に御嚙をするのも可いが、其席に大人が居ると非常に弱はる。それも大人が小供と一所に、小供が笑へば大人も笑つて呉れば宜いのだが、小供はゲタ／＼笑つて居るのに、大人は苦蟲を食潰したやうな顔をして居られると遣り悪く困る。そこへ往くと江原素六君などは、アノお年で小供と一所に手を叩いて笑つたり、喝采してくれるから、大層好い。演者許りではない。聴衆迄も小供の心になつて聴いて呉れると好いのだが……」

▲氏は當代文士中で最も多く演壇に親むだけあつて「話方」に就いては苦心慘膽、なか／＼工夫を凝される。然し他の如く草稿を起して叮嚀反覆練習するなと云ふ事はない。演壇に立つ時も決して草稿は持たない、往き當りバツタリ、放縱ではあるが、其代り際物の材料を使へる。洒落も活きて来る。嘗て大日本婦人教育會の講話會で、盛んに例の辯舌を鼓して、講話されて居たが、中頃になつて、總裁閑院宮妃殿下が土方伯を従へられて臨御せられたが、氏は今更に中途から辯舌を故らに謹慎の口調に改める譯にも行かないから、矢張輕妙に流暢な辯舌で、時々滑稽を雜へ

て懸命に話されたので、満場大喝采を博したが、唯お慎しみの深い妃殿下だけは、イトも眞面目で、微笑だも遊ばされなかつたので、これではならぬと、一層勇氣を出して、何うかして妃殿下を御笑はせ申したいと、益々懸命に演説されたので、流石の妃殿下も莞爾としてお笑ひ遊ばし、傍の土方伯に「面白い」と仰せられたので、氏は大に面目を施したとある。

▲氏の言葉癖は「サア大變」と云ふ事が連發される。それが最も低聲で發音される。譬へば「サア大變！電車に乗らうと思つたが、満員でとても乗れない」「サア大變！寒いから早く酒を飲まうと思つたが、餘り爛が熱過ぎて飲めない」「兎角「サア大變」が出る。尤も氏の辯舌許りではない。文章の上にも此「サア大變」が能く出るやうに思ふ。一體に此言葉は硯友社派の人々には多く使はれるやうである。故紅葉山人と廣津柳浪氏を除くの外は、文章や座談のうちに「サア大變」が兎角出るやうだ。其内にも氏と江見水蔭氏と竹内桂舟畫伯とは特別に此「サア大變」を多く使用するやうである。「小説は理想である、現實である、御伽噺は空想である、虚を虚として書く

のだ」とは氏の説であるから、お伽噺に「サア大變」は殆んど附物と云つても可い。

▲氏の態度にも一つの癖がある、それは稍もすると腕を組むのである。講話中に「それを能く考へて見ます」と言ふ言葉があると、ひよいと腕を組んで考へる眞似をする。「それは不可ない、到底も駄目です」と云つては腕を組む。或は手を揉み、或は卓を叩きなど、種々の身振りをされるが、其内腕を組む事が第一に御得意である。然し妙な事には、氏の講話が佳境に進んで、ひよいと腕を組むと、聴いて居る小供も、ひよいと腕を組む。氏が手を上げると小供も手を上げる。詰り小供は話の興味に連れて無邪氣に一心不亂に聴いて居るから、影の形に従ふ如く、知らずく演者のする通りの態度を眞似るやうになるのだ。惜い事には聲が最う少しタツブリあつたら、層一層講話も引立たうと思ふが、兎に角現代の文士中に於いて、口も八丁、手、否、筆も八丁といふのは、氏を措いて他に無いであらう！

(三五) 三輪田眞佐子女史

講話は卅分以下——主義が終始一貫——陽明の學を好む——國學者と漢學者の夫婦——聲の加減と調子が旨い——女史と清水延壽太夫——金指輪に紅裏の衣服

▲女流教育家の巨擘として、世に尊崇せらるゝ女史の講話は其性質と一致して、同情と親切とに富んで居る。女史は山鳥の尾の長々と、一時間も二時間も饒舌らるゝのは大嫌ひで、三輪田高等女學校で、祝祭日の式辭や夏期休業の告別演説をされる時でも、大低は十五分から二十分、公衆の前で講話される時も、いつも卅分以下と極つて居る。

▲祝日や祭日の式場などで、長々と演説される程、辛い事はない。これから緩く遊びふと考へて居る矢先へ、校長や講師の長演説の爲め、十二時の閉會が一時になり、中には演説の途中で切つて、晝餐を済ましてから又其續きをやるなどと來たらイヤハヤ堪つたものではない。來賓にも失禮であるし、演説者其人に對する尊敬の